

特105

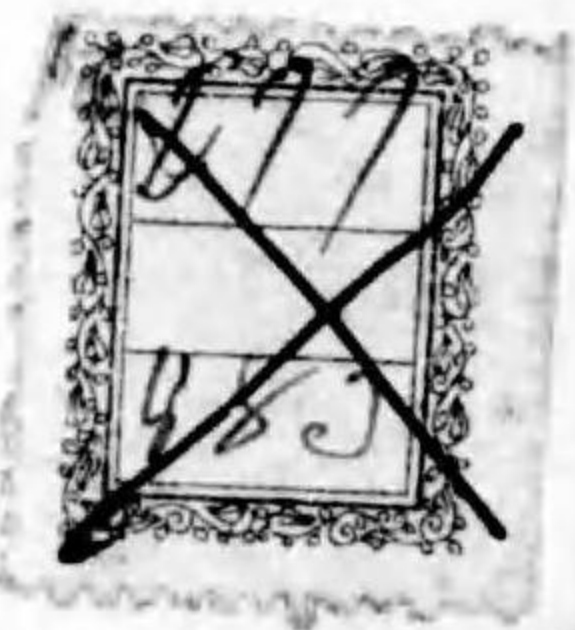
351

古屋鐵石著

獨習自在 自己催眠

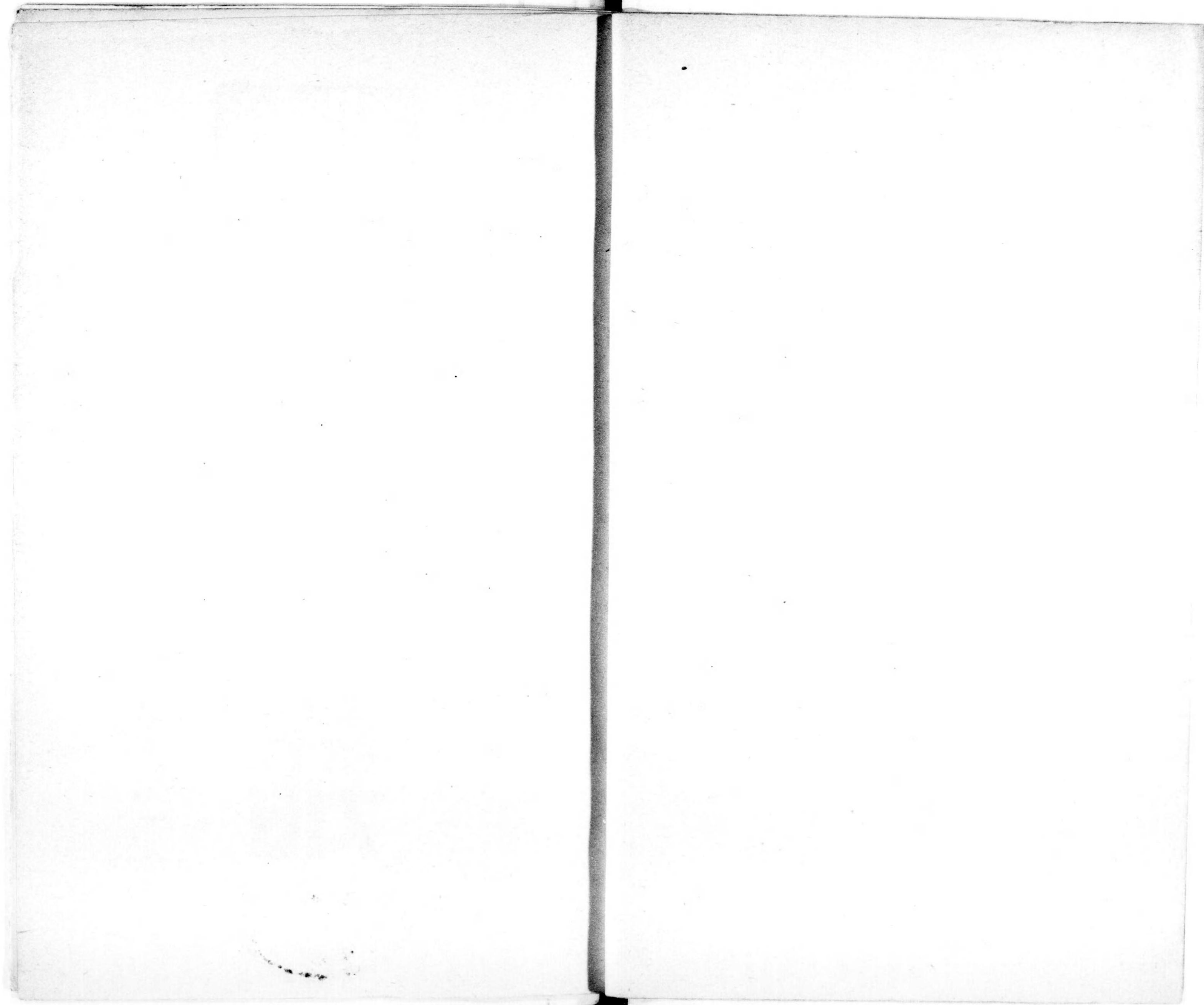
東京

精神研究會



始





特105
35

古屋鐵石著

獨習
自在
自己催眠

東京

精神研究會

大正
5. 5. 20
內交



處るす驗實を術眠催て於に會究研神精



處るすを驗實の術眠催て於に會究研神精

序文

目下帝國議會開會中なりと雖も政府と政友會とが相談出來て大相撲の紛擾と共に手打となつたので、人氣は依然空前絶後の陰謀事件と長尾郁子の千里眼とに集まつて居る、此時此際我古屋學士は千里眼は自己催眠と至大の關係ありとの見地より、此著の再版を企てたのである、其時機を得たる千里眼を待て後に識らざるなり矣。

事實は如何なる場合にも事實なり、余は自己催眠透視念寫等の學理を知らず、然れども外遊中「クリスチヤンサイエンス」や「ホームオブツルース」の信徒の爲す所を自ら習得實驗し、今又精神研究會の行ふ處を見て、自己催眠は云ふに及ばず透視も念寫も可



白己催眠を始めて五年を経た
著者古屋鐵石 (年三十三歳)



白己催眠を始めての著者古屋
鐵石 (年五十二歳)



大正三年の著者古屋鐵石
(年三十四歳)



白己催眠を始めて二十年を経た
著者古屋鐵石 (年七十三歳)

能なる事實を事實として知る、若し夫れ自己催眠して透視も念
寫も出來ざるものとせんか、此書も亦丸龜迄洋行したる大學の
學者連程に下らなき詰らなきものなり、何人も一本を求めざる
に如かず。

余は曾て催眠法律論を讀んで著者古屋鐵石君を慕ひたり、會ふ
て見れば圖らざりき、大學時代に於ける同窓の友ならんとは、君
は余に命ずるに再版の序を以てし、余は之れを快諾し喜び勇ん
で家に歸り、サー序文と筆を執れば書く事更になし、思ふに余は
既に君の催眠術に罹りたるものならん、されど責は塞がざるべ
からず、記して以て序文とす。

明治四十四年一月

米國文學博士

山崎今朝彌

序 文

僕は著者古屋鐵石君とは元同窓の友なりしも、僕は今を去る十
七年前に米國に渡り、殖産に従事の傍ら勉強し、先頃歸朝し古屋
君の宅を尋ねたるに、古屋君が催眠術家となりしには僕は意外
の感に打たれなり、殊に最も僕が一驚を喫したるは古屋君の身
體強壯にして大に肥滿せる一事なり、先年僕が渡米せんとする
折見たる古屋君は肉落ち骨高く多年藥石と親しみ居り、恰も風
前の燈火の如き觀あり、よりて窃に之れが死別となるかも知れ
ずと思ひたる其人が斯くの如く壯健ならんとは實に思ひ掛け
なきことなり。

爰に於て僕は四方山の嘶の中に、古屋君に向ふて、君は如何にし

て斯く強壯となれるや」と質問したれば、古屋君曰く「自己催眠による結果なり、余は初め自己催眠なる者は左迄の効なかるべしと思ひ居りたるも、元來物嗜きなる余は、益々之を實踐するに従て病身が一變して強壯となり、昔日の瘦身が一變して肥満し來りて止まざる故、爰兩三年は肥満せざるやうに攝生に注意せり、之れ其理由は新調したる洋服が身体肥満の爲め着られなくなりしこと數回ありし故、斯ること度ひ重なりては困まる故なり、自己催眠の効は單に治病矯癖に止まらず、一室に居り乍ら遠方の情況を知る如き、死したる人と手を携へて遊ぶ如き、奇妙な現象を自在に起すを得云々と大に自己催眠の効用を述べられたり、僕は心窃に思ふやう、古屋君は存外の法螺吹となれり、然し滑稽の心を以て、自己催眠とは全体如何なる者か」と重ねて質問した

れば、古屋君は眞面目なる顔附にて机邊に散亂せる稿本を手にして示し、之れは余が自己催眠術を大日本催眠術協會に於て講習生に向つて晰せし筆記の大要なり」と僕は益々笑止を忍んで其稿本を三拜して繙き一寸見たるに、意外にも有益な参考となること記載しありし故、其稿本を借りて歸り、第一章より次第に読み初めたるに、讀めは讀むに従つて興味出て合點しつゝ、忽ちにして稿本を全部讀み終ると共に、僕もひとつ自己催眠にて日頃苦しみ居りし神經衰弱を治せんと欲して、稿本に記載せる通りに試みたるに實に容易に催眠状態となり、神經衰弱は輕快せり、よりて益々之を積まは全治疑ひなき大確信を得たり、後稿本の返濟に再び古屋君を訪ひ、僕は古屋君の催眠術に罹りて、從來の思想一變して大に催眠術嗜きとなれり、此稿本を刊行せば需

要者多くして大金儲となるべしと勧めたれば、古屋君曰く「然らば訂正を加へて通俗的となし、一般の人に向くやうにして發行せんと思ふにつき、序文を書き呉れ」とよりて僕は右の次第を有りの儘に記して其責を塞くこととせり。

神武天皇紀元二千五百六十八年六月

松田道雄識

自序

自己催眠は重病を根治し悪癖を矯正し得るのみならず、何等の病癖なき者と雖も精神修養として之を行は、克己心を増し精力を進め、成功の基礎を堅むることとなる。

由是近頃自己催眠に注意せらる、紳士淑女尠ならず、然れども自己催眠法を詳述したる書なし、著者爰に感あり、多年間自己催眠法を數千人に實地教授したる經驗に基き、何人にも直に自己催眠を行ひ得るやふに記述せり、看官若し此書によりて自己催眠とは如何なる者なるか、自己催眠の方法及ひ其原理并に其効果應用法の一班を知り、之を實踐し幸福の人となる一助となるを得ば、著者の望みは足れり。

明治四拾壹年六月下旬

古 屋 鐵 石 識

自獨
在習 自己催眠

目 次

第一章 自己催眠とは何ぞや……………一

自分で自分を催眠せしむる方法 ● 催眠したるや否か催眠の深淺は何によりて判断するか ● 催眠者の精神状態心理的と生理的との兩觀察 ● 催眠と睡眠との異點 ● 催眠状態の精神と坐禪状態との精神

第二章 自己催眠法の原理……………六

心理的には豫期の作用と注意の凝集 ● 生理的には腦貧血と體內諸機能の靜遲

第三章 自己催眠の準備……………九

精神の冷靜 ● 静暗の室 ● 眠具 ● 藍色 ● 無疲勞 ● 食後 ● 温湯の飲料 ● 入浴 ● 運動

第四章 自己催眠を行ふ方法……………一四

方法は原理と合致するを要す ● 單行法と混合法 ● 身體の位置 ● 無念無想 ● 足指曲屈 ● 兩手強握 ● 胸腹の撫下 ● 兩手の撫下 ● 下腹呼吸と數息觀 ● 凝視 ● 壓險 ● 指折と掌字 ● 同時刻の練習 ● 自己催眠不能の人なし ● 奇妙な實驗例 ● 豫期と慾求との別 ● 自己催眠と自己睡眠との區別

第五章 自己催眠を解く法……………二一

解眠の意義 ● 解眠は極めて除々となすこと

第六章 自己催眠の效果……………二四

第一節 自己催眠にて病癆の治する理由……………二四

自己催眠のみの價值 ● 精神沈靜の效果 ● 神佛の靈顯ある

第二節 自己催眠により病癆を治する方法……………二九

第一項 總論……………二九

理由 ● 理想の人となる法 ● 自己暗示とは何ぞや ● 心身相關の大原則 ● 克己心の養成 ● 生理的と心理的との説明

自己催眠の實行 ● 自己暗示の實行(自己催眠實行に際して行ふ自己暗示、朝晝晩の三回手を強握して行ふ自己暗示、歩行しつゝ姿勢を正して行ふ自己暗示、閑暇の折行ふ精神を冷靜にする自己暗示) ● 攝生の實行(實行すべき要點) ● 依他催眠の效果 ● 病癆の回復期 ● 病癆根治の催眠回数

第二項 神經衰弱治療法……………三七

神經衰弱とは何ぞや ● 症候(臆病及び赤面癆、早老、強迫觀念及び苦勞症、心悸亢進、記憶減弱、倦み易き、悲觀、頭痛) ● 原因(先

天と後天と) ●治療法(催眠と暗示) ●攝生法(原因の除去、娛樂、精神の平靜、發聲、家庭の慰安、運動、食餌、睡眠、理想の境遇、便通、按摩、神經の使用、姿勢、休息、深呼吸、冷水摩擦)

第三項 神經病治療法……………五八

神經と精神との關係 ●催眠術と心身との關係 ●神經病の種類 ●治療法

第四項 腦病治療法……………五九

腦病の種類 ●治療法(自己催眠、自己暗示、攝生法)

第五項 不眠症治療法……………六〇

不眠の害 ●催眠術と麻醉劑との比較 ●治療法 ●田村醫學士の説、就床前の運動、就床前の入浴、數息法、足趾を動かす法、就床前の灌腸、腰以下に按摩する、他人に髪又は耳をいぢらせ

る法、枕元に單調の音を發する法、催眠藥を用ゆる法、精神的安眠法、不眠症の根治)

第六項 吃音矯正法……………六九

吃音矯正の自己暗示法 ●攝生法、腹式呼吸、發音の練習、快談、音讀と放歌 ●膽力の養成

第七項 寢小便矯正法……………七〇

自己暗示の事項 ●保養法

第八項 船車暈癖矯正法……………七一

原因 ●余が船車暈症を治せし方法 ●神谷醫士の説、症狀、豫防法)

第九項 眼病治療法……………七六

自己催眠にて治し得る眼病の種類 ●自己催眠法中注意す

べき點●攝生法

第十項 胃腸病治療法……………七七

胃腸病の種類●揉按法●治療法

第十一項 泌尿生殖器病治療法……………七七

催眠術にて治し得る泌尿生殖器病●殊に注意すべき攝生事項

第三節 自己催眠によりて不思議の

現象を起す法……………九七

病癆の治療と奇現象との難易●文字に寫す能はざる機微

第一項 肉体は一室に居り乍ら精神のみ轉地

療養をなす法……………八〇

實驗の根據●田舎に居て淺草見物をなしたる實驗●未亡人死せる本夫と遊ひし實驗

第二項 口寄せ及び乘氣の法(降神術)……………八三

神人合一●如何なる理によつて過現未を豫言するや

第三項 居ながら遠方の狀況を知る法(天眼通術)……………八四

天眼通術とは何ぞや●敵情及び試験問題の前知

第四項 神佛を現はす法(見神佛法)……………八五

神佛とは何ぞや●精神と神佛との關係

第五項 幽靈又は怪物を現はす法(幻覺錯覺)……………八六

幻覺錯覺とは何ぞや●一ツ目入道及び幽靈を現はす法●死せし人或は遠方にある友人と談話する法●品性陶冶と精神修養

自 獨 在 習 自 己 催 眠 目 次 終

自 獨 在 習 自 己 催 眠

古 屋 鐵 石 述

第 一 章 自 己 催 眠 と は 何 ぞ や

自 己 催 眠 と は 自 分 で 自 分 を 催 眠 せ し む る 方 法 な り 即 ち 自 己 一 人 に て 施 術 者 と 被 術 者 と の 兩 者 を 兼 ぬ る な り 催 眠 せ し む と は 何 ぞ や 催 眠 せ し む と は 無 念 無 想 の 精 神 と な ら し む る を 云 ふ 自 分 考 へ の 起 き ざ る 状 態 と な す を 云 ふ 故 に 催 眠 が 深 け れ ば 深 き に 従 て 何 等 の 自 分 考 へ が 起 き ざ る 様 に な る な り 催 眠 の 淺 き と き は 未 だ 自 分 考 へ が 起 き て 多 少 働 く も の な り よ り て 催 眠 に 罹 り し も の と 雖 も 周 圍 の 物 音 未 だ 耳 に 入 る 程 度 の も の あり 此 原 理 を 知 ら ざ る も の は 我 輩 が 催 眠 術 を 受 け し と き 術 者 の 云 ふ 通 り に 手 は 動 か ぬ と 云 へ ば 動 か ざ り し 眼 瞼 は 開 か ぬ と 云 へ ば 開 か ざ り し も 終 始 周 圍 の 物 音 が 耳 に 入 り よ く 記 憶 せ り 故 に 催 眠 に 罹 ら ざ り し と 云 ふ も の あり し も 其 は 催 眠 の 性 質 を 誤 解 し た る も の な り 而 し 勿 論 深 き 催 眠 は 吾 人 が 夜 自

然に眠る睡眠と同じ様に催眠中のことを全く少しも知らざるものなり。自然の睡眠に於てさへ睡眠中に隣室にて嘯をせしことを一々明瞭に記憶し居るものあり。然ればとて目を醒まし居るにあらず。又彼の外科手術をなすに當りて、麻醉劑にて麻醉せしめしものにて、も、麻醉中によく周囲の物音耳に一々聞へ居りながら、少しも疼痛なしに手術を終るものあり。之れによりて前後を知らぬ様、熟睡の狀に陥りて、初めて催眠に罹れりと云ふべきものにあらずして、身心が平常のときと異りたるを自覺せば、既に催眠したるものなり。此程度にて充分に治療矯癖には効あり然れ共此程度にては非常に奇妙の現象を現はすこと能はざるや勿論なり。催眠したるか否や、催眠の深淺は何によりて判斷するか、催眠に罹りしもの、の、状態は、其人の感受性によりて深淺遲速ありて一様ならず、忽然深き催眠状態となるを常とすと雖も、除々と深き催眠状態となる順序を記せば次の如くなり、其順序も人によりて異なるも先づ第一に、平常の状態即ち覺醒の状態とは異りし點を認むるものなり、精神は確乎として居るも、手や足が重くなり、強て動かせば動かぬこととはな

痺して來り、動かさんと欲するも動かすこと能はざる様になり、次には全く何等のこととも知らざる程度となり、覺醒の後に嗚呼何事も知らざりし故に睡りたるかと追想して初めて睡りしことを知ること、恰も自然の睡眠に於て熟睡中何事も知らずして居り覺醒の後に其れを回顧して初めて眠りしと思ふと同一なり。然し自己催眠による、眠は醒めし後に、身體の位置を見れば初め催眠に就くときの姿勢と毫も異らずして居るを本則とす、若し自然の睡眠になれば睡眠中に不知不識手足或は身體の位置を變化するものなるを以て睡眠と催眠との區別を判明するを得。殊に催眠と睡眠とは學理上の根據を大に異にす、其區別點は相對的に比較せば種々あるも最も著しき區別點は、催眠は深くなれば深くなるに從て術者が低聲にて言ふことをよく聞き入るゝにあり、術者が低聲にて手を舉げよと云へば手を舉げ、舉げし手は動かぬと云へば、如何に動かさんとしても動かす、其他術者の云ふ通りになることはよく世人の知る所なり。然るに睡眠者に向ひて言語を發し其言語がよく耳に入る程睡眠は淺きものとするを原則とす、之れ兩者の大に異なる所なり。自己催眠にて眠りしものと雖も、他人來りて意思の交通即ちラポーを附ければラポー

一の事は「催眠術獨稽古」に詳し、其他人が催眠せしめたと同様に、一々云ふ通りとなる即ち暗示に感應するものなり。

四

催眠状態は斯くの如く無念無想にして、何等の自分考へを起さざる状態なるを以て、術者が其手は動かぬと暗示すれば動かぬ筈なしとの反對精神起らずして、動かぬと確信して疑はざる故、脳及び神経は其確信通りに血液及び筋肉を働かして、終に全く其言はれし通りとなるなり。自己催眠の場合には、自分で自分に暗示をするなり、其暗示法は如何にしてするかは後に詳述する積りなり。

催眠状態の精神と坐禪状態の精神とは全く同一なりと余は信ず。兩者共に玲瓏玉の如き何等の邪心なき精神状態なりと余は信ず。佛教哲學の上に云ふ處の眞空、法性、本覺、眞如、涅槃、實體、本體、儒家の所謂天、太極、哲學者の云ふ大我、實在、婆羅門教の梵天、儒家の大極、理學者の自然力、耶穌の天帝、我國の神、佛の不可思議力、眞理、孟子の夜氣、孔子の無名、スピノーザの絶對、ヘーゲルの絶對的精神は皆其體の一面に與ふる假名にして、余の云ふ催眠状態にある精神状態と殆んど同一ならん乎と思ふ。

以上は催眠状態を心理上より見たる所なり、之を生理上より見れば、腦貧血及び體

内の諸機能は靜遲の状態にあるを原則とす。其立證として、秤床とて秤り仕掛けの寢臺に人を載せ、水平とならしめ置き、其人に催眠術を施したるに催眠が深くなるに従て頭部上りて足部下り、又其催眠者を醒ますに従て段々頭部下りて足部上り初めの如く水平の位置となりて全く覺醒せり。而して催眠状態にあるもの、脈膊及び呼吸を檢するに、覺醒時に比して幽かとなり居れり。其他種々の試験法あるも、其は省略す。然れ共前記の實驗によりて、催眠状態にあるものは腦貧血及び體内の諸機能は靜遲となり居ることは明に推知せらるゝならん。

自己催眠を日本に於て始めて研究したるは余なり、余は即ち嗚呼がましくも日本に於ける自己催眠の鼻祖なり、今を去る十五年前に於て余は既に大に之を研究し主張したりしも、去る明治三十六年即ち今を去る五年前に至りて、學者中自己催眠に注意せらるゝものあるに至れり。よりて余は其年「催眠術講義録」の紙上に於て之を寸講述したるとあり、之れ我日本に於て、自己催眠のことを紙上に述べたる、第一着手なり、爾後長足の進歩をなし、今日は自己催眠の語を知らざる者なきに至り、又能く之を研究實踐せられつゝある學者尠ならず、彼の坐禪の流行と共に一大

五

呼物となれり、二者中同じ精神修養としてなすにしても坐禪より自己催眠の方が行ひ易くして効果著し、故に余は自己催眠を勧むるものなり。而して本書の卷末に述べたる治療法は元來醫師以外の素人が自分で自分の病氣を治せんがために行ふ方法を述べたるもの故醫學専門の學者の目よりは卑近と見らるゝならんも、元より醫學専門家に示す爲めに非ざれば其誣は辭せざる所なり、然し醫學を詳しく知りし學者は本書によりて非醫學者の思ひ及ばざる治療法を發見し應用せらるゝことを信して疑はざるなり。

第二章 自己催眠法の原理

自己で自己を催眠せしむる學理上の根據は、施術者と被術者とが別人なる場合と毫も異ならず、之れを詳論すれば此の問題のみにても優に大冊をなすよりて其詳細は専門家の研究に委し、唯此處には自己催眠を實行するに當り、心得置かざればならざる主要の點のみを述ぶるに止めんとす。或論者曰く我輩は自己催眠さへ出來れば其れにて可なり、理論は少しも知るの要なしと云ふものもあるも、其れは御勝

手過ぎる御考へなり、自己催眠は學理の應用なり學理を省みずして應用に成功せんとするは、根を棄て、枝葉を繁茂せしめんとするものなり、豈思はざるの甚だしきに非ずや、よりて一應は其原理を知り置くを要す故に左に其原理を摘述せん。

(一) 自己催眠法の學理を心理學上より見れば、
 (イ) 豫期の作用を第一とす、即ち豫めかゝる結果を得べしと確信すれば心に思ふ通りに身は變化すると云ふ原則によりて、豫め期したる通りの結果を得るなり。我は今斯くすれば必ず眠れ、必ず私の身體の悪しき處は治す、と確く信じて疑はざれば、其確信通りに必ず眠れ、必ず病氣は治するなり。故に若し自己催眠を行ふものがかゝること、催眠する筈なし、眞に催眠するか否や疑はしきも、先づ一つ試みると云ふ如き輕忽の志にて實驗せんか、不結果に終るも珍しからず、之れ不成功を豫期したる故なり、成功を豫期せば必ず成功の結果を得べし、故に此確信を妨ぐる者は悉く排折して、確信を強むる様に工風すべきなり。
 (ロ) 注意の凝集を第二とす、自己催眠の状態は心理學上より見れば無念無想の状態にあるを以て、其無念無想の状態を起さしむる方法が即ち自己催眠法なり、豫

期心を高めて雑念を拂ふと共に、或一物に心を集めて精神が夫れから夫れへと轉々することを止めて居れば、終には其注意し居る事柄をも忘れ、全く無念無想となるなり。

吾人が別に深く感動せざる様の小説、或は雑誌でも見て居ると、自然に眠くなり、何時の間にか眠り居ることあり、之れと其原理は同一なり、自己催眠の法として催眠凝視球を眺めたり、呼吸を算したりするは此理に基きたるなり。

(二) 次に生理學上より自己催眠の原理を見れば、自己催眠の状態にある者は第一に、

(イ) 腦貧血の狀にあり、よりて腦を貧血ならしむる様心理的に精神を冷靜ならしむると共に、手を以て頭部より足部の方へ撫で下くる法の如きは、血液を下方に導く顯著なる方法なり、其他足部或は腹部に注意して、其注意せる處に血液を集め、腦を貧血ならしむる如きは、皆此原理によりたるものなり、次に生理學上第二の原因たる。

(ロ) 體内諸機能の靜遲に就て述べん、催眠状態にある者の血液の運行及び心臟肺臟等の働きは、一般に普通時に比して、幽かとなり居るを原則とす、よりて催眠室

の内外は靜かとなし、感情を高むる如きことは一切避け、勉めて精神を冷靜にし、體内の諸機能を靜むるなり。

催眠は以上四個の原理によるものなり、故に苟も此四條件に反するものは堅く避け、此四條件を完からしむれば必ず催眠するものなり、此原理に合する方法なれば形式は如何なるも敢て問はざるなり、而し經驗上此原理に合しよく効を奏する所の方法あり準備あり、順次之を述べん、

第三章 自己催眠の準備

自己催眠の性質及び自己催眠法の原理に基きて、自己催眠を行ふ準備をなすなり、其要點を擧ぐれば正に左の如くなり。

一、勉めて精神を冷靜に持つこと。

従つて之が冷靜を妨ぐる所の者は悉く排除すべし、よりて、

二、自己催眠室は靜かにして暗きをよいとす。

人の談聲、笑聲、足音、戸障子の開閉の音等、苟くも注意を亂す如き物音はなるべく

耳に入らざる室をよしとす。従て自己催眠を行ふ間は家族の者をして、之等の音を立てざる様注意せしむるを可とす。而し音楽の中にも静音律に属するものは、却て催眠を進むるものなり。熟練なる催眠術家が「ハーモニヤ」を鳴らし被術者を容易に催眠せしむるものあるを以て知るべし。此例に習ひ懐中時計の音を聞くは、催眠を進むる一手段となる。

吾人が午睡をなすに當り、室内明り過ぎて眠りにくき時、手拭かハンケチを眼に覆ひ置けば、直ちに精神静まりて、睡眠することあり。之れと同じく自己催眠をなすに當り、室内明り過ぎるときは、雨戸を閉じ或は窓に幕を下げ其他便宜の手段を盡して薄暗くするなり。前記の例に習ひハンケチを眼に覆ふもよし、夜間なれば光を弱くするなり、光線は成るべく背後より取るをよしとす。又室内は取片附けて成るべく數多の物品を置かざるをよしとす。殊に注意を惹く様の物を置かず清潔にし空氣の流通を圖り、寒きに過ぎ暖きに過ぎざる様に工風すべし、寒暖度を超ゆれば、自然に眠る睡眠も避けらるゝことあるを以て推知すべし。

三、椅子、或は布團を具へ、及、催眠、凝視、球を程よき處へ吊し置く可し、椅子なれば頭を凭り掛ける處のあるをよしとす、横臥の位置を取る積りなれば、夜自然に眠る如く布團を敷き、枕と掛布團を具ふるをよしとす、或は夜具を積みて凭り掛るもよし、寝るなり腰を掛けるなりして適宜に程よく見得る位置に催眠凝視球を吊し置くなり。

四、自己催眠室の物品の色は、藍をよしとす。

藍色は、人の精神を鎮靜せしむる効あり、殊に藍色の光線は魔睡の力あり、獨逸の醫學博士は藍色のホヤを掛けたる電燈を患者に凝視せしめて魔睡に陥らしめ、外科手術を行ふと云ふ、藍色電燈の光線は魔睡薬と同様の効あり、此理に基き余は探見電燈に藍色の硝子を附着し之を實驗したるに奏効著しかりき、簡易に自己催眠を行ふ場合には、暗室に豆ランプを點し、其前に藍色の硝子壘を置き、其壘を透して豆ランプの光を眺むるは最もよし。

心理學者も異口同音に藍色は精神を鎮靜する効あり、赤色は精神を亢奮する効ありと云へり、吾人が目によりて見るも、貴婦人か藍色の洋服を着したる姿、僧侶が藍色の衣を附けたるを見るに、自然に精神靜まるもの如し。よりて余は催眠

術を行ふ室に備へある幕は藍色を以てせり。自己催眠を行ふに色合のことを喋々するは甚だ無用の如くなるも爰に注意を拂ふと否とは、催眠の成功不成功に又多くの關係あるを以て述べたるなり。

五、身体は疲勞なくして精神の爽快なるとき程よし。

夜自然に眠る場合には身体程よく疲勞し居ればよく眠るゝものなり、又前夜に睡眠不足し居りて精神朦朧たるときは直によく眠るゝものなり、自然の睡眠は然りと雖も、催眠は然らず、催眠を行ふ場合には、身体に疲勞なくして、精神の爽快なる折をよしとす、若し催眠を行ふ場合に自然の睡眠の不足或は心身の疲勞等あらんか、催眠に睡眠混するを以て、如何に堅く眠るも暗示の感應なくして催眠術本來の効力なし、大に鑑むべきなり、而し堅く眠りさへすればよひと思ひ居る者、堅く眠れば之れで必ず治すならんとの豫期の作用にて効あることあり。

六、食後一時間を経過せし後に行ふを可とす。

空腹満腹共に可ならず、食後は胃が食物を消化せんが爲め、血液を多く要するを以て、血液は胃に集る、よりて頭部は血液少なくなると、即ち腦貧血の狀となる、腦貧

血は催眠の生理的の狀態なるを以て早く催眠する所以なり。

七、亢奮性の飲料を避けべし。

自己催眠を行はんとする前に於ては、茶、コーヒー、及びアルコール性の飲料をば取らざるをよしとす、既に諸君の熟知せる如く、酒を飲まば放歌高吟するものあり、踊る者あり、濃き茶、又コーヒーを飲みしが爲め夜眠れざるものあり、以て催眠の妨げとなるや明なり、而し極少量の葡萄酒或は日本酒を飲むと、直ちに眠る習慣性のもものあり、斯る習慣性の人は極少量に其れを用ゆるも可なり、又温湯を飲むもよし、葛湯なれば最もよし。

八、入浴後行ふを可とす。

入浴すれば身心爽快となり、血液の順還はよくなると共に心機を轉ずる効あり従てよく眠るゝものなり。

若し入浴する暇なき時は冷水摩擦を全身に行ふも可、止むなくんば手と顔を洗ひ口をそぐ丈にても可なり。

九、軽く運動をなしたる後に行ふを可とす。

自己催眠を行はんとする前に、一寸家を出て四五丁の處を靜かに歩み來りて行はゞ妙なり。其歩む處綠陰なれば尙妙なり。さなくば室内にて鐵鈴を以て二三分運動を試むるもよし。止むなくんば徒手にて體操の眞似を二三分するもよし。以上述べたる準備の各項は思ふに隨て筆を下したる故、順序を失せり學者之れを了せよ。而して其各項を悉く實行せざればならざるものに非ず、唯其心掛けあらば充分なり。人に依り何等の準備をも要せずして初めより甘く成切する人少なからず、又既に一二度成功したる人は別段に準備を要せず、畢竟前記の準備は初學者の爲めの老婆心と見て可なり。

第四章 自己催眠を行ふ方法

自己催眠の行はるゝ原理は曩に述べたる如く、心理的としては豫期の作用と注意の凝集にあり、生理的としては腦貧血と體內諸機能の靜遲にあり、此原理に合するものは何にても悉く催眠法として採ることを得、而し比較的簡易にして効ある法を述べんに。

第一に自己催眠を行はば必ず自分は眠れ必ず自分の病癖は治すとの確信あるを要す之れ第一の原則たる豫期の作用を高むるなり。
 第二に或る物即ち足の先とか手の先きとか、腹部とか呼吸とか、凝視球とか眼瞼とかに心を集めて注意を散亂せざるやうにす之れ第二の原則たる注意の凝集を圖るなり。
 第三に腹部や上肢を撫で下げ、或は身體の下方に注意を集めて血液を身體の下方に導き頭部の血を少なくして腦貧血を圖るにあり。之れ第三の原則たる腦貧血の助成を圖るなり。
 第四に自己催眠中は萬事を拋棄して精神を勉めて冷靜にし、脈膊や呼吸を靜かに遅くなるやうにす。之れ第四の原則たる體內諸機能の靜遲を圖るなり。
 自己催眠の状態にある者は腦貧血と體內諸機能は靜遲の狀にあり、其状態は自己催眠の結果なり、其果結の生ずる方法が自己催眠法となるなり、此原理に基きて客觀的に自己催眠法を述べれば、先づ自己催眠を行はんと欲せば第一に自分は此法を行へば必ず眠れ必ず病癖は治すとの確信を持ち次に前章に述べたる準備を全

く整へ愈々實行に着手するなり其順序は次の如くするを最も簡易にして効ある法とす。

- 一、椅子に腰を掛けるか或は布團の中に入り手足を伸ばして仰臥するかして、安樂に居ること。
- 二、體を靜止してゆつたりと氣を靜めること。
- 三、足の先に力を入れつゝ足の指を曲ぐること年令の數程なすこと。
- 四、手の先に力を入れつゝ手の指を堅く握ること年令の數程なすこと。
- 五、喉元より胸部腹部へかけて兩手掌にて強く撫で下けを年令の數程なすこと。
- 六、左手にて右肩より右手の指先きまで強く撫で下ぐるること年令の半數程なすこと。
- 七、次に右手を以て左肩より左手の指先迄同様に撫で下ぐると年令の數程なすこと。
- 八、口を閉ち鼻より空氣を吸入すると共に、下腹部へ力を入れて脹らせ、空氣を鼻より呼出するとき下腹部を凹ますなり斯くなしつゝ、竊に呼吸を算する也其算し方は一より百に至り百に至らば又一に戻りて百迄算す若し中途にして計算を誤りしときは一より初むるなり斯くて堅く眠る迄は何時迄も此計算を續け

居ること。

八前頃の計算を行ひつつ、兩眼を細目に開きて豫め吊し置たる催眠凝視球を見詰むるなり暫く見詰め居ると眼は堪へられなくなりて自然に閉づるものなり涙の流るゝ以上に見詰むる要なし又見詰め居ると球の形と色とが變化して見ゆ、斯くなれば充分なるを以て閉目すること。

九、閉目せば己れの片手の拇指と人指指とを以て兩眼瞼を上より下に輕壓するなり此間も尙七頂の呼吸の計算は續け居ること。

(最も効力ある法は前記の(三)(四)(七)(八)を一時に行ふにあり或は(七)と(九)を一時に行ふも頗る有力の法なり之を稱して混合法と云ふ各法を別々に行ふを單行法と云ふ)

斯くの如くなさば既に疾く催眠状態となるを普通とす然し胸中に雜念起りて夫より夫へと思想は轉々し其雜念の方に注意を奮はれて呼吸の計算を忘るゝ如きことあらんか不可なり此場合には注意を散亂せしめざる爲めに尙次の法を行ふこと。

十、手の指を折り乍ら數を一より百迄幾度も算ふること或は一二三の數字或はいろは四十八文字を右手の指にて左掌の上に書く眞似をすること。
 斯くするも尙雜念の發生止まざるときは、前記三より十迄の方法を更に繰り返すなり、斯くて三十分乃至一時間を費さば催眠せざるもの殆んどなし。若し夫れでも催眠せざるときは其日は夫れにて止むること。
 十一、其翌日又同一時刻に試むるなり例へば午後四時より五時迄の一時間試みて不成功に終りしものは、又其翌日も其時刻に試み、又不成功に終らば又々其翌日も同時刻に試むること、一週間にも及びて成功せざる者之れ迄に一人と雖も出逢ひしことなし。此同日刻と忍耐の二つは堅く忘却すべからざること。
 以上述べたる所は極めて初學者の爲めに成功する方法を約言したる者なり、より少し練習せば單に椅子に凭り瞑目せば直に深き催眠状態となるべし、何人と雖も此域に達する決して難きにあらざるべし、余の宅に於て自己催眠を研究せし方少なからず而し一名として不成功に終りしものなし、大概の方は初回より成功せり、心身に異常ありて困難なりし方も七日目にして成功せり、一度成功せば次より

は實に容易に意の儘に行はるゝものなり。
 参考として初心の方が實驗し成功したる次第を語らん、克己心強くして感性の高き方は初めより自己催眠法を行ふや直に催眠するを常とす。然し稀に感性鈍くして克己心に乏しき方は、二度三度行ふもよき結果を見ずして終る。斯くの如き者に限りて疑心起りて秘密の奧義を教へざるが故ならん、不得要領にて終るは馬鹿馬鹿しい、斯かる事で自己催眠する筈なしとよりて益々自己催眠は行れざること、なる。之れ好結果を豫期せざる故なり、余は斯かる人に出合ひたるときは、猶催眠の原理と方法を飲み込む様晰して益々實驗を試みんことを勧めり、當人も又實驗して見る氣になりて、實驗を重ねる中に俄然催眠状態に陥りて大に喜ぶを常とす之れにつき面白き實話を語らん、深き催眠に陥り乍ら、自分は少しも催眠せずとのみ思ひ居り、己れには自己催眠は如何にしても行はれずと落膽せる女學生あり、よりて余は其錯誤なるを説きたるに、女學生曰く催眠したると思へざるときには目閉ちて静止し居りしのみにて、其間少しも何等の異常も何にもなければなりとて頑として肯せず、よりて余は然らば從來の如くし今一回余の宅にて實驗せられよ、必ず

催眠するを自覺するやうしてやらんと云ひければ然らばとて寢臺に横はりて
 實驗を始むるや、忽ちにして深き催眠状態となれり、よりて余は其女學生を立合の
 女學生に荷はせて別室に伴ひ行き、椅子に腰を掛けさせて置けり、然して後女學生
 目覺て大に驚き、嗚呼今までの實驗も今日の如く深睡状態となりしかと暫し忙然
 たりき、催眠中は種々の錯覺を起すもの故、催眠者自身にては實際の事は分らざる
 を原則とす彼の坐布團を抱きて小兒と思ひ、冷水を飲んで麥酒と思ふが如き現象
 と同一理由にして、敢て珍しからざればなり、又或る神經衰弱病に罹りし一青年は
 如何にしても自己催眠成功せずとて大に落膽し己れには自己催眠はとても駄目
 たと嘆聲を漏らせり、偶々其日余の實驗室にて自己催眠を實驗する者多かりけれ
 ば、其實驗を見んとて其青年は椅子に凭り、應接用テーブルに臂を突きて見居りし
 が其中に厭き來りて思はず數息觀(呼吸の計算)を行ひたるに忽然催眠状態となれ
 り、後覺醒し大に驚き、今迄自己催眠せんとして有意的に心掛けたるとき催眠せずし
 て無意的に今爰にて催眠したるは實に奇と云ふべし、示後は容易に自己催眠行は
 るゝならんと喜ひたりしか、果して其後は容易に自己催眠は行れたり、之れ其青年

は初め殊更に自己催眠法を行ふときは、眠りたい、と云ふ慾求が盛んにいて、催
 眠を豫期することなかりし故なり、豫期心は高きほど早く深く催眠するも慾求が
 盛んなればなるに従て催眠は不成功に終るものなり、之れ大に注意すべきことな
 り。
 斯くの如く自己催眠の成功に困難なるものあるも、絶対に不成功に終るもの一名
 もなし、唯難易あるに過ぎざるなり、よりて之を實驗せんとするもの、中若し不幸
 にして感性鈍く甘く催眠せざるからとて落膽せず、百折不撓の精神にて研究せば、
 何人、と雖も必ず自己催眠は萬人が萬人成功するものなり。

第五章 自己催眠を解く法

催眠と云へば字の如く眠りを催す故、自然の睡眠の如く眠るものなりとのみ思ふ
 者あるも、其は誤解なることは已に述べたる所なり、催眠中には自然の睡りと同様
 の状態になるもの多々あるも、又單に普通状態に比して精神静まり居るに過ぎざ
 るものありよりて自己催眠を醒ますと云ふより解くと云ふ方學理に合せる如く

思はれ爰に此題を設けたる所以なり。

獨習自在自己催眠

自己催眠に罹れる者の生理的の狀態は、腦貧血及び體內の諸機能は靜遲の有様にあり、血液の運行は隨て遅々たるを原則とす。よりに自然狀態にある者に比して大なる差異あり、然るに忽然眠りを解き、忽ちにして身體を動かさるか、生理的に變狀を來し有害なる故、極めて徐々と眠りを解くなり。試に見よ自然の睡眠にても深く熟睡せる者をして、忽然呼び起し働かせしめんか、其日は頭重くして不快なることあり、小兒が自然の睡眠をなし居る場合に目を醒ますときは、母親は勉めて徐々と目を醒さしむる様に注意せざれば、其兒は虛弱となり、痴愚となるとの説の如きは全く前顯の理由に基くものなり、催眠も睡眠も生理上の狀態は殆んど同一にして催眠は睡眠よりは腦貧血及び諸機能の靜遲の程度少なきの別あるのみなればなり。

先づ自己催眠を行ふ場合に三十分時間眠らんと堅く豫期して催眠すれば必ず三十分時間を経過すると共に目を醒すものなり。初歩の内は此時間を誤ることあるも練習すれば思ふ通りに五分間にても一時間にても意の儘に必ず目を醒すもの

自己催眠を解く法

なり、目を醒ますも身體は暫時其儘となし置き、身體を動かす順序は第一に足の先を動かし、少し休み、凡そ三十秒乃至一分間以下同じ次に足全體を動かし、又少し休み次に兩手を動かし、又少し休みて自己催眠の際行ひたる如く手の先と足の先と力を入れ、而して手足を動かし次に靜に目を開き、尙少し其儘にて居り、後起き上り又坐して少しく休み、而して後面を洗ひ口をそゞぎ、空氣の流通よき室内か庭園かを徐々と消遙すること二三十分時間なすをよしとす。

然れば精神爽快にして肉體は健康に萬事意の如くなる所の幸福の人となるべし前に述べたる自己催眠を解く法は甚だ副雜なるも必ず其通りにせざればならざるものにあらず、大凡前記の心得にて實行せば充分なり、熟練すれば催眠も解眠も自由自在なり、即ち忽然自己催眠し不思議の現象を呈し、俄然催眠を解きて常体に復すること意の儘に行はるゝものなり、又夜就寢の際自己催眠を行ひ自然の睡眠に移りて翌朝迄眠りし場合の如きは、已に催眠にあらずして睡眠となり居りて醒むる者故、前記の順序によるを要せず、而し自然の睡眠を醒すときも此心得にて成るべく徐々と目を醒す方法を採るは、健康法として最もよし。

第六章 自己催眠の效果

二四

第一節 自己催眠にて病癆を治する理由

自己催眠すれば精神沈静して無念無想となる。然ると共に自己暗示する故、暗示の事項をよく受け入れて病癆を治するなり。よりて自己催眠のみにて、何等の暗示を爲さざれば、何等の効なき者の如く思ふ者あるも決して然らず。自己催眠其者が精神の修養となりて、非常に効果あるなり。精神修養の根本は精神をもちつかしむるにあり。精神をもちつかしむるには自己催眠に如くものなし。試に見よ精神に「をちつき」なきが爲めに病人となりし者算なし。否多くの病氣は精神に「をちつき」なきが爲めに起りたる者なり。彼の頭痛持ちの如き神経性の諸病は概ね之れに起因す。又日常の業務の如きも「をちつき」て従事し怠らざれば、必ず成功するも、性急に業務を執らんか、忽ち精力衰へ不成功に終るべし。人と議論するとき或は學生が試験を受けんとするとき精神に「をちつき」なければ實際胸中に畜へ置きたる明説も胸に浮ばず飛んでもなき間違の議論をなし、或は誤りの答案を認めて後に議論の場試験の

獨習自在自己催眠

自己催眠の効果

場を退き獨り静かなる室にて、己が先きになしたる處を精神を穩かとなして考察するや、胸中より正しき明説續々浮び出で、嗚呼彼の時何故に此考へか浮び出でざりしか誤てり誤てりと後悔することあり、之れ即ち精神に「をちつき」なかりし故なり。又自己獨りしか居らざる所にては、言語流暢に思ふことを何んでも述べ盡せるに拘らず、威嚴ある人の前に出ずれば、言語溢りて思ふ事を半分も述べ盡せぬことあるは、皆精神に「をちつき」なきが故なり。其他百般の事皆然り、諺に曰ふ如く「急がば廻れ」なり之れによりて精神沈静の效果の大なる實に其人の幸不幸の分るゝ所なりと云ふも穿ち誇大の言に非るなり。

彼宗教にてアーメンを唱へ、南無妙法蓮華經を唱へ、六根清淨を唱へ「とふかみえみためはらいたまへきよめたまへ」と唱ふるは、何の理ぞ、斯く唱へて神に願ふ處を許容せられんとを祈るなり、と或は然らん然れ共、之れを心理上より見れば、其人の精神を沈静するの効あると共に、斯く祈れば靈顯必ず現はるべしと豫期して行ふ故、其結果を得る處の豫期の作用なり。代言すれば余の言ふ自己催眠術なり。

論者或は曰はん自己催眠を行へば行ひ居るときのみ精神は静し居るも、醒覺と共に

に又元の通りとなり、實際の用に立たざるべしと、實際は決して然らず、繼續暗示と云ふて暗示の効力は獨り、催眠中のみならず、催眠覺醒後も催眠中同様に暗示に感應するものなり。故に催眠中に治療矯癖の暗示をなせば、覺醒後幾月幾年の後も暗示の通りに治し居るなり。唯其人の感受性によりて一回の催眠にて、終生全く心機一轉し居るもあり、又數回乃至數十回の催眠を重ねて初めて其域に達するあり。殊に自己催眠にては依他催眠即ち術者が被術者に施す場合よりは、催眠の回數を多く要するものと知るべし。此理により自己催眠によりて、何日でも精神沈靜となり居る様修養せば、何事にて成功する基礎となり、理想の人となるや疑ひなし。單に精神沈靜するのみにても已に業に斯の如き大効あり。尙其上に自己暗示を應用せば、其効果の大なる實に驚くべきものあり。

自己暗示とは自分で自分に暗示する義にして、暗示とは或る事を堅く思ひ込ましたむることにして堅く心に思ひ込むと心に思ふ通りに肉體は變化すると云ふ原則によりて効果顯はるゝなり。俗歌に曰く、ほれて通へば千里も一里只で通へば又千里と之れはよく其意を漏らせり、精神に大なる希望と愉快とありて歩めば、千里の

道も一里を歩む程しか疲れを知らずとの意なり。然るに只で千里の道を通へば、千里を歩みし丈けの疲勞を感ず、只心の思ひ様一つにて肉體が如何に變化するか、の理を示して余りあり。諸君の知れる所の催眠術により、術者が催眠者に向つて綿を與へて之れは重き石なりと云へば、催眠者は重き石の重量を感じ力を入れ汗を流して漸く其れを支ふに過ぎず、之れに反して重き石を綿なりとて催眠者の手に渡せば、實際綿の如く軽く其れを取り扱ふ斯の如き奇妙の現象も其理論を究めて見れば、單に心に確信せる通りに肉體は變化すると云ふ心身相關の理論に外ならざるなり。

自己暗示の場合に於ては、自分で此位ひの石は綿の如く取扱ふを得と確信即ち暗示し、綿の如く軽く之を取扱ふなり。自己が自己に暗示する者故相當に知識を有し、克己心に富める者ならでは、少し副雜せる暗示には感應せざるべし、何者意志薄弱な者にては自分で然か思はんと思ひながら然か思へざるものなればなり。

自己催眠によりて自己の病癖を治せんと欲せば、暫々述べたる如く豫め自己は斯くすれば眠れ眠りて起きれば、自己の病或は癖は取れ居ると確信して催眠を初む

れば、其通りに眠れ其通りに治し居るなり。故に催眠を試むるに當り、其確信なくして眠るゝや否や疑はし、治するや否や疑はし、併し欺かれしと思ふて試んと云ふ如き輕忽のことにては斷じて行はるゝものに非ず、吳々も注意すべきは此事なり。自己催眠によりて、病氣の治する理由は通俗に述べれば、前記の如くなるも之を心理學及び生理學上より見れば、下の如し。生理學的説明の大要は身體外部にある所の五管即ち耳目鼻口及皮膚より暗示したる感覺を求心神經によりて腦髓に傳達す、腦髓は催眠状態にありて雜念起らざる状態にあるを以て、暗示をよく受け入れて暗示の通りに確信す。確信すると共に腦髓は遠心神經を傳ふて、外部に其確信通りの結果を現はすなり。而して心理學的説明の大要は或る考が起き或は或物が見へたり觸れたりすれば、夫によりて、有機的に變化を來し此變化が腦髓に達し喜ばしいとか悲しいとかの感情を起し、其感情は更に體內に於て生理的の變化の度を高め他方には筋肉や血管の伸縮に變化を及ぼして其人の面色舉動が心に思ふ通りに變化するものなり。

以上述べたる處の理論は最近の通俗説なるも其れを七六ヶ敷く論ずるも、畢竟論

の要旨は爰に期着するものなり。

第貳節 自己催眠により病癰を治する方法

第一項 總論

自己催眠によりて病癰を治するには如何なる病癰に於ても次の諸項を實踐するを要す。

- 一、自己催眠を行ふこと。
- 二、自己暗示を行ふこと。
 - イ、自己催眠實行に際して行ふ自己暗示。
 - ロ、朝晝晩の三回手を強握して行ふ自己暗示。
 - ハ、歩行しつゝ姿勢を正して行ふ自己暗示。
 - ニ、深呼吸の折り行ふ精神を冷靜にする自己暗示。
 - 三、攝生を嚴守すること。

之れなり、以下少しく之れを説明せん。

(一) 自己催眠を行ふこと。其方法は第一章乃至第五章に詳述しあり。何れの病癖にても同様に行ふものと知るべし。故に爰に之を再説せず。

(二) 自己暗示を行ふこと。自己暗示のことも曾て述べたる處なるも、此法は病癖の異なるに從て暗示すべき事項を異にす。而て暗示の方法に數種ありよりて之を説明せん。

(イ) 自己催眠の實行に際して、行ふ自己暗示。例へば爰に神經衰弱症の患者あり、其症候は精神不安、應接下手の症候なりとせんか、今己れが自己催眠法を行ふ目的は、神經衰弱を治せんか爲めなり、自己催眠法を行へば必ず催眠す催眠して後日醒むれば心身の悪しき處即ち精神の不安は消へて膽力増進し應接は上手になり居ると確信力を強めつゝ、自己催眠するなり。然れば其確信通りに効果あるなり。之れ心身相關の原理による豫期作用の結果なることは既に反覆述べたる所にして諸君の首背せらるゝ處爲らん。

(ロ) 朝晝晩の三回手を強握して行ふ自己暗示。此法は前記の確信を益強からしむる方法にして實に必要なり。其方法は前記の神經衰弱者に就き例へて言へば、朝晝晩の三回姿勢を正して直立し、兩手を強く強く握り、左手は左側に垂れ、右手は高く

頭上に挙げ、其神經衰弱の症候たる「精神の不安は消へて確乎不動となつた」と胸中に思ひながら、挙げたる右手を強く握りしまゝ、切り下ぐるなり。斯くの如くすること三回乃至五回に及び、次に又握りし右手を挙げ、膽力は増大せり、如何なる場所如何なる人の前に出づるも精神は虚心平氣となり居り、磊落な愛嬌よき交際家になつた」と精神を強く籠めて強く握りし右手を切り下ぐる。こと三回乃至五回なすなり。此回数に甚だしく疲勞せざる限りは多き程よし。此例に習ふて何れの病癖にても、其症候に基きて自己暗示するなり。其暗示する事項即ち前記の例による「精神の不安は消へて確乎不動となつた」と胸中にて唯斯く思ふのみに止らず、周囲の事情に妨げなくば、聲を發して「精神の不安は消えて確乎不動となつた」と言語を強めて叫びつゝ、行はゞ其効果は尙著し、此暗示方法は朝晝晩の三回に止まらず、何回行ふもよし、行へば行ふ程効は多くあるなり。

(ハ) 歩行しつゝ、姿勢を正して行ふ自己暗示。道を歩むときも自己暗示の事項をして、益々腦裡に深く染まる様に工風する所なり。例へば歩行するときは身體の姿勢を正し、下腹を前方に張り、兩手を握りて兩側に下げ、脚頭に精神を籠め勢よく活潑

に歩むなり。

(二) 閑暇の折り行ふ精神を冷靜にする自己暗示。精神を冷靜ならしむれば、大概の疾病は治し悪癖は矯めらるゝなり。殊に此法は精力の消耗を防ぎ、精神の修養としては最も大切なり。其法は休息時間とか、理髪店とか或は停車場等にて、待合す時間中は目を閉ぢて下腹に力を入れ呼吸を一より百迄幾度も算するなり。若し途中にて數を間違はゞ、又一より算するなり、然れば疲勞せる精神は快復し、爽快ならしめ從て心身を強壯にする最良法なり。

三、攝生を嚴守すること。攝生を嚴守せざれば治すべき病癖も治せず、治したる病癖も再び元に戻ることもあり、よりて之を嚴守するを要す。攝生法は一般の衛生法に従ひ、病癖によりて之を定むべきも先づ何人も必ず如かあるを要する點を擧ぐれば次の如し。

一朝は早く起き直ちに顔を洗ひ冷水摩擦をなすこと。
 二次に庭園又は道路の新鮮なる空氣の處に出で深呼吸を行ひ柔軟體操を行ひ、而して軽く四五丁の處を散歩するか、さなくば庭園の掃除を行ひ、後に朝飯を喫す

べし。

三、食物は肉類と野菜とは片食せず、常に配合に注意し、酒煙草茶の如き興奮性のもの及び胡椒生薑蕃椒の如き辛味の物は成る可く避け、消化し易き滋養物を選み充分に咀嚼して後嚥下すべし。

四、朝食後獨り朝飯に止らず晝食夕食共同様と知るべしは三十分乃至一時間程休息して後に仕事に着手すべし。此休息をせずして腦を使ふ處の讀書は新聞雜誌と雖も堅く禁すべし。

五、仕事は非常に興味をもちて規則正しく順序をよくし、決して勢急なるべからず斯くて一時間も仕事せば暫く休息して後に又なし休みなしに詰めて仕事すべからず。

六、毎日一度は必ず上廁の習慣を附け、入浴は勉めて時々なし、肌着は常に清潔となし、居室及び寢室は空氣の流通を圖るべし。

七、常に希望にて胸中を満たし精神を爽快に平穩に保ち不必要なることに精神を勞費すべからず。

八、夜間の勉強はなるべく廢して、早く就寢すべし、就寢前には何物も食すべからず、軽く運動をなすべし。

九、床に入らば自己催眠法を行ふて眠りに就くべし、然れば催眠より睡眠に移りて朝迄心持よく眠らる室は靜かにして暗きをよしとす。

獨習自在自己催眠

以上述べたる攝生法は、一般の人に就て述べたるものなり、よりて或病氣或る惡癖に就ては、殊別の攝生を要す、其尤なるものは追て述ぶることあるべし、よりて上述の自己催眠自己暗示及び攝生法を一分一厘も違はぬ様實行せよとの意にあらず、以上記述の趣意にて機に臨み變に應じて多少の斟酌をなし、以て實行せば、輕症は直ちに根治すること疑ひなし、重症と雖も直ちに根治すること敢て珍しからず、單に輕快したるものは益々實踐し益々修養を重ねて根治せしむべし、健康となるなら如何に健康となるも惡しきものに非ず、無病長壽するなら如何に無病長壽するも慾に際限なきものなり、健康の度と長壽の度は之れを實踐する多少と相伴ふこと、信ず、よりて益々實踐して止まざるぞよし。

去りながら前述せる自己催眠自己暗示及び攝生法は人によりて直ちによく實踐

病癱治療の方

せらるゝ人と否とあるならん、殊に催眠感應の鈍き者は自己催眠するに六ヶ敷く又克己心に乏しき薄志弱行の人に在ては、自己暗示及び攝生法は言ふ可くして行はれざる場合稀になしとせず、斯る人は催眠術師に付き施術を受け、以て治療矯癖する外道なきなり、催眠術師に就て施術を受けなば、治せざる病人なく、矯められざる惡癖なしと斷言す、之れ余が積年間實行して、未だ曾て誤ざる處なり、唯稀に百人に就て一名位は好果を收めずと思ふ、被術者あり、夫れは今一二回施術を受ければ根治するものを、をしき處で施術を受くることを止めたるものか、左なくば術者の注意を眞に受けず、自分考へにて誤解を逞ふし終に病症をして益々重からしめたるものに限る。

殊に病癱には回復期なるものありて、回復期を無視して重病と雖も、催眠術に依れば必ず忽然全治するもの、如く思ふものあるは誤りなり、見よ目下の醫師法にては、醫士が新聞雜誌に廣告をする場合に、梅毒を一週間に根治せしむると云ふ、眞な語があれば、愚民を欺罔するものなりとて罰せらるゝとせり、其は何故なるか、病の輕重を診斷もせずして、一般的に一週間に治すると云ふは學理にも實驗に

獨習自在己催眠

も反して無責任の言をなしたるものなればなり、又見よ如何に大醫の藥なりと雖も重病者一口水藥を飲むや俄然健康体となりしことは事實に於てなきを、大醫の藥も幾日となく幾月となく連服し初めて効果あるなり、唯に而かのみならず、藥眩暈せざればきかずとの諺ある如く服藥後更らに患部甚だしく痛むことあれば、治する前兆即ち藥の効顯れたるなりとせり、世人は此事をよく熟知せり、然るに催眠術によれば、獨り如何なる大病も忽然全治するものと信じ既に一回施術を受けしも心よきことは確に思ひたるも全治せずとか或は二回自己催眠術を行ひしも快方に向ひしのみにて根治せず、催眠術は駄目なり、我輩には効力なしとて其後催眠よりか他に良法はなきかと探索するものあり、嗚呼之れ思はざるの甚だしなり、催眠術と雖も病癥の回復期を無視して治せしむること能はず、藥物療法之如く數回乃至數十回試みて初めて順次効果を奏するものなることを首肯すべきなり、唯に然かのみならず、藥眩暈せざればきかずと云ふ場合の如く、催眠術の治療を受けし後患部は前同様痛むこと珍しからず、而して其後忽ちにして全治することあり、之れ大に注意すべき處なり、唯稀に催眠感性高き重病者が忽然快復したることあり

るも悉くの患者が皆斯く忽然治すると思ふは非なり、殊に、依他催眠即ち術者が患者を催眠せしめて暗示するに非ずして患者が自分で自分を催眠せしめ自己暗示する場合に至りては尙効果は遅々たることを覺悟し、倦まず怠らず益々研究し作養して止まざるぞよき然らば必ず理想の域に達するを得ん。

第二項 神經衰弱治療法

余は曾て催眠術新報紙上に於て神經衰弱に就き論じたることあり、重複を顧みず其要を記して症候原因攝生法の一般を示さん。

神經衰弱とは何ぞや、神經衰弱の何者なるかを明にせんと欲せば、先づ神經とは如何なる者なるかを知るを要す、神經其者は有形にして其働は無形なり、神經は恰も白糸の如きものなり、極く細きものは顯微鏡によらざれば見へざるも、普通は木綿糸位、極く太きものは小指位あり、其神經は全身に分布されあること恰も全國に於ける電線の如くにて、神經の働きは電流の如し、電流は無形にて目に見へざるも、若し止めは電線のみ具はり居るも其用をなさざると同一にて、有形の神經に故障

神經衰弱治療法

が生ずるも無形の神経の働きに故障が生ずるも共に神経病なり、前者を器質的神経病即ち解剖的障害のある神経病、後者を官能的神経病即ち解剖的障害のなき神経病と云ふ、神経衰弱は即ち官能的神経病の一種にて何等の官能的障害なくして唯神経の働きに變化ある場合なり、代言すれば、神経衰弱は神経の變調を云ふものにて、如何なる病人にも多少必ず附隨するものなり、又自ら健全と信し居るものにも少しは神経衰弱に罹り居るものなり、故に此症の範圍は非常に廣し、其如何は次の症候を見て之を知らん。

症候。此病の軽度なるものは自分の生れ附きの癖と思ひて居るものあり、彼の爪を噛む、疳癩の強き夜夢を見て堅く眠れぬ、業務に倦み易き等の類之れなり、頭が氣になり額へ手を當てたり、こめかみ部を指て抑へたり、何んもなく氣が重くなり、睡氣を催すことあり、之れは已に軽度の神経衰弱なり、普通此症候としては頭重、頭痛、記憶減弱、眩暈、耳鳴、まぶしき、視力朦朧、手足冷へ、神経痛、脊隨の痛み、首部の強硬、震顛、顔面變色し易く、心悸、兀進、胃の悪しき、生殖器障害、盜汗、臨場苦悶、強迫感、念、早老、潔癖、小膽、恐怖症、空想に耽る、自信力減少、面白くなき、失望、悲觀等なり、症候中尤もなるも

のにつき少しく之を解説せん。

臆病及び赤面癩。何等の原因なくして人の前に出づると汗が出で、億し、磊落に無邪氣に交際出來ず甚たしきは人の前にて自分の意見を充分述べ盡すこと能はず、又人の顔と己の顔とを互に見合すと共に顔色或は相貌をいやにくすし或は何等の原因なくして赤面するものなり。

早老。年より老ひて見ゆるものあり、年から云へば未だ青年にて活潑に遊ひ廻るべきに既に中年者の如く大人ぶりて落ち附き居るものあり、之れも神経衰弱の一徵候なり、其は未だ充分に發達せぬ神経過度に疲らした結果なり。

強迫觀念及苦勞症。とは何等の原因なきに心配して其事を思ふまいと思ふても思はずに居られぬ精神状態なり、例へば手紙の中に斯々の事を記さんと思ひ、之を認め封をせし後に至り書き落しはせぬかと心配し、封を開きて讀み直して又封して投函したる後に、未だ手紙に書落ちせざるやを心配する如き之れなり、此強迫觀念の中に尤もよくあるは恐怖症なり、即ち警察署、毛蟲、火事、地震、汽車等を特別に恐ろしがることなり、又毎日絶へずつづまらぬ終つたを根に持ちて繰り返し、胸を痛

四〇
 むるものあり、偶々其苦勞の原因去れば又他のことを苦にして終始苦の絶へざるものなり、又輕症を重症と思ひ少しの動悸も心臓病と心得心配するものあり、之れは神經衰弱に伴ふ神經過敏の一なり。
 心悸兀進 神經衰弱に罹れる青年によくある病なり、心臓には何等の故障なきに恰も心臓病の如く動悸高まり、少しの運動や一寸した心配にも胸跳り息切れして心臓部(左の乳の處)から胸の押し落しの處にかけて氣持の惡ひ病なり。
 記憶減弱 注意散亂して如何に講義或は讀書にのみ精神を集めんとするも、種々の觀念浮ひて注意専らならしむること能はず、從て記憶鈍く學業の成功覺束なしよつて早く根治せざれば成業の見込なし。
 厭き易き 僅か一二時間も讀書をせんか精神朦朧となり何を讀みたるか自らも之を知らざる如き失態に陥り、或は何にか業務を執らんとするも直に倦みて元氣なく、睡眠を催すに至る、然るに健全なる者は終日終夜讀書を續くも業務を續くも毫も疲勞を覺へず其讀む事柄執る事柄に無限の興味を持ちて意氣益々昂然、嗚呼彼と之と競争せんとする戰はずして勝敗は既に定まれるに非ずや、何ぞ其病

根を断たずして可ならんや。
 悲觀 又強迫觀念の一種なるも、此症の通有性とも云ふべき觀あるを以て此に之を述べん事々物々惡ひ方のみを見てよい方を見ずして悲しむなり、例へば我程不幸のものなし、前途の成業覺束なしと徒に落膽す、從て目に見耳に聽くもの一として精神を樂ましむるに足るものなし。
 頭痛 讀書とか心配とか少しく精神を支ふと、頭は重くなり或は頭の一方或は兩方或は後部或は前部等痛みて堪へられざるものなり。
 以上の症候中の一を患ふも此症にして、重きは其症候を數多現はすものなり、症候一つでさい生存競争場裡に立つに如何程差支となるか、其重きものは廢物同様の肉塊となるべし、其病根を絶滅せずして可ならんや、已述の如く此症中甚たしきものは素人の目にも病人と見ゆるも大概は此病者を診察しつけたるものならざれば病人なるや否や分らぬ位なり、故に家族の者より左程病人視せられざる場合あり、然るに之を等閑に附せんか、其者の終身を誤ることゝなる、之れ余の大に同情する處なり。

原因 一般病氣の原因と同じく先天性と後天性の二に大別することを得、第一先天性とは一名遺傳のことにて、父母又は祖父母の時代に誰れか腦病、脊髓病、精神病又は神經病に罹りし者あれば、是れが子孫に傳はる其傳はるは、梅毒の親か、子に病を遺傳すると異りて、神經質即ち神經衰弱に罹り易き素因を遺傳するなり。

第二の後天性即ち生れし後に本人自身に起せし原因にて、之に精神的と肉體的との二あり。

遺傳素因たる神經質とは如何、世に神經質神經家といふ一種の人あり、是れは普通に云ふ苦勞性の人にて、何にかにつけて氣苦勞をし、總て世を悲觀し物事惡ひ方のみを見てよき方を見ず、決斷力乏しくて何事にも心迷ふを神經家の特色とす、又取り返しの附かぬをいつまでも悔やむを常とす、今少し親が己に學問をさせたならば、我は今頃は立派に出世したものを、家庭教育が惡しかりしたため己は青年時代を誤りた、等善い所は捨て、惡ひ所のみを氣を取られ、常に死せし兒の年を數へ、返らぬ縁言を並へる誠に損の性質にて、果ては世の中に己れ程不幸の者はないと世々怨み、人を怨むに至る時に人より其不心得を注意され、自己も又濟んだ事は仕方

がないと諦めて二度ひ思ふまひと思ふても忘られず、心を苦しむるものなり、斯る症候は神經衰弱の一症候として現はるゝものなることは曾て述べたる所なり、而し爰には生れ附きに斯る症候を呈するもの即ち神經質を云ひたるなり。

後天性の原因 中精神的としては教育不良、精神過勞なり、肉體的としては酒煙草の濫用、梅毒、痲病、房事過度、身體過勞、身體衰弱、不攝生、生殖器病、急性諸病、慢性諸病、諸種の中毒、外傷、妊娠、分娩、胃腸諸病、外科手術、便秘、自爲的遂情等なり。

精神過勞 とは精神を過度に使ふて慰安の之れに伴はざる場合なり、神經衰弱の多くは皆之れなり、殊に過勞中にて感情の害は最も精神を刺戟し、此症を起す即ち、家庭の不和、憤怒、驚愕、悔悟、失戀等の其大なるものとす、之に次て過度の勉學、處世上の苦心、失敗、失望、及び自己の疾病を苦にする等なり。

教育の不良は精神上肉體上大なる障害を起す基となるものなり、其多くは此症を起す大原因たる自爲遂情、酒煙草の濫用等の不攝生を敢てなし、後如何とも爲し難きやふの虚弱の身體となり、人に注意されて始めて嗚呼惡しきことをしたりと後悔するも及ばざるに至るものあり。

獨習自在己催眠

肉體的原因として前に列記したる處は其尤なるものを云ひたるものにして、身體か活潑ならざれば常に此症は多年伴ふものにして、況んや疾病には必ず多少附隨するものなり。

尙左にヘッスリン氏の調査になれる神經衰弱症患者八百二十八人の中其原因を區別したるものを掲げて参考に供せん。

家族に機能性神經病	二八八	許嫁の關係結婚前	四
精神過勞	一四四	荒淫	二三
心配、憤怒、激越	一三〇	身體衰弱、缺血	一六
手淫	六〇	慢性病	一五
生殖器病	四〇	肥滿療法	一〇
急性病 <small>(インフルエ ンザを除く)</small>	三九	職業を得ざるため	一〇
外傷	三八	身體過勞	九
大酒	三〇	驚愕	八
分娩	三〇	色情禁斷	八

神經衰弱治療法

胃腸病 三六 月經盡歇 七
 インフルエンザ 二四 教育の悪しき 六

●治療法 ●神經衰弱をして根治せしめんと欲せば、先づ總論の例に習ひて(一)自己催眠をなすこと(二)暗示を行ふこと(三)攝生を嚴守すること之れなり、自己催眠法は何れの場合も同一なるも自己暗示法は其症候に基きて便宜定むるを要す、攝生法亦然り然れども神經衰弱は數多の病氣に關係あり、多くの人々が苦しむ處なるを以て殊に注意すべき點を重複を省みず以下詳述せん。

原因の除却 是疾病を根治する基礎なり水源を清めて末流を清むるなり、例へば精神過勞ならば其れを除却し梅毒が原因ならば其病毒を全治せしめざるべからず、而し何者が原因なるかは只患者自身の考にのみよるべからず、時に専門家の檢診を受け原因を確かめ之を除くべきなり、其れを除くには自己暗示を應用する也。

娛樂 是疲れたる精神を慰め、肉體を休養す故に凡百の疾病中輕きものは娛樂のみにて治するものなり、試に見よ一寸した頭痛位は面白き手品踊でも見れば治することあるは、人のよく知る處なり、重病者と雖も治すると否とは家庭或は看護人

が病人を慰めて喜ばしめ、安心せしむると否とは重大なる關係あり、其注意すべき要點としてストール博士の擧げたる條項は。

第一。娛樂の目的は心機を轉換せしむることである故に其種類は善良なるものを選べ多くの費用を要するものは大抵は不良なるものと知るべし。

第二。娛樂の目的は心機を轉換せしめ精神の慰藉と寛裕とを求むることである。故に無意義の滑稽に終らざるやう注意せよ。

第三。娛樂は他人の權利を妨げ人に悪き影響を及ぼさざるものを選べ。

第四。職業を怠らしむる程に深く人を耽らしむる娛樂を避けよ。

第五。徳義に反するもの、宗教的信仰又は高潔なる理想に對して懷疑心を惹起せしむるもの、家庭の關係より遠からしむる娛樂を避けよ。

と娛樂として高尚な品位を傷はざる者を選ぶべし、或大家は如何なる病人でも娛樂一つで治することを得、よりて藥物療法は用ゆるに及ばずと、まで極言したるものあり、娛樂中音樂は重要な位置を占む音樂によりて、精神の異狀を治療す可きことは決して庶幾す可きこととして斥く可きにあらざれども、古來其關係を研究し

たる人あるを聞かざりしに、キユバの某博士は、大低聲の音即ち大胡弓の如きもの、音は、神經衰弱を治め、吹笛の如き高聲音は經濟上に關係を有して金錢の損失等によりて發作したる精神の錯亂症を鎮靜し、又其音の底に何となく悲哀の調を帯べる螺旋喇叭の如きは外界の迫虐苦責による癲狂を治するの作用あることを發見し、これを以て一種の精神療法を施すことを得べきことを唱導せりと、されど獨りピアノのみは何等の治療上に價值を有せず却て精神上に悪作用を及ぼすものにして、同博士がピアノを演奏する千人の少女に就きて研究したる處によるも、其内の六百人は諸種の神經病に罹り居るものなりと。

精神の平靜。精神の過勞は此病の大原因をなし、又此症候の尤なるものなり、故に常に精神の平靜に勉め苟も精神を苦しむることは避けざるべからず、故に必要な勉強の如きも症候重きときは全く斷ちて全治の後にするべし、而し症候左まで重からざるときは休學するに及ばず、同じ仕事をすることも除々となし決してせかせかすべからず、精神の平靜を保ち精神修養上多大の價值ある數息觀即ち總論の(二)の(ハ)に述べたる所の如く、日に二三回宛二十分間位宛身體を靜止し閉目して己の

呼吸の出入を一より百迄算し、百に至らば又一に戻りて算すべし、然すれば精神大に静まりて、脳神経の錯亂を避くを得て大によし。

發聲 は大に精神を快活にし、身體を強壯にする効あり、殊に發聲中は精神休息し居りてよしよりて、讀書の音讀詩歌の高吟を最も獎勵す。

家庭の慰安 人の不幸中何にか不幸なりとて、家庭の不和程の不幸はなかるべし如何に金錢多くも地位高くも家庭不和なれば、其人の腦中に面白味なかるべし、終日の勞苦を慰むる唯一の家庭が却て勞苦を増す種なりと云ふに至つては、豈涙ならざるを得んや、家庭不和の爲に此症に陥り、一種のヒネクレ者となりしもの算なし、故に家庭にては、勉めて慰安を與ふるを要す、ミヅルトンの詩に曰く、

一、いとしき妻の愛により 慰めらるゝ樂みは

千尋の底の寶より 尙ほ優りたる價あり

二、我家に近づく其の時に 吹く春風につれられて

散りゆく香りに比ぶれば 望の花も何かせん

又露國の詩人曰く、

夫の深き愛情と

赤兒の罪なき微笑とに

老いぬる我身は若返り

罪の心も淨めらる

と神經衰弱者は此詩に云ふ處の境遇を得ざる人ならん、余今二兒あり、長は五才次は三才なり、余に無限の慰安を與へたるもの、生れて今日に至る迄、此二兒の如きはあらず。

運動 を適度にする時は、神經の中樞なる腦を始め、體內諸臓器の鬱血を散じ、精神の機能を旺盛にし、呼吸を強く深く活潑にさせ、心動を強くし、體温の發散を盛んにし、水分の排泄を容易にし、脂肪過多の人に對しては、脂肪を燃焼し去つて、筋肉の發達を助けるなど、其利益廣大なり、人の生存に飲食の必要なるが如く、運動も又人の生存に缺くべからざるものなり、其注意すべき事項を左に。

一、食事睡眠と共に日々一定時間規則的に行ふ事。

一、雨風の時は室内運動晴天には屋外運動を行ふ事。

一、運動が度を超へて疲勞を覺ゆることありては却て害になる事。

一、食後三十分を過ぎて後に必ずなす事。

一朝食前に一回軽く運動し、他は適宜に休息時間になす事。
 一、女子も男子と同じく運動必要なるも月經中は注意して過激の事をせざる事。
 食餌療法としては滋養分多き消化し易き食物を過食せざるやふ、一定量を一定時に食することとなり、而し如何程美食をするも過食したり食時の時を區々にしたり又は精神状態と運動と宜敷を得ざる場合は何等の効なきものなり。
 又生薑、芥子、茶、珈琲等の刺激物を避くべし、而して食前食後三十分間は如何に急かしくも必ず軽く運動すべし、大澤醫學博士は身體を健康にするには美食を必要とせずとの主意にて左の如く述べたり。
 『美食をすると云ふことは必しも必要ではない。是は自分が文部省の高等師範學校の附屬小學校に就て調査をした時にも其證據を得て來たのである。即ち此小學校には一部二部三部の設があつて、一部へは貴顯紳士、金持と云ふ程でなくとも兎に角上流社會の子弟がはいり、三部へは月謝を要せず男女を一所にして教へると云ふ至極簡略な仕組であつて、貧民の子弟がはいて居る。然るに體格の検査をして見ると、良い衣服を着て御馳走を食べて居る上流の子弟は體格が悪く、却て貧民の子

弟の方が體格がよい、故に決して御馳走は要らぬ體さへ丈夫であれば隨分草を食べても糞を嚙つても消化せぬことはない。これでは少し云ひ過ぎたかも知れぬがつまり身體が健康であると云ふことが條件であつて健康になる爲には御馳走を食べなければならぬと云ふことはないのである。然し腐敗した食物などは無論避けなければならぬ、尤も消化器の弱い人とか職業によりて運動の少い人とかは、消化し易い食物を食べる必要も生ずるであらうが、一般から云へば必しも御馳走を撰ぶ必要はないのである。』

- 睡狀につき注意すべき事項左の如し。
- 一、寢床中にては考へ事をば一切せざる事。
 - 一、床に就かは直に眠る習慣を附くる事。
 - 一、就眠前は一寸運動する事。
 - 一、就眠中は夢を見ず堅く眠るやふ心懸くる事。
 - 一、寢室は靜かにして暗きをよしとする事。
 - 一、寢室内の空氣は清潔なるやふ心懸くること従て火氣を終夜用ひざる事。

一、寢室の温度は寒暖に過ぎざるやふする事。
 一、寢具は可成軽くして暖かきものを用ふる事。
 一、若し夜中眼が醒めて直に又眠れざる時は自己催眠法を行ひて直に眠るべし。
 一、寢床に目を醒まして居らざる様なすべし。
 一、夜は早く(十時頃)寝ね朝は早く(五六時頃)起きる事。
 一、朝起きるときは徐々と眼を醒まし、忽然過激な運動をせざる事。
 理想の境遇 凡て心勞の堪へざる者は現在自分の境遇に不満にて頑固の親の意見の爲めに自分本來の志を枉げて現在の職業に就たとか、自分の好まぬ配遇者と結婚したとか、己れの意見を某々が排斥したとか、某々の爲めに己れは斯く失敗したとか四圍に不満が堪へざるものなり、此不満を如何にせば除くことを得るか必ず將來は形ち及び心の美しき妻を求めんとか、金錢及び地位を得んとか云ふ一定の理想あり、其理想が行はれざる爲め苦悶起り、精神過勞に陥り終に神經衰弱となるものなり此場合には大英斷を以て萬難を排して理想の境遇を得べし。
 理想に反する業務は斷然避けよ、氣の合はぬ人間とは別居せよ、其他心にかゝる未

決の問題は悉く處決し、到底處決が出来ぬことは諦めてくよくよする勿れ、要するに己の嗜きな業に従事し、何者を犠牲に供するも決して厭はぬと云ふ理想の立場に移られよ。
 便通 大便は毎日一定時に必ず一回あるやふに注意すべし、一日に一回もなきは已に身體の變調を來す基なると共に一日に三四回以上もあるは又不可なり、小便も又過不及なきやふに心懸くべし、若し女子なれば月經に注意し、一定日に一定量を見るやふ心懸くべし。
 藥劑 神經衰弱の原因中に若し解剖的傷害ある疾病存せば其原因を治せんが爲めには藥物療法の必要あるも、單に神經の衰弱せるのみにて他に何等の解剖的疾
 病なき場合は、藥物療法は何等の効なきものなり、東京腦病院長後藤省吾先生が多年實驗の結果に曰く、此症に此藥を用れば必ず全治すと云ふべき特效あるものなしと藥物療法専門の後藤先生にして斯く公言せらる、以て藥物療法の此症を治
 することの困難なるを知るべきなり。
 按摩 は神經衰弱には可なり、身體中肩なり何れなりたるき處を揉ましむるをよ

しとす、殊に頭の工合の悪しきものは、首筋の處をよく揉ましむるを可とす、其理由
 は腦は神經の中樞で最も大切な場所なり、頭の左右に恰かも水道のメートルの如
 き甲状腺と云ふものを具へあり、腦に循環する血液中に若し毒になるものでも混
 じ居れば其處で消毒する仕組になれり、即ち此甲状腺で十分解毒して終ふ様にな
 つて居れり、併し體外から來る毒で殊に其力の強ひモルヒネや、ヨカインの類とか
 酒や煙草の様に毎日續け様に毒を輸るものに對しては、逆も防ぎ切れるものでな
 いから、其の様な場合には遂に中毒を免れず、夫れ故若し甲状腺に病氣の起るとき
 は其の輕重により或は解毒の働きが十分に行かぬことあり、或は全く其力を失ふ
 ことあり、其所で日々體内に生ずる毒が氣儘に腦を毒することになつて、自づと腦
 に故障が起り始めの中は唯何となく茫然として覺えて居たことも忘れ、善い考も
 出ない位に止まつて居るが、夫が段々進むと一種の病者となるなり、故に甲状腺の
 故障による頭の悪しきものは、首筋の處が張りて居り其處を揉みて貰ふとよい氣
 持のものなり、斯かるものは其處を時々按摩に揉ましむるを可とす、又按摩は一般
 に血液及び淋巴液の循環を催進し、物質交換作用を活潑にし、従つて消化作用を進

め、疲勞を醫し、快感を與ふ次て筋肉及び神經の張力を授け、其効著しきものなり。
神經の使用 神經を過度に使用するは神經を傷ふ原因となると共に、又神經を休
 息せしむること度に過ぐれば神經を虚弱にし終には其用をなさざるに至らしむ
 凡そ人の機能は支へば支ふ程進化し、支はざれば支はぬ、程退化するものなり、例へ
 ば足袋職人の如き手のみを多く支ふ者は手の筋肉が大に發達し、郵便脚夫の如き
 足のみを多く支ふ者は足が壯健なり實に身體は遣へば遣ふ程發達するものにて
 弓の上手の爲朝の左手は右手より二寸長かりしも、之れは左の押手は弓に最も大
 切なる故なり、ヴァイオリンの名手幸田幸子の左手が矢張二寸長いと云ふ、之れと同
 じく神經を使用すること宜敷を得れば益々神經を健全に發達せしむるを得べし、
姿勢 を正しくすること姿勢と神身との關係は大なるものなり、姿勢活潑なれば
 精神も自然に活潑になる精神活潑なれば肉體も又自然に活潑となる故に道を歩
 むとき、人と談話するとき等は姿勢を正しくするを要す。
休息 余り勉強一方にのみ傾きて、休息せざるときは終には健康を失す過度の勉
 強は却て成効を傷ふ基となる、故に大に成効せんと欲せば又大に休息に注意すべ

きなり。
 深呼吸 姿勢を正しくして清潔なる空氣を鼻より吸入し腹一杯となしこらへ難
 きに至り徐々と又鼻より呼出すべし、斯くすること二三回宛するをよしとす、之れ
 は朝洗面後直に行ふを最もよしとするも、便宜上何時行ふもよし、急がしきものは
 歩み乍ら行ふもよし。
 冷水摩擦 早朝起床直に手拭を冷水にしたし堅く絞りて全身隈なく摩擦し、而し
 て後乾きたる手拭にて又よく全身を摩擦するなり。
 催眠術 人の精神を轉換せしむるに妙なり、故に腦中に拂へども去り難き苦悶
 ある場合は、忽ちにして歡天地喜の人たらしむることを得殊に神經衰弱には必ず
 多少伴ふ所の膽力の減弱、強迫觀念、記憶減弱、倦怠、悲觀等を消失せしむること實に
 可驚効あり、よりて自己催眠により克己心を助長し精神を修養することは之を治
 するの早道なり。又藥物療法の効なき疾病には催眠術は最もよく効あり、此症に罹
 れる患者にして催眠術によりて治せざるものに未だ出あひたることなし去り乍
 ら催眠術を堅く深く信仰せざるものは催眠術の恩恵を受け難し。

以上述べたる處は神經衰弱とは何ぞや其症候原因及び治療法なり、其内簡に過ぎ
 て盡さざる所は、腦及び神經健全法と記憶力増進術と題する書に詳記しあるを以
 て同書に譲れり、殊に其中原因の除去、娛樂、精神の平靜發聲、家庭の慰安、運動、食餌、睡
 眠、理想の境遇、便通、按摩、使用、姿勢、休息、深呼吸、冷水摩擦の諸項は獨り神經衰弱のみ
 ならず、何れの病何れの病人も健康體の人も遵守すべき最良の健康長壽法なり、之
 等の攝生法は即ち精神の修養法なるを以て、之を重ぬれば重ぬる程効あるもの也
 故に大効を得んとせば大に之を積まざるべからず、之を例ふれば一農夫あり、他よ
 り上等の米種を買ひ之を蒔かば大に收穫を増すべしと聞き、其種を買ふて蒔きた
 るに十分時間經過するも廿分間經過するも何等の芽さへも出さず、況んや收穫を
 やと大に怒り種子屋は詐偽を行へりと立腹せしとせんか、識者其農夫の愚を笑ふ
 ならん、凡そ米を穫んと欲せば春に種を蒔き秋の收穫に至る迄、幾多の培養と月日
 とを積んで初めて之を穫るなり、何ぞ種子を蒔き二十分や三十分時で實を結ぶべ
 き筈やあらん、宜しく長日月間の忍耐と刻苦とを要す、神經衰弱の治療も又然り、宜
 しく忍耐以て之を積まざれば、折角得たる上等の種子をして無効に期せしめ、世の

笑を招くに至らん。

第三項 神經病治療法

獨習自在自己催眠

神經病とは如何なるものなるかは、前項の記事によりて、略ほ了知せられし處ならん、よりて本項にては、簡單に一言するに止めん。蓋し神經の如何は總ての病氣に大關係を及ぼし、病氣となるべき生理的原因は何物もなきに、唯神經を病みて病人となるもの尠なからず、之れに反して生理上より見れば、病氣に罹るべき原因を有しなから益々健康となるものあり。試に見よ心配せでもよきことをくよくくと終日終夜思ひ續けて病人となるものあり。或は輕症を重症と思ひ詰め、終に重症となるものあり。之れと趣を異にして寒夜襦袢一枚にて腰より下は露出して神詣をなし、益々健康となるものあるを戰爭中敵彈に中りて、大負傷をなし居りながら、負傷を知らずして戦ひ居るものあり。之れ皆神經の作用なり。

催眠術の効用として人の嘖々する處の者は精神の轉換にあり。即ち悲觀を樂觀となし、病心を健心とするにあり。此作用を利用して神經性の諸病をば實に容易に治することを得。神經病と一口に云ふも、其中には種々の疾病あり。歇私的里、依ト昆垚里、鬱憂症、麻痺、痙攣、神經痛を始めとし、前項に記したる神經衰弱、癩、癇等も、神經病の中に屬す。從て其原因と症候に基きて暗示の事項を定め、自己催眠すると共に、自己暗示するなり。而して攝生法をよく守るなり。攝生法は神經衰弱に就て述べたる者と同様に可なり。

第四項 腦病治療法

腦病治療法

腦病の中には種々あり、即ち腦貧血、腦膜炎、腦溢血等あり、之等の諸病に就ては總論の(一)(二)(三)の項目に従ひて治療するなり。即ち其原因と症候に鑑みて暗示法を定めて、自己催眠と共に自己暗示し、尙一般の攝生法を守るなり。勉學過多の爲めに精神を過勞したる結果、腦を痛めたる者は、單に自己催眠さへすれば直ちに回復し、尙其れを怠らざれば益々腦をして明快ならしめ、向上發展して止まざるべし。此攝生法としては、神經衰弱の項に述べたることを實踐するなり。而して此症の爲に特別に要する點を次に述べん。

若し頭部に發熱あるときは冷罨法を行ふべし、冷罨法中簡易なるは、牛の膀胱へ水を容れ、天井より吊り下げて頭部を冷却するか、さなくは水桶に小さき管を附し、其の管より水を少しつゝ頭部に垂らして冷すなり。此法を行ふには豫め頭部を石鹼にて洗ひ冷感浸襲作用を助くるを要す。然れば頭蓋腔内の充血を除却し、頭部の故障を消滅せしめ、而して腦細胞活動に障害せしものを脱却せしむるなり。斯くの如くなさば腦細胞の彈力をして強盛ならしめ、神氣爽快遂に腦内の昏亂を除去することを得べし。

又此症には誘導法が効あるものなり、誘導法中簡易にして危険なきは顛顛、其他痛む所に少しく芥子泥を貼るか或は耳後へ水蛭を附するもよし。水蛭は極く痛むで止むを得ざる場合に少しく用ゆるに止むべし。

第五項 不眠症治療法

夜堅く眠れざれば身心疲勞して快活の動作をなす能はず。故に夜よく眠れざるときは諸病の誘因をなす。よりにて夜は堅く夢を見ず就床より朝起床の時間迄で一眠

りに堅く眠る様の慣習を附くるを要す。此慣習付き居る者は、無病長壽の人なり。之れによりて、不眠症と云ふ一個獨立したる病氣となりたる者は全治せしめざる可らず。不眠病に對して醫師は催眠劑を與ふ、然れ共催眠劑によりて眠るも其眠りは心理作用にあらずして、生理的作用なるを以て眠るも、眞に精神休息せられず、翌日副作用を起して、氣持悪しく寧ろ不眠の儘夜を明かすに如かざるなり、との嘆を發すること珍しからず。

余曾て陸軍々醫某が家庭の不滿が基となり不眠症に罹り前記の嘆を發せるを催眠によりて治たることあり。又醫科大學講師醫學士馬島永徳先生が主治醫として、某材木屋の主人が手足不隨の癱麻質斯患者にして不眠症を併發したるものに極量迄の麻酔劑を數回與へたるに、毫も眠らず、よりにて馬島先生は余に命じて催眠術を行はしめたり。余は其患者に向ひ催眠法を施すや、俄然深睡状態に陥れり。余は催眠中自己催眠の行はるゝ暗示をなしたるに其後其患者は何時にても睡らんと思ふ時は直ちに眠るゝに至れり。此嘶醫學者間にて評判となり。僕の病院に不眠症の患者あり、藥を用ゆるも眠らず、來りて施術を乞ふとて著名なる病院より余を招

きたること算なし。余は其れ等の不眠症の患者をして悉く直に深き催眠に陥れたり之れによつて是れを見れば、不眠症に對する催眠術の價値如何を知るべきなり。

不眠症を治するには一般の原則に従ふて自己催眠すると共に自己暗示し而して攝生を嚴守するなり。其攝生法としては精神を興奮せしむることは一切避くるを要す。即ち感情を高むる如き喜怒哀樂に接せざる様にし、茶コーヒー及び酒類を禁止すること、室の内外をして平靜ならしむること等なり、むらさきと云ふ雜誌に醫學士田村化三郎先生が善く眠る法と題して述べたる處は大に參考となるを以て重複を省みず、其要を次に抄出せん。

(一) 先づ最初に擧ぐべきは就床前に運動する法である此目的には戶外の散歩が最も適當であるが其外鐵亞鈴を振るとか冷水摩擦をやるとか鞦韆をやるとか、何なり獨りで直ぐに出来る運動法ならば善いのである。此法は腦に餘り充血して其れが爲めに安眠を妨げらる場合に最も適當である。畢竟腦に蓄積せる血液を手足其他身體の各部に散らして腦を軽くするのである故に其積で精神を平靜に保ち

努めて體の他の部分を動かすことが肝要である。次に運動後少し發汗した時は微温湯を使ひ善く汗を拭きて床に就けば必らず安眠熟睡が得られる筈である。

(二) 次に述べべきは床に就く直ぐ前に入浴する法である。此法は前法と同じく腦の血液を全身各部に集めやうと云ふ目的である。故に少し心持ちぬるい加減の湯に稍長く浴することが肝要である。且つ清潔法の目的ではないから強いて浴槽の外に垢を落すなどはせず雑と洗ふだけにして永く浴槽の中にて温まり稍發汗するを度として出るのである。且つ浴後床に就くまでの時間は早過ぎてもいかす遅過ぎても悪い。恰度適當の度合がある。早過ぎる時は動悸が未だ静まらぬ爲めに却て眠付かれぬことがある。晚過ぎると湯ざめがして却て眠られない。約五分乃至十五分位で動悸も静まり湯ざめも感せず少し薄ら眠くなる頃が最も就床に適當の時である。

(三) 數息法は佛教徒によつて唱られて居る一種の修養法であるが之を安眠法に應用すると出来る。即ち床に就て居ながら靜かに自分の呼吸の數を一ツ二ツ三ツと勘定するのである。但し是が爲め餘り心を使はぬやう冷靜に心を保ち假令計

算が間違ふてもかまわぬから心の中で數へて居れば善いのである。百、貳百、五百、千と數ふる頃には何時とはなしに安らかに華胥の國に遊ぶことが出来るのである。

(四) 次に床に就いてから心靜かに兩足の趾を屈伸して絶へず動かす法であるが是亦腦の血液を下脚に導く目的である。且つ心を足の爪先きに持つて行き何も外の事を考へず一圖に足先に心を注ぎ足趾を動かし、尙其度數を計算すれば更らに妙である。此法は單に足趾の運動だけゆゑ少し運動の程度が足らぬので高度の不眠症には固より効が薄いのであるが輕症ならば無論有効である。

(五) 就床前灌腸して多量に排便して然る後床に就くとよく眠れる灌腸の刺戟で便通を催す時は大に血液を腸に誘導するものである故に腦の血液も此方に導かれ腦が軽くなり氣分も爽快になり従つて善く眠られるのである。普通の灌腸器で微温湯又は石鹼水を用ひても善いが又は「リスリン」灌腸器で「リスリン」を用ゆる方が便利である。是ならば自分獨りで行ふことが出来るのである。

(六) 誰れでも人が普通に實驗する法であるが即ち横に寢て腰以下の下半身に按摩を命するのである。但し世人の行ふて居るのは安眠法ではなく他の治療的目的

に用ゆるのである。故に折角眠くなつて善く眠つて居るが按摩が終つた頃には賃錢を拂ふとか其他の事情の爲めに起されるのである。故に安眠法としては先きに賃錢を拂ひ其他一切の用事を済し置き其儘眠つて善いやうにして然る後右の法を行ふことが肝要である。

(七) 床に就いてから他人に髪「フケ」を落すとか櫛を入れるとかして絶へず髪をいぢらせ又は「耳かき」にて耳の垢を取らせなどする法である。是は腦の附近に絶へず輕い刺戟を連續して與ふるから自然眠氣を催すのである。此ことは人が常に床屋で實驗するところである。

(八) 床に就て枕元で何か單調の音を連續して發する法である。是亦前法と同じく輕い刺戟を絶えず腦に與ふるのである。此目的に適するものは佛教の御經でも善い念佛でも善い、又は耶蘇教の祈禱でも宜しい、其他何かの低調の音樂でも善い但し音が餘り高過ぎる時は却つて眠られないから極めて低い音でなくてはならぬ。

(九) 前諸法を試みても尙効の無い時は最後の手段としては催眠薬を用ゆる外は無い。此目的に最も適當な催眠薬は「ブルフォナル」であるが今左に其處方例を示

さう「ズルフォナール」一〇、右爲一包、就床時湯にて頓服、右の薬は劇薬であるから素人の手には入らぬ宜しく醫師の證明書又は處方箋を得て薬店より購ふか又は醫師より貰ふ外は無い、余は何時でも一診の上ならば右の薬を與ふるが診察なしの投薬は醫師法で禁じて在るから已むを得ない、此薬は幾度用ゐても決して體に障るやうなことは無いから安心である。

(十) 右の外尙純精神的の安眠法があるから左に述べて見やう。

第一、自己催眠法、是は催眠術の一法であるが抑も催眠術には術者と被術者との二人ある、被術者が不眠症又は其他の病癆病質等を治療する目的で催眠術を受くる時根本的に必要な條件は被術者が術者に對する信任と術者が此信任を博するだけの熟練と威嚴とである、若しも被術者に些しでも反抗心又は不信任があり術者の威と嚴技術とに缺點があれば必らず不成功に終るのである、然るに自己催眠法は自分が被術者であつて同時に術者である、一方に自分に服従する信任が必要であると同時に自分に命令する威嚴が必要である、一身で兩者の役を持つ通り一心に兩様の使ひ分けが必要である、即ち其法を云ふて、見れば、先づ床に就て心の内に大喝

一聲「眠れ」と宣言する、之を催眠暗示と云ふ、次に全心を舉げて之に信任服従する、次に暗示を反復する必要があるので眠れ……眠れ……眠れ……と絶えず暗示を下す、但し心の聲は次第に低く例へば最初の聲の高さを百と假定すれば次は五十、四十九、四十八、……三、二、一、零と云ふ順序に次第に低くする心持にやるのである、最初の宣言だけは特に高くする必要があり、右は實際聲を出しても善いが聲を出さず心に決心するだけでも宜しい、斯くて絶えず「眠れ、眠れ、眠れ」と心に命じ心に服従すると云ふ氣持でやる、此工夫は始めは變だが慣れるにつけ必らず快よく安眠するやうになる。

第二、安心安眠法、此法は純精神的方法で人が不眠に苦しむ時其原因の半分は不安心から来る、例へば少し眠れないとすると直ちに不安の念が起る、衛生に害はありはせぬか、翌日疲れるであらふ、明日の勉強に障れば試験の成績に關する、落第しては大變だと云ふ具合に先きから先きへと心配して不安の念が熾になり益々眠られなくなる故に此不安の念を去ることが出来れば大に安眠し易くなる、即ち到る所に安心を求むるの工夫が肝要である、少し眠れない、安心してジツとして居る

忘念雜念が起る、安心して楽しんで其雜念空想に耽つて居る、餘り眠られぬ時は眠らぬまゝに安心して何か考へごと又は仕事をする眼が冴えて却つて仕事は出来ることがある、安心して着々進行する、左すれば曉頃までには翌日一日分の仕事が出来来るかも知れぬ、と云ふやうな風に何處までも樂觀して安心を求め、決して悲觀せず不眠が続いては大に體に障るであらふと云ふ觀念を全然除去するの工夫が肝要である、是ぞ即ち病魔と闘ふに機先を制する純精神的の安心安眠法である、(十一)時々不眠に陥り易い人の特別の病の外は多くは神經質の人である、前記の諸法は皆一時的の安眠法であるが不眠病を根治して將來如何なることがあつても決して不眠に陥らぬやうにするには此神經質を根本的に矯正することが必要である……

以上は田村先生の高説なり、先生は眠る法を生理と心理とに分け、心理に關する一點を稱して自己催眠法と云はるゝも、余が云ふ自己催眠は心理生理を合せしものにて藥物療法及び鍼灸療法の如き殊別の法規によりて一定の資格あるものゝ外爲すことを得ざる療法を除くの外は悉く含有せしめ或は其中に自己催眠の實行

法となるもあり、單に準備となるに過ぎざるあり、攝生と見做すに過ぎざるものもあるべし、議論は何れにしても實行法は期する處一なり。

第六項 吃音矯正法

言語を快活に流暢になすを得ざれば、何業と雖も成功し難し、故に言葉使ひの法に付き大に注意し研究するものあり、然るに吃音に罹らんか人の前にては思ふことを口にて發表すること能はず、自分獨りしか居らざる處にてはすらくと甘く喋れるに拘らず、少し威儀ある人の前に出るや吃りては困るとの感念胸に浮ぶと共に言葉吃りて出でざることゝなる、よりに之れを治せんが爲めに自己催眠すると共に其症候を打消す處の自己暗示をなすなり、例へば(一)何日でも如何なる席に列するも精神は静まりて虚心平氣となり居る、(二)自分の吃音は取れて非常の辯者となれり、今は辨のよきことを人に誇る位地に達せりと自己暗示するなり、然して之れが攝生及び修養として、特別に注意すべき點は(一)腹式呼吸即ち腹を以て息をすることを練習し横膈膜の伸縮を自在にするなり、腹式呼吸一に横膈膜呼吸を委しく説明すれば六ヶ敷けれど、一口に云へば普通の胸を横に膨らまして呼

吸する代りに堅に之れを膨らまし腹に力を入れてするなり。吃りの原因は息を多く貯ふることの出来ぬ爲めに、自由に發音することを得ざる者故腹式呼吸を行ひて息を充分に貯へ深き長き發音に差支ならしむるが肝要なり。斯くて息を充分に貯るを得發音の土台が出来れば次に取掛るべきは、(一)發音の練習なり、先づ「アイウエオ」を先にし、次に「ハ行次」に「タ行サ行マ行」の發音を練習し、差支なきに至らば五十音を縦横自在に連續して發音するなり、之れが甘く出来れば何の言も滞りなく出来るものなり、凡ての日本語は此五十音にて構成しあればなり、唯此に注意すべきは獨りで發音し、獨りにて聽く丈けにては發音に不充分の處あるも、之を悟らずして惡癖を矯正するを得ず、よりて發音を人に聽きて貰ひ正しからざる所を指摘し貰ふて矯正するをよしとす。例へば「ア」と呼ぶべきを「アー」と呼ぶ如き誤りありては發音練習の効甚だ少なくて終るべし、(二)詩歌の放吟、音讀及び親友と快話すること、(四)膽力、の養成に勉むること等なり。

第七項 寢小便矯正法

此病氣を治療するには、總論の原則に従ひて自己催眠すると共に暗示すべきことは、(一)身體は暖かくなれり、(二)尿は遠くなれり、(三)夜寢て居りながら小便することなくなれり、(四)小便したきときは目醒めて便所に行きし後に必ずなすと自己暗示するなり。

保養としてはが刺戟性の飲食物、即ち酒類、胡椒、及び鹽辛き物等を禁すること、(二)午後より水類を避け就中就寢前には嚴禁すること、水類は獨湯茶の類に止まらず、水分多き梨子密柑等をも午後は禁すべし、(三)食物は成べく身體の暖まる肉類をよしとす、從て身體を冷す食物は禁すること、(四)寢小便する小兒を夜數回呼び醒まして、小便さするは惡し一回の外なすべからず、(五)寢小便は病氣にてなす故同情して決して苛酷な小言を云ふべからざること、(六)蒲團は堅くして薄きをよしとす、かいまきも軽くして敷き蒲團の足の方を高くするをよしとす、(七)精神の過勞を避け、て安靜ならしむること等なり。

第八項 船車暈癖矯正法

波濤荒き海洋を航行して船暈に罹るはまだしもなれど、汽車電車甚たしきは馬車に乗りてさい、目が廻りて苦しむものあり、其原因に就ては種々の學說あるも、耳の中に靜動官と云ふて身體の動靜を司る處あり、其靜動官の異常によるとの説現時有力なる學者の採る處なり、余は元非常の船車暈症ありしも、自己催眠をすると共に爾後決して船車に暈ふことなしとの自己暗示をなし、而して攝生としては、身體をぐるぐると回轉させて、目の廻るに慣れしめ、船車に乗り居るときは、勉めて平氣にし何か樂しきことを胸中に思ひ浮べつゝ居りたるに、何日しか船車暈の癖は消へて今は船車暈を知らざるに至れり、思ふに船中にて目が廻り初めたら直ちに、自己催眠をして眠つてしまつたら可ならんと信ず、然れば身は家屋の内に安眠せると異らず、何事も知らずして濟むものなり、次に醫師神谷壽貞先生の船暈に對する症狀と豫防法とを紹介して参考に供せん。

「症狀に至りては先づ悪心及び嘔吐を以て主徴とし之に加ふるに減尿あり便秘あり或は發汗あり漸次皮膚冷却して終に瞳孔縮小を來し歩行蹣跚として身を支ふると能はざるに至るを常とす、左れば其初期に於ける者若くは輕症なる者に在り

ては船の埠頭を離れて沖合に出で稍々動搖を起すと共に次第に身心違和を感じ働作自ら惰くなりて頻りに欠伸を催し或は睡氣を誘ひ渴を訴へ體温の増加を覺え、次で頭痛を發す、夫より症狀の進むに従ひ右の症候は歩一步増進して恰も眩暈の状態に陥り體温益々上昇して輕度の發汗を來すべし、恁くて食慾全く缺乏して強て食事を取れば忽ち嘔氣を促し神經官能概して過敏となり光線微に照すも尙ほ且つ瞳孔を刺し音聲微に響くも尙ほ且つ鼓膜を衝き殊に臭覺鋭敏となり機關室倉庫、便所、食品等の臭氣著しく鼻神經を刺戟し嘔氣爲めに一層催進せらる。

かくの如くにして精神作用は抑制され漸次沈鬱状態に陥りて、談話を厭ひ讀書に惰く記憶力思考力共に減退するに至る、又其重症なるものありては症候更に増悪して著しき發汗を來し胃部の感覺頻りに過敏となり、悪心倍す加はり遂に嘔吐を發す其吐物は始めは胃の内容物なるも症狀の昂進するに隨つて膽汁を吐出し又頻々嘔吐を重ねるに及びては遂に血液を咯出するに至る、恁くて眩暈益々加はりて眼前の物體總て回轉するが如く感せられ視野朦朧となりて正視すると能はず且つ顔色蒼白に變じて四肢殆ど其用を爲さざるに至る、然れども其豫後は如何

なる重症と雖も生命に危険を及ぼすが如きとなく、船の陸岸に近きて投錨すると同時に各種の症候全く緩解して上船以前の健康状態に復すべし。其豫防の法に種々ありと雖も成るべく大なる船舶を選びて搭乘し且つ船の中央に占居すると是れ其一なり、船の解纜するや直ちに船室に入りて休息すべからず其進航約一時間は必ず甲板に在るべく、且つ船室に下るも其窓口を解放して空気の流通を善からしむること其二なり、乗船前一日に於て甘汞其の他良好なる下劑を服用し充分便通を利せしめ置き、上船後は多く便秘を來すものなれども決して俄かに下劑を服用せざるを可とす、是れ船體の動搖に抗する腹部の固定力を補助せんには多少の便秘は生理上必然の要求なればなり、左れど乗船前より便秘を存する者は乗船の前日下劑を服用して腸内を清掃し置くの必要なるとこれ其三なり、暴飲暴食等の不攝生は容易に船暈を招くの因を成すものなれば洋行前の如きは殊に之を慎み彼の連日連夜の留送別會に飲食度を過して休眠足らざる如きとなきやう努むべし故に上船前一日は成るべく身體を靜平に保ち十分に休養すべきと是れ其四なり、平素己れの口に慣れたる食物を攝取するは衛生上何れの場合

にも必要なれども、船中の食物は到底此目的に副ふ能はず、故に最初は餘り多からざる量を取り漸次習慣を作るとに心懸くべきと是れ其五なり、胃の盈虚共に不可なり、殊に空腹なれば最も船舶の動搖に耐へ難し、故に少量づゝ屢々攝取し毎食後十五分時間は必ず安息すべきと是れ其六なり、葡萄酒、麥酒、茶、珈琲及び湯水等液體を多量に飲用すべからざるは是れ其七なり、甲板の運動にも船内の歩行にも身體を柔軟に保ちて左右彼此片々體位を船動の方向に任すべきと是れ其八なり、船内にて供せらるる食事が肉食な時は一日一回左の調合藥を服用し消化機能を補はしむべし是れ其九なり。

稀鹽酸 一、〇グラム 番木鱈丁幾 一、〇グラム 蒸溜水 三〇、〇グラム

船中に在りては酸味あるものは果物にまれ、飲食物にまれ、決して多量に食用すべからず、殊に嘔氣を催す際の如きは絶対に之を攝取せざるを可とす、唯鳳梨及びパイアは共に蛋白質を消化する成分を含蓄するを以て肉食の後には食用するを妨げず、是れ其十なり、夜に入りて眠りに就かんとする時一盞の炭酸水を飲用すべし翌日必ず神氣爽快なるを覺えん、是れ其十一なり、腹内臟器を固定せんが爲めに

常に腹帯を緊縛すべし是れ其十二なり。船體の波動と共に上下する時深呼吸を爲すは必要なり、即ち船の下降する際深呼吸を營み上昇する際は深呼吸を營むべし是れ其十三なり。何事にまれ専念一定の業を取り船の動搖に顧慮せざるとも亦自家誘念術の一として必要なり是れ其十四なり。力めて大膽豪放なるべきと是れ其十五なり。又嘔氣起り來らば腹部を緊すべし。かくて嘔吐の後は一抔の冷水を飲用すべし。然る時は又須臾にして嘔吐するを常とす此に於て更に幾度も冷水を飲み幾度も吐出すればやがて嘔氣の止む時來るべし。愆くすれば胆汁或は血液を咯出するが如き患ひなく隨て苦悶も少なし加之冷水に據りて却て胃洗滌を爲したると同様の結果を來し、嘗て消化不良を患ひたりし人も爲めに消化機能を健全ならしむるの效果あるべし。……」

第九項 眼病治療法

眼病中催眠術によりて顯著に治し得る病名は、近視眼、遠視眼、夜盲、色盲、斜盲、晝盲なり彼の流行眼、霞眼の如きは實に容易に治す、自己催眠法は物体を見詰る法を除き

他は悉く行ふを得、暗示法は各其症候に基きて定め、攝生としては消化し易き滋養物を食し眼を使はずして精神を冷靜になし居るなり。

第十項 胃腸病治療法

胃腸病には種々あり、即ち胃加答兒急性と慢性胃潰瘍、胃癌腫、胃擴張、胃瘰(俗に癩胃酸過多、胃酸減少、胃神經性、疾病、腸加答兒急性と慢性とあり)盲腸炎、腸癌腫、腸箱頓、腸出血等數多の病症あり、各其病症の容体に基きて、自己催眠すると共に、自己暗示しつゝ患部を己れが手指にて輕くの字形に揉むなり、而して一般の衛生法に基きて保養をなすこと等曩に各病癰に就て述べたる處を準用するなり。

第十一項 泌尿生殖器病治療法

病氣の容体を人に語るも恥がしく窃に心痛甚だしくして同情に堪へざるは泌尿生殖器病者なり、此病ひの中には種々あり、其中にて催眠術にて治すと學說實驗一定せる者は戀病、早漏、夢精、遺精、遺尿、陰萎、流產癰、早產癰、包莖、月經異常、陰瘰、陰加答

兒、白帶下、性慾亢進、淋病、消渴、子宮病等なり。之等の諸病の原因症候は爰に述ぶるを憚ること多きを以て之を省略す。自己暗示すべき要點は各其症候に基きてなし。攝生としては(一)精神を高潔ならしむる様に工風し、實感に關係なき高尚なる娛樂及び仕事に興味を以て勉むること(二)食事は毎日適當の量を定めて過食せず、常に滋養多き物を選び、辛辣性物及脂肪多き者を除き、飲酒には上等の葡萄酒或は少量の麥酒を用ひ、日本酒はなるべく禁じ(三)食後直ちに臥床に入り、或は深更まで眠らざることなく、早寝早起して冷水摩擦を行ひ(四)精神を冷靜に保ちて時々洗湯に浴すべし(五)若し夜中に目醒めし時は直ちに自己催眠を行ひ直ちに就眠する習慣を附くべし。

本節を終るに臨み一言せん。自己催眠にて治し得る病癰は以上述べたるものに限るとの意にあらず。以上擧げたる處の者は治し得る病癰中最も顯著なるものを列擧したるに過ぎず。如何なる病人にても解剖的大傷害のなき限りは催眠術に付いて信任さへ強ければ誰にても何病にても必ず治すことを斷言して憚らざるなり。よりて如何なる病癰に就てなりと前述の方法を準用して試みられんことを熱

望して止まざるなり。

第三節 自己催眠によりて不思議の現象を起す法

自己にて自己を催眠せしむることは何人と雖も必ず成功す。唯其成功に難易あるに外ならず。何故に難易あるか、其人の精神が催眠に適合する性質なると否とによりて分るゝなり。代言すれば催眠感性の高低によりて分るゝなり。催眠の深淺も感性の高低と相伴ふを原則とす。依他催眠即ち術者に催眠を施さるゝ場合も感性の鈍きものは催眠淺くして不思議の現象を呈すること甚だ少きものなり。稀には不思議の現象は殆んど現はさざる者あり。之れと同一理論によりて自己催眠にては一層不思議の現象を現はすもの少なし。稀に現はす者と雖も長年月の間研究し修養したる結果なり。實に自己催眠による奇現象は單に五日や十日否一月や二月の工風實驗にて成功するものにあらざるを常とす。よりて之を研究せんと欲するものは輕忽にも一寸位實驗して甘く行かざるとて、之れは欺瞞された僕には出來ないなぞと思ふ者あらんか。之れ飛でもなき心得違なり。宜しく氣を永く研究實驗す

べきなり、斯くの如く自己催眠によりて不思議の現象を起すは至難の事なるも、自己催眠によりて病癪を治することは容易なり、感受性によりて感應に強弱は免れざるも、自己催眠によりて病癪は必ず治すとの確信さへ強ければ、必ず何人にも悉く治療し矯正するを得ることは余の知れる幾多の斯學研究者の成績により確實なることを立證して餘りあり。

自己催眠によりて不思議の現象を現はす方法は別に斯くくせよと文字の上には現はすことを得ざる微妙の者なり、例へば書畫を能くするものに向ひて、貴殿は筆を持つて如何やうにして書くや、其心得を嘶せと迫りて之を聞くと、其心得を聽きたる丈にて其人と同様に書畫を能くすること能はず、之れと同様に自己催眠によりて不思議の現象を現はす方法も口に語ることを得ざる機微あり、殊に無形なる精神の持ち方によるもの故、文字に寫すことは殆んど不能なり、只其方法として述べ得る處は次の如し。

第一項 肉体は一室に居り乍ら精神のみ

轉地療養をなす法

此法は自己催眠すると共に轉地療養の自己暗示をなし感應せしむるなり、自己催眠を爲すに當り、今之を實行せんとする目的は、苦悶を忘れ疾病を治せんとするにあり、其手段として鎌倉の海岸に轉地療養をせん、身は今既に鎌倉の海岸にあり、廣々とした海上に白帆の漂ふを眺め居るなりと確信し、想像すれば身は實際其境にある如く心像にありくくと現はるゝものなり、此作用を利用して一室に寢て居り乍ら嗜きな芝居を見遠方にある朋友と遊ぶことを得、試に見よ算術の難問に心を苦しめ、或は圍碁の戦争に思を凝らして何氣なく就眠すると夢にて算術の式や解答がありくくと現はれて難問を解することあり、或は夢に碁面の有様ありくくと現はれ、妙手を發見することあり、之れは自己催眠によりて轉地療養をなす精神の狀態と同様の原理によるなり、即ちよくある處の何事か深く腦裡に刻み込みたることあれば、其事を夢に見ることあり、其れと同一理なり、唯一は豫期せずして偶然に生じたと、他は豫期して故意に生せしめたとの差あるのみなり、自己催眠によ

る不思議の現象は皆此原理によりてなる。之を六ヶ敷く心理學上より述ふると面白き議論あるも、其は専門の大家に譲りて、次に余の許にて自己催眠を學びし、埼玉縣北足立郡草加町大字南草加一六一番地、北條大助君が報告したる處の實驗談を紹介せん。

「生儀明治四十一年四月十日午前十一時頃自宅に於て自己催眠にて東京淺草觀世音に參詣したり。其實験は先づ蒲團を積み重ね室を暗くし、白紙に淺草觀世音參詣と書し其れを懷中し、其事を思念し心力を注集して臥し、呼吸を算し居ると精神次第に平靜となり恍惚となり、全く無念無想となれり、時に神風吹き來り、全く我體は風に誘はれていつの間、にやら花の都の淺草觀世音の雷門の前に立てり、種々なものを賣り居る店の前を多くの人と共に歩みて進めば、仁王門あり、門を過ぐれば多くの鳩居りて人目を喜ばしむ、次に觀音堂に至りて參詣し、堂の裏手にて噴水を見、八卦者の前を通りて花屋敷の處迄來りしとき……傍に弟來りて兄さん〜と呼びつゝ、余の肩を叩けり。余は驚きて目を醒したれば其れにて實驗は終れり云々……………」

獨習自在己催眠

之れに類せる報告は多くの學者より數千通を寄せあり、曾て余が東京新報へ掲げたる事ありし、或將校の未亡人が自己催眠によりて生前の本夫と手を携て上野公園を散歩したりと言ふことあり、之れ皆同一理由に基ける現象なり。

第二項 口寄せ及び乘氣の法（降神術）

俗に個人に全智全能の神が乗り移りたりと稱する場合を降神術と言ふ、肉體は依然個人として變りなきも、精神は全く變りて個人の精神は消へて神の意となり神が個人の口を藉りて神意を人に告ぐると云ふ神人合一の現象なり、然し乍ら之れを吾人の目を以て見れば其個人は自己催眠によりて無念無想となり、何等の考への起きざる状態となり居る精神状態にあるとき、無意識的に胸に浮びたる處を語るなり故によく過去現在又は未來を豫言して誤らざることあるなり、尙催眠術上不思議の現象に就ては「驚神的大魔術」に余は詳述せるを以て、爰には單に一言するに止めん、同書には降神術、天眼通術、見神術、幻覺錯覺の事等遺憾なく陳出せり、よりて之を深く研究せんとせらるゝ、御方は御參照ありたし。

口寄せと乘氣の法

第三項 居ながら遠方の状況を知る法（天眼通術）

此現象は一室の中に居り乍ら遠方の有様を實地其場に行いて見たる如く知る法なり。例へば東京の一室に居り乍ら大阪の有様にては北海道の有様にては實際其場に行いて見たる如く云ひ當つるなり。此現象は催眠術師が被術者を催眠せしめて其れに尋ねると明答して誤らざることあるは人の熟知する所なり。自己催眠にて此現象を現はさんとするには、己は眠りて無念無想の境に入れば、己が知らんと欲する處の有様は心眼に映じて明かなるべしと、確信し豫期して催眠すれば、催眠中に明に見ゆるなり。例へば東京芝區の余の宅にて自己催眠すれば、催眠中に知らんと欲する大阪西區江戸堀に居る友人の有様を見るを得べしと確信し豫期して催眠すれば實際其時刻に友人が大阪にてなし居る有様あり、心に映するなり。其映じたる通りに書いて友人に書面を出し、某日某時君は斯くくなし居らずやと尋ねれば當てられし友人は大に驚くなり。此現象を現はすことは頗る困難にして、餘程研究を積まざれば行はれざるものと知るべし。又斯様の奇なる事が平

獨習自在己催眠

凡に矢鱈に出來た日には、試験問題の前知や敵情の前知をなすを得、社會の秩序一變することゝなる。今の處にては之を研究すれば其域に達するを得べしとの希望に過ぎず。

第四項 神佛を現はす法（見神佛法）

元來自己催眠は自己の精神上に於けるものにて、他人の心神に及ばざるものなり。よりにて爰に神佛を現はす法と云ふも、他人の眼又は心に神佛を見せしむるの法にあらずして、自己の精神に神又は佛が見ゆる場合を云ひたるなり。次項に述ぶる幻覺錯覺皆此意なり。神又は佛は目に見るべき有形物なりとの説は今顧みる學者なし、よりにて神又は佛なるものは無形にして心に見るべきものなりとの説に基きて述べんとするものなり。

學者が所謂神又は佛を見たりと稱する精神の狀態は、其人の精神は此世に於ける善惡とか曲直とか喜怒哀樂とか哀樂とか云ふ境を超越したる所の者を云ふものゝ如し。斯かる清淨の精神を目して神或は佛に近づきたるなりと云ふ。此精神となるに

神佛を現はす法

は其ことを豫期して自己催眠すれば、豫期の結果として其境を得るなり、其詳細は總論を適用するものと知るべし。

第五項 幽霊又は怪物を現はす法（幻覺錯覺）

幻覺とは何物もなきに有る如く見へたり聞へたりするを云ふ、錯覺とは或者を誤りて觀念することなり。例へば目前に何物もなきに妖怪見へ、何等の音なきに「オルガン」の音が聞ゆる如きを幻覺と云ふ、錯覺とは白地の浴衣を着たる人を見て巡查と思ひ、松影を大蛇と信ずる如きを云ふ。之れ催眠術の現象として人の嘖々する處なり。即ち某女は枕を抱きて猫と思ひたりとか、今日の前に美人立てりと云はれ何物も居らざるに、美人見へて喜びたりと云ふ如きは人のよく知る處なり、自己催眠によりて豫め見んと欲し或は觸れんと欲することを豫期して催眠すれば其通りに感ずるものなり。日常の經驗によるも粗末な食も之れは結構な物なりと思へば甘く食へる彼の人は程のよい人なりと思へば益々程よく見へる。小兒が紙幣を手に持ち居るを親が其れはばだ棄て、お仕舞ひこんなよい物をやると云ひつ

獨習自在自己催眠

木葉を示せば小供は紙幣を棄て、木葉を手にして喜ぶに至る。之れ皆暗示の現象なり。

幽霊怪物を現はす法

一とつ目の入道なり幽霊なりを見んと欲せば、自己催眠しつゝ、斯くすれば枕元に其者現はれ見ゆべしと確信し豫期して實行すれば、其通りのものが實際何物もなきに現はれ見ゆべし。之れ即ち幻覺なり、又死せし親の寫眞、或は遠方にある親友の手紙を前に飾り其寫眞或は手紙が親或は友人と見へ互に胸中を嘯し合ふことを得と豫期して自己催眠すれば催眠中に其通りの現象を現はすものなり。其他催眠術一般の現象は此方法によりて現はすことを得而し不思議の現象として上述したる所の中、見神術は最も容易に現るべきも、其他の現象は頗る至難なり。幾多の研究を要す。然れども治療、矯癖及び品性の陶冶、精神の修養は少し研究すれば誰人にも必ず出來得ることを余は責任を以て確證す。

自獨
在習
自己
催眠
終

鐵古屋
催眠術
實驗批評集

第一章 反抗者催眠不思議な現象

(明治四十五年五月發行臨時增刊雜誌科學世界より抄録)

(一) 不可思議幻妙の現象

去月九日夜東京芝區精神研究會に於て催眠術の實驗があつた記者は其席に臨んで實驗の模様を見て催眠術の不可思議幻妙なるに驚嘆した。

會長古屋鐵石氏が實驗を行つた、被術者を室の中央に立たせ古屋氏が其の面前に立ちて一度睨みつけて兩手にて被術者の面前を撫ぜ下せば被術者は笑ひつゝ、しきりに拒む、古屋氏が手を一つ打てば直ちに突立つて動かぬ全く深き催眠に陥つたのである。夫れより古屋氏が一言ふと被術者の眼が白くなり二で舌が出て三にて手が上り四にて足が上つた爲め、被術者は椅子より滑り落ちたが依然とし

て同じ状態であつた、古屋氏は観客に向つて、最早催眠状態に陥つて居るから如何なる事をして、決して感じなく、手を切り落すとも感じないから傷をつけない限りは宜敷故覺まさして見られたい」と云ふたら、一人の者が被術者の所へ行き面部へ劇しく息を吹きかけたが被術者には何等の變化も與へなかつた、観客の某が古屋氏に其催眠状態で、千里眼の如きことが出来ますか」と尋ねたら、古屋氏は、千里眼位は何でもなく、萬里眼でも億里眼でも出来ると答へられ言葉を過ぎて、今千里眼よりも不思議な實驗を御目に掛けます」と云はれて實驗をされた。

(二) 術者の考へが被術者に通ぜり

其實験は古屋氏の考へて居ることが被術者に傳はり夫れが行爲となつて現はれるのである、之が出来れば甚だ不思議と云はねばならぬ、所が出来たのである、古屋氏は皆様の中の誰か、考へて居る事を私が聞いてやつてもよいが時間がない故簡單なる事を私がやつて見ます」と云ひ、古屋氏が被術者に向ひ、今私の考へることを行へと暗示して、二間程離れて氏は被術者を瞥めながら満身に力を入れて何事

か考へを傳へた、すると被術者は始め眼を白くし次に舌を出し次に手を上げ次に足を上げた、これ氏の考へが傳はつたのである、古屋氏の語るには、之れは如何なる遠方にてするも差支ない百里遠くに居るものにて考へを傳へることが出来る、本日二階に被術者を置き下に實驗せしところ同じ現象を呈した、此理で宇宙間如何に遠くにあるとも同じである、そこで人を祈り殺すことも又遠方の者の病氣を癒すことも或る程度までは此現象で説明されると云はれた。

次に古屋氏の發明されたと云ふ實驗を行つた五十二枚のランプ中より數枚を抜き取り、其ランプ中の一枚を観客に取りしめ、夫れを氏が見て心に考へ、絲によつて被術者に考へを傳へしめる事である、氏は二間位の細き麻絲を採つて被術者の左手に暗示を與へて其絲を持たしめ、更に一重手に廻し置きて其一端を古屋氏が持つた、此絲は五間あるも六間あるも亦百間あつても同様である」と云はれた、氏は観客に一枚抜かしめ、其のランプを見て絲の端を持ち、被術者に、もう解りましたネ、云ふて御覽」と云へば、被術者はスパートの六と云ふて明かに適中した、次にはダイヤの八と云ふてまた適中した、氏は短い言葉にても長い言葉にても繩を傳へ

て通ずることが出来る」と断言された。

(三) 催眠者観客の所持品を當てた

次に古屋氏は被術者に暗示を與へてハーモニカ、手風琴、ヴァイオリンも美事に奏さしめた、今度は被術者の面部を白布にて幾重にも蔽ひ観客の所持せる品物を當てることを行つた、古屋氏は被術者の椅子の側に立ち観客の示せる品物を見て考へを傳へしむれば暫くにして「鐵瓶」と答へ適中した観客が直に「其口は何れの方を向ひて居ると問へば暫くにして「前を向いて居ると答へ適中した、今度は時計の鎖を示せし處これも適中した、古屋氏は「前には懷中物を當てた」と云はれた、次に暗示を與へ樂隊と三味線の音を出さしむれば一分毎に片手宛、活動寫眞の樂隊と三味線とを鳴す手附きをしながら口にて其真似をするのである、次に新聞賣と納豆賣の聲色も同様になした、次に古屋氏は「諸君が隨意に數字を書て夫を私が考へると被術者が當てる、餘り多くの番號の數字では複雑するから千位以下が宜しい」と言はれた、すると余の隣の者が紙へ八百五十と書た、すると氏が之を見て被術者の椅子

の側に行き考へると暫くして、八百五十と適中した、次に被術者をして大聲に歌ひながら劍舞を一つ演ぜしめて後醒ました。

第二章 新發明の口笛催眠法

(明治四十四年九月十一日發行「萬朝報」より抄録)

(一) 口笛とハーモニカとの吹き方によりて人を意の儘に催眠せしむ

昨夜芝琴平町精神研究會で新發明の催眠術實驗を行つた、術者は同會の古屋鐵石氏で先づ學生を椅子に凭せ、鐵石氏三間許り距つて、二回口笛を吹くと手もなく催眠状態と爲つた、餘りに飽氣ないので五十餘名の來會者は眠つた振ではないかと疑ひ出した、鐵石氏其れと見て取り、此者を醒す事ができれば失禮ながら百圓差上げますといふ、立會人が大なる鈴を鳴らしたけれども覺めない、鐵石氏更に口笛を吹くと、催眠者は義太夫を語り出す、又手を動かし足を踏張る、芝居の真似をする、次に氏がハーモニカを吹くと大聲で笑ひ出す、今度こそ眠りから覺めたのかと思つ

て耳の傍で大聲で呼び、體を揺すつたが依然として催眠して居た。

(二) 催眠者詩歌を詠ず

更に君は大詩人であるといふ暗示を與へると立會人から題を出した五言の詩は四分間、都々逸は二分間、川柳一分間、新體詩三分間で手早くすらくと書く洋杯へ水を盛つて、是れは麥酒だ、君は好きだから飲めといふ、甘さうに飲んで手風琴を奏し、ウワイオリンを弾く眞の刀を渡すと劍舞をやる、此間約二時間に亙つた、九時三十分になつて、やはり暗示のピアノの音楽で覺醒し、暗示通り帝國萬歲來會者諸君萬歲を叫んだ、口笛二回で施すとは催眠術も進歩して來た。

第三章 催眠者月琴を弾き唱歌を唄ふ

(大正元年十一月十一日發行「やまと新聞」より抄録)

(一) 一聲の氣合で深く催眠せしむ

十日午後六時芝區琴平町精神研究會主古屋鐵石氏の催眠術實驗を見に行つた、青

年を席上中央に設けられたる椅子に腰を掛けさし、古屋氏一聲高くエイツと氣合を掛けると件の青年は催眠状態に陥り氏の言ふが儘に或は笑ひ或は怒り、或は月琴を弾き或は唱歌を唄ふなど斯術の効果は中々面白い、夫れから何人の提出せる問題に對しても直に筆を以て應じ得ると云ふ。

(二) 催眠者記者の出題に應じて俳句を作る

記者は大演習と川越町と云ふ題で俳句を注文したら、武藏野の川邊に小銃響きけり」と答へた、併し覺醒後は一向書く事もできなかつた。

第四章 催眠者左手で字を書き犬猫に變換す

(大正二年一月十四日發行「やまと新聞」より抄録)

(一) 藝妓と義太夫とに人格を變へたり

芝琴平町三精神研究會では去る十二日午後六時から催眠術實驗會を開催した、集會者數十名定刻となれば二階の大廣間に綺麗な椅子を置いて、それに會員北榮壽

と云ふが腰をかけると、これも會員の永富金城と云ふが施術者となつた、充分に催眠させて置いて左手で字を書かせた、被術者の北榮壽は腕を揮つて「龍虎催眠」といふ字を書いた、頗る立派な者であつた、次で棒寄や自己催眠等があつた、最後に會長古屋鐵石氏は一青年を催眠させて藝妓、義太夫、琵琶師、狂言師、大臣、犬、猫、鶏にまでも人格を變換して見せた、散會したのは十時であつた。

第五章 催眠者役者となりて狂言をなし

藝者となりて歌を唄ふ

(大正二年一月十九、二十、二十一、三、四日發行「新潟新聞」より抄録)

(一) 實驗會場の光景

芝區琴平町の精神研究會にて催さるゝ、古屋鐵石氏の催眠術實驗會に招待されて在京の宿所を出た。暫く行くと西洋造りの家が在つた、入口の太い門柱には「精神研究會」と階書に書いた札が掲げられて居た、門を入つて花崗石を敷き詰めた道を玄關へ急いだ。

案内されて、二階へ登つた、二階には精神研究會の會員で、今夜の催眠術實驗會の幹事の一人なる北榮壽君が居て『さあ此方へ』と座布團を持つて火鉢の側へ座らせた。先着の會衆は『靜肅』と書いた承塵（まゆ）のピラを見詰めて廣い日本間の座敷に呼吸を吞んで座り込んで居た。「茶は御隨意におわがり下さい」と書いたピラも下つて居たけれども、神の默示を受けるクリスチャンの様に呼吸さへ吞んで神妙に納まつて居る、一閑張りの大きな机の上に茶器が雜左無ささうに明るい電燈の光に反映して居た。森として何の音も聞えない。

實驗室正面の中央が一間の床に成つて、其處には紺地の極彩色の文珠菩薩が白毛の獅子に乗つて居る大軸が掛けられて、五彩絢爛目覺める様な花籠が其の前に飾られてある、つゞちの床柱を境に右手の遠棚には、幾つかの實驗の道具や月琴やハルモニカ等様々な樂器が飾られて、床の左手には大銀行家の書齋にある様な大きな事務用机が拭き込んだ板面に電燈の光を滑らして銀の金具がキラキラと光つて居る横手組子の書院障子を後に緋天鵝絨の椅子がズラリと並べられて『新聞記者席』と之もピラが下つて居る、實驗室中央には乳白色の曇り硝子に梅花の模

様を抜いた井型の笠が釣るされて、電燈が隈もなく室の四隅に麗やかな光を浴せ、電燈の下には鞣した牛皮の大きな安樂椅子が置かれてある、之れが施術椅子だと北君が説明した。施術椅子の横手に深緑色のテエブル、クロオスを掛けた大きな丸テエブルがある。丸テエブルの後の方に、寫真屋の撮影室に在る様な蛇腹の房を重い程下げた椅子が配置されてある。丸テエブルの上には新派劇の舞臺面に飾られる様な玻璃製の水入れとコップとタガヤサンの硯箱とが、モツタイらしく飾られて在る、之も皆實驗に必要な品だと北君は説明した。座敷の欄間には展覽會場の様にぐるりと金縁銀縁の洋畫の額が掛け並べられてやはらかな電燈の光線に打通しの座敷は夢の様に眠つて居る。静寂を破つて實驗室に掛けられて居る時計が七時を打つと間もなく二人の青年が實驗椅子の前に現はれて軽く會衆に叩頭して。

『これから實驗を始めます』と云つた。髪の毛を長く、左右に分けた男は、實驗椅子の上へ倒れる様に腰を掛けた、五分刈の愛嬌者と云つた顔の造作の男は其右に立つた。分け髪は被術者で五分刈は施術者である。施術者は被術者を最も樂々

する様に取り扱つて、頭から頤へ掛けて白い手拭をフワリと冠せて『君は非常によく眠る』と被術者に囁いて軽く白布の上から頭を四五回撫で下して、それから眼の邊を撫ぜ手を撫ぜた。また『君は非常によく眠る』とくり返して、今度は胸から下腹部の邊を軽く撫ぜ廻した。恚うして三分ばかりすると施術者は被術者の身體から手を放して『君は既う眠つた、非常によく眠つた、君はもつと深く眠る、もつと深く眠る』と幾度も小さい聲で、くり返しくり返し被術者に暗示して、顔に掛けた白布を取り除いて『君は非常によく僕の暗示に感應する、精神は爽快である、君の頭腦は非常に軽い、君の血液は非常によく巡つて居る、君の氣分は非常に愉快である、君は非常によく僕の暗示に感應する』とくり返した。被術者は霞に酔つた天使の様に軽く眼を閉ぢて頽然として、實驗椅子の上に眠つて居る、此の間略十分時。

(二) 催眠者手に針を刺し貫かれ

たることを知らず

『御覽の通り誠によく眠りました之れから極く簡単な實驗を御覽に入れます』と云つて、そして『君の手は如何に下げやうとしても段々上へ上る』と暗示を與へて、被術者の手を上に五六寸ばかり離れて施術者が絲を繰る様に手を動かすと。催眠者の手は感電した蛙の足の様にブル／＼と震動しながら段々上へ上つた。其の手が頭より高く上つた時施術者は更に『君の手は既う動かぬ木の様に堅く成つた』と暗示を與へた。手は其の通り堅く宙にふり上げられた儘動かぬ、施術者はその堅くなつた手を、力まかせに曲げ様としたけれども、實際木の様に動かうとも折れやうともしなかつた。『君の手は既うやはらかに成つた、平常の通り自由になつた、君の手は段々下へ下る』と暗示した、手はその通りになつた。施術者は更に催眠者の手を肩と平行する高さを持ち上げて『君の手は非常に廻る、車の如くよく廻る』と暗示を與へた、催眠者の手はその暗示の通り、大きな圓を描いて車の如く廻つた。次に施術者は手の運動を中止させて、今度は、裁縫用の針を圓テェブルの上から取り上げて『此の手は今君のものでない、君の手でないから針を刺されても痛みを感じない、血も決して出ぬ』と暗示して、三寸ばかりの針を電燈の

光にキラリとかざして、催眠者の腕へズブリと突き刺しズブ／＼と肉深く押し入れた。氣の弱い婦人連は『アラッ』と思はず顔を背けたが、催眠者は少しも感ぜずに、矢張り天使の様に眠つて居た。突き抜けた針の先がポツチリと見える位まで突き刺されても血は少しも出なかつた。施術者は徐にその針を抜き取つて、局部を強く五六回ばかり摩擦した。

(三) 重き者輕くなり輕き者重くなる

次に施術者は催眠者の手を肩の高さに留まらせて、其の掌に一枚の半紙を載せ、之は非常に重い持ち耐へることが出來ず手は自然に下へ下る』と暗示した、催眠者の手は其の通り下つた。施術者は掌から其の半紙を除いて、タガヤサンの硯箱を乗せた、そして「之は非常に輕いものである、君の手は自然に上へ上る』と暗示した、催眠者の掌は其の通り段々上へ上つた。『之れは錯覺の實驗です、既う時間も參りましたから覺醒させます』と施術者は會衆に説明して、更に催眠者に向つて『君は非常によく眠つて居る、今僕が一二三と云ふと覺醒する、君は覺醒の後に於いて

も非常に精神が爽快である、非常に頭が軽く気分が愉快である』と幾度も暗示して三十秒置位に一二三と云つた。催眠者は三と云ふ聲を聞くと非常によく熟睡した人が自然に眼を醒ました様に、愉快げにパツチリと眼を開いた。すると術者と被術者とは實驗室を退けり。

(四) 棒寄の術

次には敏捷さうな十二三の少年と色白い青年が現はれて、覺醒時の精神感應術をやつた。何等の催眠法をも施さず普通の精神状態にある者に信念を以て自己の精神を感應させる一種の幻術の様なものである。

先づ少年を直立させて、左右の手に六尺ばかりの球竿を二本持たせ、手を己れの兩側へ垂れて球竿と球竿の間を一尺ばかり離して持たせ直立させた。色の白い青年は其の少年の正面四五尺ばかりの所に立つて『君はしかと其の棒を持つて、私に其の棒の尖を寄せられない様にする。君が如何に其の棒を寄せまいとしても私が信念で寄せる、私の此處を見詰めて居なさい』と自分の眼と眼との間を指し

て要意をさせてから青年は渾身の力を罩めて兩手を胸の上に合掌する様にして『そうら寄つて来た、そうら寄つて来た』と云つた、少年は何も棒にさわるものがないのに、力を罩めて其棒を寄せまいとしても遂に青年の云ふ通り、ピタリと棒の尖端を寄せられて仕舞つた。同じ事を幾度もして見せた。

(五) 即時即感の妙法

今度は少年の手を丸テエブルの上に突かせ『其の手は如何に机から離さうとしても決して離れない』と青年は云つた。少年は悶躁いて其手を離さうとしたけれども、とても離すことが出来ない。青年は更に會衆に向つて『誰か此手をテエブルから離して御覧なさい』と云ふと會衆の中から二三人の人が出て少年の手を引張つたけれども、到底離すことが出来なかつた色の白い青年が『既う離れる』と云ふと、少年の手は何事もなく自由になつた。此實驗中色の白い青年は渾身に力を罩めて念力を凝して居たので、電燈に映ずる彼の顔は始めよりは赤く充血して居る様に見えた。

(六) 催眠者左手で字を上手に書く

次には再び五分刻頭が施術者となつて北君が被術者として實驗場に現はれた。そして一分時間ばかりの間に催眠させられて、左手を以て『龍虎』『催眠』と云ふ字を二枚書いた。北君は左手にて字を習ふたことがないに此『龍虎』『催眠』と云ふ字は、中々よく出来た。施術者の五分刻頭は北君に『君は僕が一二三と云ひ終ると君は覺醒するが、覺醒するや否や僕の肩に手を掛けて、僕を實驗椅子へ倒して直ぐに催眠させる。然し可成早く覺醒させる』と殘續暗示を與へて覺醒させた。

(七) 催眠者化物の状態を呈せり

覺醒した北君は矢庭に五分刻頭の肩を押付けて之を實驗椅子へ押し倒し、人指と母指を伸ばし五分刻頭の仰向けにした眼の上へふりかひるや、否や物をも云はずジリ／＼と眼に近附けて『エイッ』と大きな聲で叫ぶと五分刻頭はガクリと頭

を垂れて深い催眠状態に陥つた。北君はガクリと垂れた五分刻頭を真直ぐに直して、一寸實驗椅子を離れて『一』と云ふと五分刻頭は鼻の様に眼を大きく開き『二』と聲を掛けるとニョキニョキと赤い舌が抜け出て『三』と浴せると裂けるかと危まれる程大きく口を開いた、會衆は一時にドツと吹き出した。婦人連の如きは聲を立て腹を抱へて笑つた。だつて其の筈だ、大きく開いた眼はニョロリと白眼をひき出し、腹の中まで開き通して御座ると云はぬばかりに口を大きく開いて、化物の様に赤い舌をいやと云ふ程出して悶躁いて居るぢやないか。満座を笑倒させた北君は、殘續暗示の通り三分間ばかりで此の滑稽な催眠者を覺醒させ實驗場を退く。

(八) 催眠者看客の骨相を觀て身上を當てる

次に一壯年現はれ自己催眠に依つて骨相學者に人格を變換し、會衆の求めに應じ二人ばかり過去現在未來の運命を占つたがよく適中して黒人も驚嘆するばかりなりし。

之が終ると愈々精神研究會の會長にして、心理學の蘊奥を極め、科學界の未だ足跡を印する能はざる、幽幻不可思議の秘密界に入る秘鑰を握れりと稱讃さるゝ古屋鐵石氏が、黒羽二重五つ紋の羽織にセルの袴をうがつて、艶々しく前額から顛頂まで禿げた頭と肥え太つた體軀を實驗場に現はした。

(九) 笑ふて催眠に反抗する者を咳嗽で深

く催眠せしめ口笛で覺醒せしめたり

鐵石氏は先づ一寸講演をなし後で直ちに實驗臺の傍に立つた。實驗臺には一書生が腰をおろせり。鐵石氏が實驗臺に近寄つて『サア此から催眠させる』と手を其の頭上へ翳すと、書生は今迄嘯み堪えた笑がとうとう耐えられずブツと吹き出して獨り『アツハツハツハー』と聲を上げて笑つた。鐵石氏は眞面目になつて幾度も其の頭上へ手を翳したが、彼は益々こみ上げてくる可笑しさを抑へる事が出來ずに聲高く笑つた。

『これぢやどうもならんぢや、咳嗽催眠法に依つて催眠させるより外仕方がない』

と云つて、三間ばかり後へ退いて笑ひ顔れて居る被術者を睨みながら。

『ゴホン、ゴホン』と二度咳嗽すると、今迄聲を立て、笑つて居た被術者が、鐵石氏の未だ咳嗽を終らざる中にビタリと笑が止んだ、又眞似た様に『ゴホンゴホン』と咳嗽したかと思ふと、死人の如く頽然とした。『既う非常に深い催眠状態に陥つた』と鐵石氏は言ひつゝ、催眠者の傍へ寄つて更に『深く催眠すれば催眠する程催眠者は正規の人の如き外見を現します』と云つた。

(十) 催眠者大臣に變換して演説をする

鐵石氏は此催眠者に長時間の暗示を與へて、様々な實驗をし會衆に非常な興味を感ぜしめた、表情變化の暗示を與へては、分時の間に西歐の名優に見るが如き極端なる喜怒哀樂の情を表はし、人格變換の暗示を與へて、或は一口狂言師として新舊兩派の種々なる狂言を演ぜしめ、藝者として端唄を唄ひ、月琴を弾き、音樂につれて躍り、然かも其の態度音聲に至るまで如何にも女らしく、藝者らしく、或は高峰筑風として琵琶歌を唄ひ、呂昇としては義太夫を語れり、其の節廻し音聲まで高峰筑風

及び呂昇のそれに似て聴衆を感動せしめた、會衆の注文により時の遞信大臣の後藤男に人格を變換して、鐵道問題に關する演説をさせたり、唯に人間界の人格に變換した許りでなく、或は鶏に成り或は犬になる妙術に、滿座悶として唯驚嘆感激の深きうごめきを聞くのみであつた。

僕も思はず知らず興に入つて飽く事を知らなかつたが、略一時間三十分にして鐵石氏は、元の如く被術者を實驗臺に上らせ、三間ばかり離れて『ヒヒ』と二口ばかり口笛を吹き鳴らすと、被術者はパツチリ覺醒して更に催眠中に與へられた、殘續暗示により、三步前進して立つた儘再び催眠状態に入つて聲高く『君が代』の唱歌を歌つて、全く覺醒して實驗場を退いた。

第六章

催眠者が阿呆陀羅經、劍舞術士、鳶、狐、獨逸人、支那人に變換し奇妙奇天烈の事をする

(大正二年二月十八、二十二、二十四、二十八日發行「中央新聞」より抄録)

(一) 人格變換で書生が學者にも犬にも成る

記者は過般芝區琴平町三、精神研究會長古屋鐵石君の實驗を見た事が有つた、場所は淺草區清島町統一閣で數百の群衆の面前であつたので思切つた飛び放れた實驗が出来ぬ、と前提され古屋氏の面前に引き出された一人の書生は、直ぐに催眠状態に陥り古屋氏の暗示通り種々なる人格に變換した、第一には阿呆陀羅經になつて左手の拳固を右手の指で叩きながら非常に節廻し面白くやつてゐたが、古屋氏が今度は幼稚園の生徒になると暗示すると、碯と止めて暫くして幼稚園の生徒になつて唱歌を而も小兒の如く優しい聲で唱ひながら、手を振り足を上げ幼稚園の兒童のする遊戲を寸分誤たずにやる、次は藝者になつて『私みたいな者をそんなに可愛がつて下すつてホ、ホ、、翔つちや嫌ですよ』と袖を口に當て、笑つたり艶な姿を作つたりする、繼て三味線を弾きつゝ、端唄や都々逸を唄ふ、『ハ浮いた浮いた』と太陽氣になる、果ては犬になつて四匄いで吠え立てる劍舞術士になつて幻覺の日本刀を振つて吟じ且つ舞ふた。

催眠者阿呆陀羅經、劍舞術士、鳶、狐、獨逸人、支那人に變換し奇妙奇天烈の事をする

(二) 催眠者の知らぬ者に人格が變換せり

三

此の不思議な實驗と研究とは如何なる程度まで進められて居るのであらうか、第一に起る疑問は如何にして人格を變換し得るやと云ふのだが、同じ人格變換でも催眠者が嘗て見聞したる事有る者に變換する場合は、藝者とは如何なる者、犬は斯く有る可き者と云ふ事を知悉して居るので、術者の暗示に依つて自己がそれに成り濟まし、所謂潜在精神が活躍するのである、けれども催眠者が正規の状態に有る時、未だ嘗つて見た事も聞いた事も無い、所謂些の潜在精神をも有せざる者に變換し得るやと云ふに、精神研究會の實驗に依れば術者も催眠者も知らぬ處の立會人たる第三者の指定せる人に變換させた事があつた、立會人は己の知人なる『望月梅太郎』にして呉れと注文したので、術者は直に『君は望月梅太郎である』と暗示したるに、催眠者は右手と左手と兩方共不隨になつて兩手をダラリと下げて不具な人となり『兩手が不隨で困る』と云つた、立會人は之を見て非常に感心し私の知つて居る望月梅太郎は兩手が利きませんと言つたさうである、又或時スプリ

ングの何なるかを覺醒時に於いては知らぬ催眠者に對して『君はスプリングである』と暗示した所、螺旋のバネの如き形となつた由である、其他幾多の相似たる實驗に依つて此の不思議なる變換は催眠者に千里眼的現象加はりて、暗示せられし物を知る故であらうと推斷されて居る。

(三) 催眠者を東京市に變換せる現象

然らば催眠者は身體にて形容する能はざる者に變換し得るであらうか、例へば術者が催眠者に向つて『君は東京市である』と暗示した場合はどうであらう。現在の實驗狀況に依れば東京市であると暗示された催眠者は多くの場合唯モジモジして居るのみで、何等の形容をもしなかつた由であるが、唯一回或夜の實驗に催眠者は立派に東京市に成り濟し頻りに腰の邊を撫で廻し『熱い〜』と連呼したので『どうしてそんなに熱いか』と尋ねたら『今牛込が火事で盛んに燃えて居る』と答へたので立合つて居た牛込の人は驚いて、取るものも取敢ず歸宅する、と果して牛込に火事があつて而も其の實驗中の時間と符節を合せた如く時間

が一致して居たので驚いた由である。

(四) 催眠者を鳶に變換せる現象

又或時『君は鳶である、今空中を舞つて居る所だ』と暗示した時、催眠者は兩手を擴げて立ち空中を舞ひつゝ、下界を眺むる姿勢をしたので『君は鳶で空中を舞つて居ながら足が地に着いて居る道理が無い、早く足を地上より離して充分に飛び廻る』と暗示したけれども彼の足は壘を離れなかつた、之等は尙ほ研究の餘地が充分有るであらうと思ふ、さらば一旦變換した人格をもとの人格に戻さずして其の儘更に他の人格に變換なし得るか、之れも幾多の實驗に依つて『君は犬である』と暗示し催眠者が犬になつて吠えたり狂つたりして居るのを、其の儘元の本人に戻らせずに『君は今度は狐になつた』と言へば直に狐になる由である、記者も又之を實際に目撃したのであつた。

(五) 催眠者を家康と新聞賣に變換せし現象

又或時の實驗に一人の書生を徳川家康に變換せしめ置き、實驗を見物に來りし傍の人が『公にはお茶を召上り候へ』と恭しく湯を捧げると催眠者は其の湯を飲み且つ關ヶ原合戦の模様など様々に其の見物人と物語つた、而し不思議な事には立會人が家康に關係無き事や家康以外の人に對して囁す事は家康の耳には一切入らざるのみならず『君は家康にあらざして催眠者也』と見物人が言つても少しも知らぬ風をなせり、又或時新聞賣に變換された催眠者が『新聞は一錢々々』と客を呼ぶので、立會人が『新聞屋さん新聞を一枚賣つて呉れ』と言ふと『何新聞を』と尋ね、望まれた通りの新聞のつもりで幻覺の新聞紙を渡し、『そら十錢でお釣り』と言はれて幻覺の十錢銀貨を受け取り懐から財布を出し之を投げ入れ更に幻覺の釣錢を『これが五錢でこちらが四錢』と言つて其の立會人に渡した、所が此の場合見物人の一人が『君は新聞賣では無い書生ではないか』と暗示を與へたが知らぬ風をして居た、此の實驗に依れば催眠者は術者以外の第三者と催眠中に於ても談話すれども、變換したる其の人格に關係せる範圍内のみに於て對話するを得、而して又第三者がする其他の暗示は催眠者に何等の影響をも與へぬ

のである。

(六) 變換せる第一人格と第二人格とは共に
半巾を雀と錯覺す

又或時日本人を支那人に變換せしめ、又其れを獨逸人に變換させて『之は雀である』と言つて半巾を丸めて與へた、獨逸人は其の半巾を雀であると錯覺した、而して其の獨逸人を元の支那人の人格に戻らしめて今度は其の支那人に向つて前に示した圓めた半巾を與へて『之は何』と尋ねると『雀』と言下に答へた事がある、此の實驗に依れば第一人格と第二人格とは全く主觀的の記憶を別にして居りながら、客觀的の記憶のみは互に相影響する奇妙な現象を呈して居た。

(七) 催眠者の作りし詩

來會者の内から『催眠術實驗會と云ふ題で催眠者に狂詩を作らして』と言ひ出た者が有つたので術者が催眠者を詩人に變換し其通り暗示すると。

日頃斯學極蘊奧

互約日時一堂會

口角飛泡或現妙

當夜會堂悉是神

と何の苦もなくスラ〜と書き了つた、此の現象に就いて最も注意すべきは催眠者は正規の状態に有るときは發句も都々逸も作れず、況して漢詩など讀む事さへ出來ぬのに而も催眠状態となつて暗示を與へられると、不思議にも一分間に七言絶句を記すといふ恐ろしい迅速な事もやつた、即ち題を出すや否や眞に自動的に手の動くまゝ、スラ〜と記して了ふのだ相だ。

(八) プランセットの文藝

而して催眠状態に有つて此の現象を現はす者に對しては正規の状態にある時プランセットにて詩歌俳句を自在に作らせる事が出来る由にて、左の二三はプランセットを能くする某氏が人格を變換して作りたる者の一端だと言ふ事である。

催 眠 術

雨の降る夜はいとゞなは物凄きまで皆淋し、軒端に傳ふるあまだれの、ひびきは

つかうとくくと、ゆめ路を誘ふまがつみと、我に應ふるくらき世や、花恥ぢらはんや
さすがた、他處ともなく我前に、立ちしは奇しき事ながら、さまで思はぬ訝しさ、幾久
しかる縁言を述べつうらみつ其果は、互に心打とけて、話せばあやにく窓の上に、か
かる時計のその音に、破られけりな我が夢を、ゆめかかないな彼君が、残しおきたる
花の香は、今も尙身に香ほるなり、これぞ正しく傳心の、妙あらはせし彼の人の、魂め
ぐり今こゝに、來りしものと知るしぞや、奇しき心のはたらきぞ。

春 雨

若人のほてりさますや春の雨

雨の日唐崎を忍ぶ

みどりみて故郷おもふ雨のそら

第七章 催眠者ヴァイオリンを弾き浪花節

を語る

(大正二年三月十日發行「やまと新聞」の抄録)

(一) 笑ふて反抗せる者を一聲の掛聲で催眠
せしめたり

芝區琴平町精神研究會で九日午後六時から催眠術實驗會を開いた、集まつた會員
は約百餘名で定刻となるや同會長古屋鐵石氏は先づ被術者を椅子に掛けさせる、
被術者は頻と笑つて居た、此時古屋氏は數間離れてエイツと大喝したら被術者は
ガツリと首を垂れて深い催眠状態に陥つた、次で古屋氏は椅子を二脚据ゑて其上
に被術者を棒の様に硬直にして横へたり、一二三の掛聲で笑はせる怒らせる、種々
と人格の變換を試みた後、『君は音樂家である』と暗示すると被術者はバイオリ
ンを弾じ乍ら『螢の光』『此處は御國を何百里』など云ふ唱歌やサノサ節、浪花節
等あらゆる事をやつて、最後に白目玉をむき出しペロを出す兩手を藻掻いて騒ぎ
廻つたには會員一同臍を捻つて笑つた、これが濟んでから會員諸氏の種々面白い
實驗が澤山あつて散會したのは九時過ぎであつた。

第八章 催眠者易者となり人の身上をよく

當てる

(一) 催眠者雲入道と變換し浪花節を語る

(大正二年三月十日發行「國民新聞」の抄録)

三〇

九日午後六時より芝區琴平町の同會樓上にて催眠術實驗を爲す、始め古屋會長人格變換の術を爲せば、被術者は音楽家となりて、催眠中にヴァイオリンを奏しつゝ、命ぜらるゝ儘に歌ひ、最後に雲入道になつて浪花節を唸る、次に被術者は易者となり五人を占ひて悉く適中し、續いて會員數名の實驗あり九時過ぎ散會せり。

第九章 思念を感通せし不思議の現象

(大正二年四月十五日發行「海國日報」抄録)

(一) 厭世家を樂天家となし得る根據

十三日の夜七時より芝區琴平町精神研究會にて古屋鐵石氏主宰の下に種々興味ある催眠術實驗を催した、最初に行ひしは思念感通の實驗にて、術者被術者に向つて數字及び假名を來會者に指定せしめ、被術者に當てしむる法にて三回とも適中した、次は人格變換の實驗にて、被術者を催眠せしめ山本權兵衛に變換して演說せ

しめ、或は呂昇に轉換して淨瑠璃を語らしめ、或は巴里の美人に轉換して音樂につれ舞踏せしむる等、それ〴〵特殊の態度調子を奇妙に現はせり、氏の説明によれば誰人にて此人格變換を行ふときは未だ曾て知らざる技藝を演じ詩歌を作り經文を誦む等實際不思議なりと云ふ。斯の作用によりて不愉快の性格を愉快に、怒り易き性格を溫和に、陰鬱の性格を快活に變じ、乃至は愚鈍なる性質を伶俐ならしむる事を得、之皆根據ある心理學上の活用に基くものなり云々、厭世自殺でもしたがる者には人格變換至極妙であらう、平素治療も盛んに行つて居る。

第十章 催眠者總理大臣とオペラダンスに變換せり

(大正二年四月十四日發行「やまと新聞」抄録)

(一) 讀心術の實驗美事に適中せり

芝區琴平町精神研究會では十三日午後七時から、催眠術實驗會を開催した、先づ會員の讀心術がつた、白紙に字を書いて秘し置き、何と云ふ字かと訊ねたら數回美事

に的中した、次で棒寄術があつて最後に研究会長古屋鐵石氏の實驗が始る、先づ被術者を催眠させて置き、人格を變換させて山本總理大臣とならせ、更に薩摩琵琶師に變換させた、被術者は月琴を琵琶に代へて弾じ乍ら月に叢雲花に風と鏑のある咽喉を聴かせた、それから義太夫呂昇に人格を變へると今度は道に女である、襟をつくろつて三味線代用月琴を弾き夕顔棚の此方よりと唸り出し、一句一句毎に百面相をやつたので、一同はお臍に茶を沸かし、次でオペラダンス幼稚園の小兒等に變換して種々の實驗を試みた上、散會したのは十時頃であつた。

第十一章 催眠者琵琶歌を唄ひ義太夫を語る

(大正二年四月十四日發行「東京朝日新聞」抄録)

(一) 催眠者總理大臣に變換し演説をなす

心理學者古屋鐵石氏の主宰せる芝琴平町の精神研究会では十三日の夜催眠術の實驗會を催した、最初二三の簡単な實驗があつて後面白い實驗に移つた、施術者たる古屋氏が被術者たる一青年に造作も無く催眠術を施し薩摩琵琶をさせると善

い聲で「石童丸」を一席吟じ、次に義太夫をやらせると、太閤記十段目を唸る、更に山本首相たるべき暗示を與へると急に嚴然たる態度で卓を叩きつ、「前桂内閣も不幸命運短くして我等の連中が其後を襲ひました」云々と大氣焰を吐いた。

第十二章 催眠術にて溺死體の所在を知る

(大正二年五月十日發行「中央新聞」朝刊と夕刊抄録)

(一) 行衛不明の溺死體發見者に百圓の懸賞をなしたり

(編者曰く大正二年五月六日東京本郷區湯島尋常小學校生徒が千葉縣鴻の臺に遠足會を催し、其歸途江戸川の渡場栗市を渡らんとして生徒教員附添人等三十餘名乗れる渡船中流にて顛覆し、乗者悉く水中に陥り行方不明者三名を出したり、其行方不明の三名を如何に搜索するも上らず、一名を上げたる者には百圓の懸賞をなしたるも死體は見當らず。茲に於て中央新聞記者、精神研究会に來り、催眠術の千里眼によりて其死體の所在を知る方なきや、と依て中央新聞記者及

本會の研究生數名立會の上實驗をなしたり、其顛末は同年五月十日の朝刊と夕刊の中央新聞に掲げあり左に之を抄録せむ。

(一) 神に變換せる催眠者死體の所在を語る

溺死體の搜索に付て渾身の努力徒に水泡に歸して猶未だ三兒が帶の端だにも發見する事能はず、其骨肉の心事に同情して態々湯島小學校を訪ね、易者千里眼等を紹介する者日に幾人を數ふるに到る、記者亦精神研究會長古屋鐵石氏を訪ねて、催眠術應用人格變換に依つて死體の所在箇所を知る法無きやと圖りたるに、折柄集まり居たる會員諸君は、太く不幸なる三兒に同情し即座に快諾して其の實驗に取懸りたり。

抑も人格變換と云ふは進歩せる現今の催眠術にて屢々實驗せられ、其の最も不思議なるは全く未知未見の事を語る人にも轉換し得其現象は學理を以て未だ充分に説明し能はずと雖も、實際の示す所は既に疑ふ餘地無きに至れり。

古屋氏は一書生を催眠せしめ之を神様に變換して恭しく拜脆し、死體の所在を伺

ひしに神様は暫く默想の後『二つの死體は鐘ヶ淵より五丁の川下に有り、下流に向つて少しく右手に當り死體と死體との間は約一丁半を隔つ、而して他の一つの死體は渡船の轉覆せる箇所より約十八町の下流にて左岸に有り、前者の河岸には何等目標となる可き物無けれども、後者の河岸には日に焼け雨に晒されたる古き木柵有り』と。

(編者曰く以上は中央新聞朝刊に記載されたる處にして其夕刊に次の記事ありたり。)

(三) 催眠者の語りし處に果して溺死體ありたり

鴻の臺下鐘ヶ淵に可憐なる三少年が果敢無くも水魔の襲ふ所となりてより爰に五日間、人事を盡しての大搜索に苦心せる其甲斐ありて、其中の一人なる湯島小學校五年生同區三組町嶽野金平四男勝吉(十三)の死體は十日午前八時五十五分現場を距る約五丁の下流、市川橋の上流五丁通稱根本河岸に於て發見されたり。扱ても此の死體を發見して父兄及び關係者より感謝の言葉を浴せかけられたるは、市

川町眞間字氷室船頭中山清七(五十五)と呼ぶ者にて、前記根本河岸を棹を以て波除の石下を探したるに棹の先に柔かきもの觸れたるより大に勇み立ち、直ちに竿の先に曲折せる鰻釣を結び付け再び水中に差し込み遂に引揚げたり。さるにても我社に於ては死體の發見遅々として渉らざるより古屋鐵石氏に鑑定を請ひたるに、偶然にも其指定の寸分違はざりしより人皆其適中に驚きたり。

(四) 透視悉く適中す

(編者曰く大正二年五月十三日發行の萬朝報に次の記事見えたり)

市川町三〇八六船頭兼大工業秋元虎吉四十八昨十二日午前八時頃己が小廻船に乗りて郵便局裏手より出かけ、江戸川鐵橋の左の口、第三橋臺より上流數間の處を搜索せしに、何物か竿に觸りしものあり、三本の釣を垂れて水底を搜るに、物あり之にかけ徐々引上げて水面にあらはるゝを見れば果して小兒の屍體なり『見付かりました』と大聲に叫ぶを聞きつけ、福田校長等船を飛ばして來り、見れば正しく藤本求義(十二)の屍體なり、次で來りし求義の父鎌太郎は、我子の屍體を一目見るよ

り、悲喜交々至りて暫くは涙も出でざりき。

(編者曰く此屍體の上りし場所は渡船の顛覆せし處より大凡十八丁の下にして催眠術による透視は適中せり、而して後残れる一名の溺死體は容易に發見せられざりしが、其後六月十九日遭難場所を去る下流一里半の箇所たる行徳と云ふ處を死體が流れて下るのを其處に居合したる船頭が見附けて引き上げたり、思ふに本會にて透視を行ひしときは其明示せし場所に在りし者が、時經て其處に流れ出で人眼に觸れて引き揚げられし者ならん。)

第十三章 催眠者藝妓萬龍女優森律子に變換す

(大正二年六月十日發行「海國日報抄録」)

(一) 覺醒者に突然暗示し自在に感應せしむ

一昨八日の夜芝區琴平町精神研究會にて催眠術實驗會を催したり、先づ一會員が一羽の鶏を催眠せしめたるに今迄騒ぎ狂へる鶏は仰臥の儘少しも驚かず、覺醒と

同時に元の状態に復したり、之に依つて催眠術は人間に限らず他の動物にも總て感應するものなりと説明し。次に古屋氏は一書生を催眠せしめ、人格變換を行ひ、鶏、犬、音楽家に變換せしめ、次に藝妓萬龍に變換し又女優森律子に變換せしめ、それぞれ各別の動作言語を爲して、來會者を賑はしたり、同時に氏は説明して此人格變換を應用して治療すると治療上に大效あるべき原理を丁寧に解説せり、終りに覺醒者に突然暗示し暗示に抵抗し能はざる實驗を爲したるが何れも成功し來會者は満足を得たるものゝ如し。

第十四章 催眠者雞犬に變換し不思議の現象を呈す

象を呈す

(大正二年六月九日「やまと新聞」抄録)

(一) 來會者中の患者に治療せり

芝區琴平町三の精神研究會では八日午後七時から催眠術實驗會を開いた會する者二百餘名、鶏の催眠「小兒の硬直状態」等の實驗に次で、會長古屋鐵石氏は一名の患

者を呼出し簡單なる治療實驗を示した後、更に別の被術者に對し拍手一聲、深き催眠状態に陥れて鶏、犬、樂隊、藝妓等に人格を變換させ最後に女優森律子に變換させた、被術者はお化粧をして演壇に立ち演説をした、之が了つてから會員間の種々な實驗があつて散會したのは十時頃だつた。

第十五章 ヒステリーには可驚大效あり

(大正二年六月一日發行雜誌「日本之婦人」抄録)

(一) ヒステリー治療の顛末

ヒステリーは往々上中流の家庭の奥様や令嬢方に多い、此病に罹つた人の多くは肉體上の勞働は爲さずとも精神上の苦勞は甚だしいので、一度ヒステリーに罹ると容易に治らず、其治療法として種々あるも、確かに效驗があると云ふ法はまだ聞かぬ、此頃芝區琴平町精神研究會にては盛んに催眠術治療を行つて居ると聞き、好奇心に驅られて實狀を探訪に行きしが頗る参考となるべき點も尠くないと思ひ、其一端を紹介して讀者の批評を乞ふ事とした。

治療室は十五疊敷位の大廣間で、正面の床の間に普賢菩薩の佛畫が掛けられて居る。數個の寢臺と椅子は設けられて今や古屋鐵石氏及同夫人は年齢二十八九歳の婦人の手術にかゝらんとしつゝある。古屋氏は恰も辯護士服の様な黒衣を着た四十二三歳の肥満の大男、而も顔面には一種の磁力ありさうな相好である。懸て古屋氏の症狀質問に對して患者は次の如く答へた。

(一) ホステリーの病狀

- 一、一番困るのが些細の事を忘れ様と思ふても何うしても忘れられず、覺えて居やうと思ふ事を忘れて了ふ。
- 一、父母親戚知己、夫が一つとして自分の爲にならぬ様思はれて心細い事限りない、何をしても愉快と思はず無意義な不平が絶えぬ、少しの事に腹がたつたり涙が出たりする。
- 一、猜疑心が非常に強い、自分乍ら愛憎が盡きる程である、又人並以上に嫉妬心が強く、狂氣の様になる。

- 一、父母や夫に心配をかけるのを何とも思はぬ。
 - 一、手足が痺れ、夜よく眠られず夢ばかり見て居る。
- 以上の様な缺陷がある爲め圓滿に家を納めて行く事が出来兼ねます、何うか此等の悪癖を悉く治して人並の女になりたいと思ひます、御治療で治りまうか。
- 古屋氏は此質問に對して「確かに治ります、一度治療を御受けになますと全く生れ變つた様に愉快な人となられます」と明瞭に答へ、尙種々症狀を問答した後寢臺へ臥させ莊嚴の療法を行へり。(此間僅か三十分間許り)すると患者はフト眼を開いて起き上り。
- 手足の麻痺は悉く除れて軽々と自由に動く様になり、肉體も氣分も爽快になつて全く生れ變つた様に思はれ、心持は清々して這んな愉快な事は生れて初めてですと云ふた。尙記者は催眠術が治療に效ある所以の實驗を希望したら、古屋氏は快諾して次の如き實驗を示された。

(三) 催眠術が治療矯癖に效ある根據

古屋氏は一女學生を催眠させて、口中に一ばい唾液が出た」と暗示するや、直に唾液が流れて多量に痰壺へ吐いた、又兩眼に、眼脂が出た」と暗示すると忽ち眼脂が出たことも一寸不思議である。

(四) 乳少な婦人を乳澤山にすることを得る

所以

此現象に對して古屋氏は云ふに、乳の出ない婦人を乳澤山とし、胃液の少い患者に胃液を多からしむることが出来るも此原理である、又小兒の寢小便を止めるのも同様であると云ふた。

次に最も驚きたるは腕を切つても刺ても血が出ない又少しも痛まぬ」と云ふ暗示を與へて、大きな豊針の如きものを二の腕に刺たが少しも血が出ず、又痛みを知らぬで居つた事である。

次に「口は右に引きつけられて曲る」と暗示すると忽ち催眠者の口は右の方へ吊り上り物凄程である、又美少女である」と云ふとニコニコ顔となつた。

古屋氏は附説して云ふに、此の理法で人の精神を美にし心身相關の法則により全く容貌迄も變化し得るのである、故に此療法では顔面の調和も整へて醜貌も美貌とする事が確かに出来るのであると説明した。

(五) 不愛嬌者を愛嬌者とすることを得る所以

次に催眠者に向ひ、「一と云ふと喜び二と云ふと怒り三と云ふと哀しむ」と暗示して「二」と呼ぶや手を擴げたり摺つたりして笑ひ喜び、「二」と云ふや一變して涙みを帯び拳を握つて立上り打かゝらんとするかと思ふ途端、「三」と云ふとメソメソ泣き出し、涕をハラ／＼落して泣き崩れた。

古屋氏は説明して年中クヨクヨ悲しみ暮す陰氣な性分も愉快な陽氣な性分とすることが出来、短兵急で何時も疝癢玉を破裂さす人間を溫良な性質と變化さすことも出来、ヒステリーの如き缺陷も此理法によりて治癒轉換することが出来るのであると。

(六) 不和の夫婦を和合せしむることを得る所以

尙氏は此外に夫婦間の不和合なども調和することが出来る、又兒童の如き數學の出来ない者や愚鈍に近い者を伶俐な性質と變じ、或は宗教を信ぜざるものは信心家になり、怠惰者が勤勉家になる等全く不思議であります、其不思議の理由は詳しく申上げる暇がありませんが、其れは前の奇異なる現象で證明され得べきものであると説明された。此實驗は醫術藥物の力の及ばぬ方面には大いに効果あると思ふから茲に紹介して置きます。

第十六章 催眠者男三郎の俗謡を唄ふ

(大正二年十一月十一日發行「國民新聞」より抄録)

(一) 美人髻男を自由にす

九日午後七時から芝琴平町精神研究會樓上に催眠術實驗者が公開せられた、會する男女合して一百餘名、先づ會員の一人が雄鶏のバタ／＼として居るものを捕らへ

て来て椅子の上に置き催眠状態に導いて、鶏に一言半句も出さしめず睡らしてしまつた、其から會員の誰彼が思ひ／＼の實驗をしたが何れも成功した、就中二名の美人が實驗壇上に顯はれて髻男に勝手な暗示を與へて其身體及び思想を自由になし得たのは一入鮮かに群衆を喜ばした、會長古屋鐵石君の得意の人格變換にて義太夫薩摩琵琶或は男三郎の俗謡も甘く行つた。

第十七章 世界無比の奇現象催眠者演説を

なす

(「英城日報」第七千四百五十九、六十號より抄録)

(一) 催眠者即問即答に演説をする

西洋にも東洋にも未だ曾て如斯珍らしき實驗ありしを聞かず、催眠者が平常少しも知らざる處の演説でも講談でも浪花節でもチヨボクレでも何でも、今迄に見たことも聞いた事もなき意外の題を出すや、即坐に苦勞徒以上にやる、其現象を東京芝琴平町精神研究會に於て發見せり。

余が實見の様を語らん、即ち術者は被術者を椅子に凭らせて一寸擧手したれば被術者は深く催眠して手に針を刺さるゝも知らぬ様になれり。

四六

(二) 無病長壽の新説

其催眠者に向つて『無病長壽の法と云ふ題で演説をする』と暗示したれば、催眠者は次の如く演説せり。此演説筆記は衆議院速記技手齋藤増吉氏の筆記になりしものにて、催眠術に着手より演説終る迄に十分時間にて成れるものなり、其演説筆記は左の如し。

(三) 催眠者のなせる演説の筆記

催眠者曰く『無病長壽と云ふ題で一場の演説をやれと云ふ、斯う云ふことは諸君も定めし望むところであらう、成程無病長壽、斯んな結構なことはございませぬ、ですから私は無病長壽をする秘訣を皆さんにお授けを致します、暫くの間お聴き下さい。』

總て無病で長壽を得やうと思つたならば能く攝生と云ふことに氣を付けて下さい、私が言はぬでも分りきつたことであるが、中々實行は出来ないものである、先づ朝起きた時洗面を致す場合に口中を十分嗽する、其時に齒磨楊子にて荒く口中の奥迄洗ふ人があるが是は宜くない、咽喉は食事の這入る門口であるから其處を痛めてはならない、齒をよく磨かなければならん事は勿論にして、事更にお話する必要はありませぬ、それから食物でございます、或人は甘い物許り食ふ、或人は辛い物許り食ふ、是は消化機に害を及ぼす、又野菜許りに傾いても可けませぬ、肉許りを食つても可けない、常に色々の物を食はなければいけない、それから食後には運動する、それも食つて直ぐ運動しては可けない少し間を置いて運動するがよい。

それから夜寝る時でございます、此頃はさうでもありませぬが、夏になると寢相が悪くなる、布圍も何も脇へやつて仕舞ふ人がある、之が爲に寢冷をする、其れが元で種々の病氣に罹るものあり、それから夜具布圍を日光に晒すことも時々する必要がある、すると蚤又は黴菌を驅逐することが出来て宜しい、又室を締切つて置くと空氣の流通が十分でない、炭酸瓦斯が発生する、ですから十分室を明け放して空氣

四七

の流通を好くするとよい、日光の十分這入る所は明け放して置くともよい、日光は微菌を殺す力がありますから室の戸を閉めることは廢めて日光を透射するやうな方針を取つて貰ひたい。

今度は精神的の衛生を申し上げます、總て病は氣から起ります、足が重いハテ脚氣ぢやないかしら、自分の心で自分で病を求めて居る、それです、病氣の方では一寸お宿を拜借致しますと云ふやうな風にドン／＼這入つて來る、乃公の身體は金城鐵壁病氣などは入るものかと威張つて居れば病氣に罹るものではありませぬ、さう云ふ譯でありますから精神を鞏固にすることは最もよい長壽法であります、それから朝早く起き直に腹式呼吸をやる、して腹を十分に拵へる、さうすると精神的基礎が出来る、朝早く起きて深呼吸をやる、とオゾンを十分に吸収しますから血液が新になる、衛生法に大關係あるは冷水浴であります、風の神が來たら突き飛ばしてやらうと云ふ考で、井戸端に出てザーザツと浴びる、さうすると風の神は是りや堪らぬと逃出して仕舞ひ、精神は鞏固になる、斯う云ふやうに衛生を守るとそれで無病長壽を得られる、尙此外に慎む可きは色慾です、此話は、委しく申しませぬ

が、先づ以上申しましたことを實行すれば無病長壽は完全に出來ると思ひます。」

第十八章 神經衰弱は屹度全治する

〔讀成日日新聞「第三千四百七十、七十一、二號より抄録」〕

(一) 驚くべき一大發見

神經衰弱は一名文明病と稱す、世が益々文明に進むに従ひ世事は益々複雑となりて種々の事情に餘儀なくせられて精神及び肉體を過勞するが爲め、終に神經衰弱に罹りし者夥し、加ふるに一度神經衰弱に罹ると容易に恢復せず、依之神經衰弱の治療法として種々の方法各所に現はる、然し實際に的確なる效果あるものなし。然るに先般東京市芝區琴平町精神研究會長古屋鐵石氏が多年間催眠術研究の結果驚くべき一大發見をなせり、即ち毫も藥物を用ゐずして哲學上の一元二面論と心理學上の觀念聯合論とを應用したる催眠術治療にて、重き神經衰弱を治したること數千名、其の治療の效果眞に神の如くなりとの評判高し、一日其眞偽を確めんが爲めに精神研究會を尋ねて其治療法を實見せり、左に其要を記さん。

先づ同會を尋ね刺を通じて來意を述べ、暫時此室(應接室)にて御待ち下されと云ふ、よりて應接室に待ち居ること二三十分時間にして、二階の治療室より治療が濟んで階段を降りたる者數名あり、其れと入り代りて治療室へ導かれし神經衰弱の患者あり、記者も其患者と共に治療室に入り見れば治療室は十五疊敷位の大廣間にして、手術用椅子及び寢臺數多並べあり、東久世伯爵が爲精神研究會と記したる扁額は最も目を引けり、會長古屋氏は古代服の如きものにて縫箔ある衣を着し、壯嚴の風をなして椅子に悠然として凭れり、其前の椅子に患者は腰を下せり、古屋氏は患者が差出したる治療券(此券は豫め受付所より求めたるものにして患者の住所、姓名、年齢、職業及び患部を記せり)を手に執り一見して平田さんは何ふ云ふ風に何處が悪うござい升と云ふや、十八九歳と思はる、田舎者曰く。

(二) 可驚神經衰弱の症候

「私の身體の悪い處は數多ありて一々云ひ盡せぬから、此紙に記して参りました」と云ひつゝ、差出したる半切紙を開き見たれば左の如く記せり。

◎ 矯正されたき悪癖

- 一、頭がぼんやりする。
- 一、注意が一つに集まらぬ。
- 一、物覚えが悪くて忘れ易い。
- 一、事に當りて是非の判断に迷ふ。
- 一、英語が嫌ひで數學が下手で困る。
- 一、恐れでもよいことを恐る。
- 一、始終詰らぬことで心を痛める。
- 一、何事にも飽き易い。
- 一、談判が下手で自分の意見で人を制服することが出来ぬ。
- 一、悪いこと、知り乍ら其れが廢められぬ。
- 一、些細の事を苦にする。
- 一、神佛の有りがたさが判らぬ。
- 一、學力不相應な高尙の議論をしたい。
- 一、斯ふすればよいと譯りて居る事をせぬ。
- 一、年上の人の意見が氣にくはぬ。
- 一、父母の膝下にあるを嫌に思ふ。
- 一、臆病で小膽。

- 一、父母、親戚、友人及び知人が一として自分の爲めにならぬ様に思はる。
- 一、汽車や汽船に乗ふ。
- 一、女の爲に餘分な錢を遣ひ妄想を畫く。
- 一、少しのことに涙が出る。
- 一、視力弱く非常に明るい室ではまぶしい。
- 一、さもなきことに腹が立つて堪まらぬ。
- 一、美女の云ふことは不道理でも、反對が出来ぬ。
- 一、何をしても愉快と思はぬ。
- 一、未青年であり乍ら紳士の眞似がしたい。
- 一、父母に心配をかけるを何とも思はぬ。
- 一、勞働を嫌ひ身體に樂なことで身を立てたい。
- 一、烟草と酒とを喫み過ぎる。
- 一、生れは何でも顔の美しい女房を持ちたい。
- 一、何事でも斯ふせよと思ふとせずには居られぬ。
- 一、磊落に交際が出来ぬ。
- 一、身分不相應の甘い物が喰ひたい。
- 一、人の出世をねたむ。
- 一、無意義に不平が絶へぬ。

一、無暗に人の物や錢が欲しい。
 一、矢鱈に物見遊山がしたい。
 一、虚名でもよいから名を擧げたい。

聴し乍ら小生は以上に列擧せる如き不完全なる肉塊にて候、斯様な惡癖が一つでもあつては到底自分は出世は出来ぬ精神的の大不具者と思ふ故、是等の惡癖は悉く消え失せ、人並の人間となる様に御施術ありたし。

之を古屋氏は詳細熱心に見終り、且其青年の外貌を瞥見す。

(三) 神經衰弱の診斷及び治療の顛末

記者が其青年を見たる處では病人と見え、身體も相當に肥満し血色もよく言語も明晰で、起居動作一も病人らしき處なし、故に記者は不思議に思ひ、虚病を作りて來たれるものかと思ひ、古屋氏に向ひ、「先生此青年は健康體の如くなるも是で病人ですか」と問ひたれば、古屋氏曰く「此青年は非常の大病人である、大病人であることは患者が何にも告げずとも一目見れば明かである、額に此筋の現れしも其一徴候である」と云ひつゝ、指したる處を見れば、眞に額の兩側に靜脈の充血せるを見た

り、又頭の兩側を手の先きにて壓し此兩側がビク／＼して居るのも又其徵候なりと云ひつゝ、古屋氏は兩手にて患者の頭の兩側を壓さへ試みつゝ、ありよりて後に記者も其處に手を當て見たれば驚くべし手の先きにビク／＼とする荒き脈波が響けり、次に古屋氏は患者の後頭頂部の處を指にて壓し「よき心持がしましよふ」と云ふと、患者は「いかにもよい心持がする」と答へたり、尙古屋氏は患者の脈と眼と咽喉及び腹部を検し「君は藥で治さんとして服むと害になる藥を連用したね」と云ふや、患者は大に驚きし面地にて「そふ云はれて大に思ひ當ることがあります」と答へたり。

古屋氏患者に向つて「平田さん此處に直立して居ると命じ、其如くならしむ、而して古屋氏は患者の耳元で何をか云ひつゝ、指を上下に動かすよと見えしが、患者は閉目して後に徐々と倒れたり、其時古屋氏は身體を手にて支へ寢臺の上に横臥せしめ何にか耳元で低聲に語れり。

稍暫くして古屋氏は一寸床間にある箱に手を觸れしと思ふや、劉々たる音樂鳴り出せり、然ると患者は目を開き起き上り、身體は全く別人の様に爽快となつた、こんなに爽快であつたことは曾て覺えがない全く生れ變りし様である」と欣喜雀躍して辭し去れり、記者の見し處によるも患者は初め來たときは憂ひの面地なりしが、施術後は實に愉快らしき風なりし。

第十九章 催眠者の諸技能超越せる現象

(軍醫北川潔氏著「科學的催眠學」より抄録)

(一) 無教育者催眠中に詩歌を作る事の眞實を確む

全然無教育にして醒覺時には何事も爲し得ざりし被術者が、催眠中に於て或は書畫を美麗に書し、或は音樂を巧に奏せし等のことは往々催眠書に記載する所なるも、予は初め甚だ之を疑ひたり。然るに催眠術家古屋鐵石氏の實驗會に數回立會ひて其事實なることを確めたり、即ち之れが實驗に供せられし被術者は丁年未滿者にして古屋氏に對する催眠ラポーは完全なり、故に容易に催眠し直に睡遊状態となり、且其暗示に感應すること極めて鋭敏なり。而して其催眠中暗示に應じ動

作せしこと毎回多種多様、且つ確實にして殆んど催眠者とは認め難き有様なり。然れども各立會者各種の試験を爲すに全然無感覺にして其催眠状態なること疑ふべからず。加之各種の技藝に堪能なること此年輩に於て如何に神童と雖ども決して望み得べからざるの程度なり。即ち種々なる樂器の奏樂、吟唱、舞踏は勿論漢詩、新體詩、和歌、發句、都々逸、各種の俗謠、繪畫何にても立會者より出題し、決して出題の内約あるに非ず、予も出任せに多數を出せり、施術者其問題を取次ぎて答作を命ずれば、立所には是を作り、且つ歌ひ或は書す、今其幾十と云ふ多數の即席答作中の二三を掲ぐれば次の如し。

催眠術と云ふ題にて、都々逸の要求に對し。

うまく人をばくどいてをいてあとにねむらすうまい術

夏帽子と云ふ題にて、狂句の要求に。

年々にかはりかはるよ夏帽子。

催眠術實驗會と云ふ題にて、狂詩の要求に。

日頃斯學極蘊奧 互約日時一堂會

口角飛泡或現妙 當夜會堂悉是神
又催眠術奧義と云ふ題にての要求に。

人心異如其顔貌 去日釋尊人異法
豈此金言法而已 臨機應變於術妙

(二) 催眠者出題に應じ即座に歌を作りて唄ひ
つゝ奏樂す

此外種々雑多なる俗謠を出題に應じて言下に作り、之を月琴或はヴァイオリンに合して吟唱し。或は阿法多羅經に作りて誦する等固より傑作秀逸はなきも、其速かなる意義の適中すること人をして驚嘆せしめたり。尙千里眼的現象其他各種の技能悉く的確なりし、而して本人は中學二三年の學力を有するのみにて、醒覺時に於て詩作は素より俗歌も案出し能はざる人なりと云ふ。此實驗例を以て催眠者に發揮する能力の如何に醒覺者に超越するかを知るに足るべし。

第二十章 念力にて催眠者を顛倒せしめたり

(大正三年五月十八日朝刊「やまと新聞」より抄録)

(一) 反抗者を念力にて左右す

十七日午後八時芝區琴平町三精神研究會の實驗會を見た、定刻となるや開會の辭に次で各會員の棒寄術、立縮術、千里眼、催眠硬直狀態等の實驗があり、最後に會長古屋鐵石氏は反抗せる被術者に向ひて巧に催眠させたる上、古屋氏は被術者より遠く離れ自分の精神に據りて或は起たせ、或は跪づかせ又は進退顛倒等種々の實驗を試みたが孰れも美事に成功し、來會者一同を喫驚せしめ同十時頃散會した。

第二十一章 催眠者の千里眼

(大正三年九月二十日の「やまと新聞」より抄録)

(一) 小膽者を大膽にすることを得る陶冶術

芝區琴平町三精神研究會會長古屋鐵石氏の主催に係る精神治療實驗會は二十日午後七時より會長方にて開催し、各會員の種々なる催眠術を實驗したる後、古屋會長は二人の被術者を硬直狀態に陥らしめたる後、會員の希望に基きて詩を吟ぜしめ、手踊或は千里眼等を實驗したる上、更に新發見の陶冶術を實驗して會員の研究に資し散會したるは同十時頃なりき。

第二十二章 ヒステリーと神經衰弱は確に癒る

(大正四年二月十五日朝刊「やまと新聞」より抄録)

(一) 居ながら青島の市街を見物さす

芝區琴平町の精神研究會では十四日午後六時から催眠術大會を開いた、集まつた人は市内の各催眠術者を始め二百餘名で、定刻になると會長古屋鐵石氏の挨拶があり、了つて會員は來會者中よりヒステリー症、神經衰弱症の人を交々椅子に倚らせて實地に催眠させ、之れに種々の暗示を與へて確に治し得る新しい研究を爲し、

更に動物を眠らせて術者の意の如くに活動させ、最後に古屋會長は被術者を歩ませ乍ら、ヒイツと一喝を浴せて其儘立竝ませ、深き催眠状態に陥入れて之れを硬直状態にしたり、舌打ち一ツで泣かせたり笑はせたり、居ながらにして青島の市街を見せて之れを報告させたりして、散會したのは九時三十分頃であつた。

第二十三章 猫を催眠せしむ

(大正四年二月十六日發行、東京日日新聞より抄録)

(一) 心身分離の現象

一昨日午後六時より芝區琴平町三古屋鐵石氏方にて精神研究會春季大會を開き、會員十餘名の研究報告及實驗ありしが、中にも被術者の心身分離状態に置き、或は術者以外の心靈に感應せしむる實驗と、猫を催眠せしめたる手際鮮かなるものなりき。

第二十四章 美女を瞬間に催眠せしむ

(雜誌「新世界」第六十五號より抄録)

(一) 居合せし女を直に深く催眠せしむ

精神研究會の古屋鐵石先生は、催眠術應用萬病治療惡癖矯正の實驗談中悲觀決死の女學生を樂觀者に轉化せしめたる最近の實話をせられ、其場に居合せたる「よか樓」(東京淺草雷門前に在り、其「よか樓」に於ての實驗なり)の女給せい子を瞬間に催眠せしめ、奇々怪々なる實驗は來賓を驚嘆せしめたり。

編者曰く此外尙數多の諸新聞雜誌に鐵石のなせる實驗の批評又は顛末掲載せられたるも、以下は之を省略す。

以上の記事は各其記者が疑ひの目を以て觀たる處を記せし者なる事と、公開の席上にてなせし實驗故専門に深く研究せし會員にのみ限つて示す處の實驗より、幼稚にして通俗なる點あることを諒せられたし。依て會員諸君の實驗にも前記の現象より一層深遠微妙のものあることは敢て珍しからざるべし。

鐵古石屋 催眠術實驗批評集終

大大大明明明明明明明
 正正正治治治治治治治治
 四四四四四四四四
 五五三十一十十十十十
 五四三二一——
 年年年年年年年年年年
 五五十一二二二九八七七
 月月月月月月月月月月
 廿十廿十十十三廿三十
 日 日 日 日 日 日 日 日
 增增七六五四三二二一一
 補補版版版版版版版版
 八八印印印印印版版版
 版版刷刷刷刷刷發發發
 行行行行行行行行行行

獨習自在 自己催眠
 上普製定價 金四拾錢
 金七拾錢



編輯兼 古屋景晴
 印刷者 中野鏝太郎
 發行所 東洋印刷株式會社
 東京市芝區琴平町參番地
 東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所
 大賣捌所

東京市神田區表神保町

東京堂

精神研究會

電話新橋一八七五番
 振替貯金口座東京三三五一番

東京市芝區琴平町參番地

古屋鐵石著

催眠宗教論

定價郵稅共
金四拾四錢

目次◎催眠論▲緒言▲物質的時代●精神的時代◎宗教は情か信か▲催眠術とは何ぞや▲(重病者即治例)●不敬者矯正例●煩悶者
救濟例●錯覺幻覺天賦通●心身相調と聯想作用▲宗教上より見たる催眠の原理▲催眠の原理(心理說)●精神靈動說(折衷說)●宇宙の
精神●不動の精神●大我と催眠状態●坐禪と自己催眠●觀法と自己催眠の幻覺●人格變換と佛教●精神力により
て無機物を左右す●催眠應用の布教▲宗教上の奇跡と催眠術の現象▲(宗教上の奇跡とは何ぞや)●三界唯一心●催眠術とは何ぞや
催眠術と佛敎の奇跡論●六神通力●天賦●神足力●宿命●他心●漏盡)と催眠術)▲催眠術と宗教との交叉點◎宗教論●宗教とは何ぞや
を同ふす●手段を同ふす●範圍を同ふす●效果は催眠の方大なり●催眠術は一種の宗教なり●學者の論争)◎宗教論●宗教とは何ぞや
▲(宗教の定義)●諸大家の定義●著者の定義●知神と信賴●安心立命)▲宗教の心理的起源▲(無常觀と弱小觀)●神人合一の努力●彼
神の分神)▲宗教の歴史の起源●靈魂崇拜)▲宗教の種類●木石崇拜●天賦崇拜)●庶物崇拜說(拜物教)●遺物崇拜(護符崇拜)●
崇拜說(動物崇拜●天賦崇拜●靈魂崇拜)▲宗教の神祕●唯一神教)●律法的宗教●倫理的宗教●宗教的發展●宗教意識發達の四階段(己の爲に
を愛す)●己の爲に神を愛す●神の爲に神を愛す●神の爲に己を愛す)●自我放棄●我があるは天功を輔けんが爲なり▲宗教と迷信
の誤謬●迷信は宗教の病的状態●迷信とは不合理なる宗教的信仰)●宗教の本質●神の直覺●不可思議超批判的事象▲宗教と科學
の衝突●科學と宗教の病的状態●科學の起原及び心理を同一にす●主張を異にする(抽象的理論的)●具體的理論的)●科學
と宗教との衝突點●科學の爲に宗教を進めし點●感情と智性との別●信仰と認識との別●宗教の境地と科學の境地●人心を支配し得る
と否との差▲宗教と倫理●目的起原と一致●國民教育と他力依憑●範圍の異同●倫理に反せる宗教あるか●倫理とは何ぞや▲宗教と科學
●教育の目的●宗教を重んじざる教育の弊●國民教育と他力依憑●範圍の異同●倫理に反せる宗教あるか●倫理とは何ぞや▲宗教と科學
●實業との意義●五時の範疇●華嚴時●阿含時●方便時●般若時●法華涅槃時)●顯密の意義●聖道門と淨土門)▲基督教●基督敎
●教義(教外別傳不立文字直指人心見性成佛)●漸進的意義(難行道と易行道)●聖道門と淨土門)▲基督教●基督敎●基督敎の本旨●
●要旨●三位一體說●神人說●原罪及び神恩說●原始基督敎所說の概観●佛基三敎の異同●佛耶二敎一致の點(世界的倫理的)●
●宗教の倫理的●合理的●社會的●宗教的效果●邪教とは何ぞや●宗教の大革命

宗教と催眠術とは目的手段範圍を同ふし、效果は却て催眠の方大也、本書を讀んで如何なる宗教を信
ずべきかを知れ。

精神研究會會長 古屋鐵石著

高等催眠學

上下合册總頁數菊大判壹千有餘頁、寫真版木版壹百拾有餘個挿入、裝釘清雅高尚

本書は著者が利益を度外に置き研究の結果を世界の學者に質し萬
世の後に傳へんと世に公にせるも從來の著者に未だ曾て見る處の斬新な研
究を以て充たせ實に此書は催眠術書としては世界第一の良書なり信す。

大歡迎

本書記載の實驗は悉く著者が幾度となく實驗したる處を學理に照して記述せし
者で、他書より拔粹せし者や想像を以て記せし者なし。本書に記載せる斬新奇
拔なる六十種の催眠法は歐米の諸大家が最近に行ひたる方法に著者が考案せる
方法と秘密とを公にせる者也。本書は拾一ヶ年間の苦心慘膽の結果になりし者
にて本書に挿入せし寫真版面に現はれし人名數百名其攝影實驗の費用のみにて
も實に莫大の金圓を要して成れる者也。如何に其絶大なるかを實見せられたし。

上下二册完結
(分册應需)
定價各册
金貳圓五拾錢
郵送料各册
内地拾貳錢
臺灣參拾錢

精神新報合冊

自第八拾六號至第九拾三號八冊合綴

大正二、三の二ヶ年間發行
の合冊也洋裝金文字入美本
定價 金壹圓貳拾錢
小包郵送料内地拾貳錢
臺灣朝鮮樺太支那 參拾錢

第八十六號目次

◎口繪(細眼催眠、三少女催眠、局部催眠の實驗寫真版)◎一事一言◎人心觀破の新法(古屋鐵石)◎催眠者の萬能行爲(古屋鐵石)◎感情の心理(文學士北村一心)◎千人が千人催眠せしむる秘訣(古屋鐵石)◎陶宮術獨習自在(陶宮術大家牛山猛雄)◎半身催眠の珍現象(古屋鐵石)◎催眠術の大進歩(會員佐藤公明)◎催眠術で癒る色盲談(醫學士石原忍)◎催眠術大意(會員谷中三武)◎神經衰弱治療の實驗(會員永山善治)◎催眠應用千里眼の實驗(會員李達莊)◎喘息及痲瘋全治の實驗(會員津田常次郎)◎歇私的里全治妙法(醫師遠藤知明)◎蜘蛛を催眠せし方法(矢野數衛)◎催眠術大實驗會の模様◎高等催眠學刊行に就て◎地方委員囑託◎奇怪千萬の現象◎葉書集と短文集◎廣告

第八十八號目次

◎口繪(女催眠術師催眠治療を行ふ處、華族會館に於ける東洋心理協會發會式に參列せる一同、催眠者難を幽霊と錯覺せる處、催眠者の音樂合奏)◎印度哲學の四無色と催眠状態(東洋大學稻村修道)◎思想の移送(テレパシー)(文學士北村一心)◎自動的人格變換の珍現象(醫學士明月居士)◎プランセットの大活動(精神哲學專攻無想女史)◎陶宮術獨習自在(陶宮術大家牛山猛雄)◎神經衰弱全治實驗(本會夢幻散史)◎不思議な麻酔劑(理學士水澤喜之一郎)◎本誌創刊拾週年の記念◎催眠術無料治療無料教授開始◎本會にて行へる催眠術實驗に就て新聞雜誌の批評◎術者の暗示に反抗する催眠者◎覺醒せしむる事を得ざる催眠者◎江間俊一氏觀山法師を驚かす◎地方委員の囑託◎寄贈金品拜受◎雜報

第八十七號目次

◎口繪(精神學大演說大實驗會の光景、嶄新なる強直狀態實驗の寫真版)◎嗚呼精神の修養なる哉◎催眠術者に對する一大警告(會友竹原岑藏)◎思ひを夢にて知らず(會友北榮壽)◎奇々妙々のプランセット(會友馬場恆次郎)◎陶宮術獨習自在(陶宮術大家牛山猛雄)◎高等催眠學を讀んで(會友齋藤覺三)◎古屋鐵石の催眠術實驗に就ての諸新聞の評◎全國精神治療協會の組織◎地方委員の囑託◎高等催眠學の刊行に就て◎神經衰弱の治療に就ては須く忍耐を要す◎ハガキ集◎新刊批評其他

第八十九號目次

◎口繪寫真版(明治大學校の演說會、止動狀態の珍現象、犬と天然鼠の催眠)◎潜在精神と修養の關係◎神代に行はれたる暗示(至真教會長川上清澄)◎心神之狀態(東洋心理協會長江間俊一)◎無神論者有神論者となせし實驗(文學士武井愛水)◎心力應用活殺自在法(山本隆一)◎念寫の可能(文學博士福來友吉)◎念寫は未だ信ぜぬ(後藤牧太)◎念寫は先づ事實を確めよ(文學博士井上哲次郎)◎福來博士を驚かしたる不思議な現象(河西敬義)◎朝鮮に大成功せる會員の實驗報告(李景薫)◎氣を發する動物◎催眠術で拾壹萬圓を儲けし會員の囑◎其他片々雜報數十件◎古屋鐵石日誌の壹節◎新刊紹介

第九十二號目次

◎口繪寫真版(催眠術實驗二個、古屋主筆肖像四個)◎成功の秘訣◎不老長壽の新説(醫學博士志賀潔)◎歐南が健康上必要なる所以(醫學博士松下禎二)◎透視念寫寫念動の根源(文學博士福來友吉)◎暗示授與上の新法(ドクトル山田平八)◎灸治は如何なる效あるや(醫學士原田重雄)◎不思議な精神病を治したる實例◎女催眠術師頑固な繼母を矯正す(武田信之)◎人相判斷の奧義(其一)◎姓名判斷の秘訣(其二)◎催眠術大講演大實驗會の光景◎地方委員囑託◎催眠術逆手の發見◎感化事業と催眠術◎結核征伐の歌◎精神現象と血液關係◎最新神經衰弱療法◎信用ある精神治療家◎完全なる無念無想◎人生の目的◎會告◎記者外出日誌◎書籍內容紹介◎其他數十件

第九十三號目次

◎口繪(精神學應用人格變換の寫真四葉)◎精神の實際物質の實際◎神經衰弱ヒステリー精神療法(醫學博士今村新吉)◎文藝界に現はれたる心靈學(ドクトル麻溪堂郎月)◎驚愕すべき催眠術治療の效果(ドクトル横山一如)◎プランセットの動く原理(文學博士福來友吉)◎生殖器病精神療法(醫學士上杉夢想)◎眞言秘密の法(眞言宗聯合大學上田圓照)◎人相判斷の奧義(其三)◎姓名判斷の秘訣(其二)◎質問應答數件◎精神療法實驗懇談會◎讀岐支部の盛況◎地方委員囑託◎催眠術に掛りし程度を知る法◎實驗食養法◎靈感療法◎感激療法◎人生觀◎世界觀◎精神交接精神生殖◎精神作用に伴ふ生理的變化◎精神と電子の關係◎精神研究會正會員◎會員消息◎交換會◎書籍內容紹介◎外數十件◎精神治療受術者心得(主筆古屋鐵石)

第九十號目次

◎口繪寫真版(催眠術實驗の光景と本會應接室の光景)◎昨年は吾人に如何なる教訓を與へしぞ◎催眠術治療を受け屹度癒る法◎日本刊行の催眠術書籍の批評(精神研究會圖書課)◎催眠術大講演會の光景(石川秀熙)◎神經衰弱に對する催眠治療の價值(精神研究會治療部)◎催眠術を馬鹿にして受術せし病人可驚強健者となり(關根沖右衛門)◎精神研究會にて納め來りし催眠術教授治療の税金◎公衆の前にて實驗するときは質問をば絶對に許す可からず◎本會に於ては催眠術實驗會は今後毎月開かず◎地方委員囑託◎雜報數件◎世界の學者を驚かしたる催眠現象

第九十一號目次

◎口繪寫真版(催眠術實驗六枚室内景一枚)◎容易に施術を引受くべからず◎世人は催眠術を誤解せり◎潜在精神の動力(古屋鐵石)◎精神分析學の紹介(醫學博士榊保三郎)◎幽霊の正體(文學博士井上圓了)◎高等催眠學講義録に就て(古屋鐵石)◎神經衰弱精神療法(精神病學專攻勝部龍之助)◎自己催眠法(文學博士福來友吉)◎催眠術大活動寫真◎「心靈の秘密」を讀む◎科學的催眠學を讀む◎催眠術大演說大實驗會◎地方委員囑託◎精神力の速度◎精神力測定器◎腫物治療の實驗◎氣合術にて齒は抜ける◎五萬圓の寄附◎鐵石の愛嬢◎念動及念縛◎自體より電

正一位伯爵土方久元閣下題
法學博士磯部四郎閣下序

辯護士名合孟先生序
古屋鐵石著

(菊大版壹百拾八頁)
寫真版挿入

宗教奇蹟研究

定價郵稅共
金四拾四錢

奇蹟現象と催眠現象
象と現
はと現
致せ一
以る所
論ぜ

讀賣新聞
國民新聞

目次

一、總論
二、催眠術と奇蹟との關係
三、宗教の奇蹟との關係
四、新舊二聖書中の奇蹟概観
五、耶穌の行ひたる奇蹟概観
六、葡萄酒變じて血となりパン變じて肉となる奇蹟概観
七、冷水變じて葡萄酒と化する奇蹟
八、海上を歩行し波濤を靜止す奇蹟
九、心力を木を枯らす奇蹟
十、死人を蘇生せしむ奇蹟
十一、惡鬼を追拂ふ奇蹟
十二、雲中より神聲を發せしむ奇蹟
十三、魚口に金を生ぜしむ奇蹟
十四、藥を用ひず重病を治す奇蹟
十五、佛敎經典の奇蹟概観

二、釋迦の行ひたる奇蹟
一、魔女を消滅せしむ奇蹟
二、提婆を不動金縛となす奇蹟
三、極樂世界を眼前に現はす奇蹟
四、六神通力を行ふ奇蹟
五、佛敎各宗の奇蹟
六、木像首を動かす(臨濟宗)
七、刀刃段々に壞はる(日蓮宗)
八、繩の頭端を顯はす(眞言宗)
九、空中に彌陀佛の像を現はす(眞言宗)
十、飛行自在の通力を示す(修驗道)
十一、奇々妙々の事を行ふ(天台宗)
十二、毘沙門の蛙を止む(淨土宗)
十三、幽霊の出沒(曹洞宗)
十四、引道を行ふ(眞言宗)
十五、坐禪を行ふ(禪宗)
十六、神道の奇蹟概観

二、神道各派の奇蹟
一、探湯式を行ふ(御嶽敎)
二、交霊術を行へり(天理敎)
三、重病者を即治せり(黑住敎)
四、忽ち雜念を去らしむ(禪敎)
五、思ふ法の行ふ(大社敎)
六、一目の法を行ふ(修成派)
七、一生の事を行ふ(修成派)
八、守札の靈驗著し(神智敎)
九、福を未發に防ぐ(神智敎)
十、火渡を行ふ(大成社)
十一、幽明界を明にす(扶桑敎)
十二、家運長久家内安全ならしむ(實行敎)
十三、萬物一體の觀を現はす(丸山敎)
十四、疾病を治し幸福を得せしむ(蓮門敎)
十五、結論

曰く 耶蘇釋迦乃至佛敎十一宗神道十五派の奇蹟を研究して其事實にして實驗し得べきものなるを説けり……曰く古今宗教史に見えたる宗教上の奇蹟を佛耶神三道に渡り實例に徴して一々其理由を説破せんと試みたり云々……

催眠術界の大發明

農商務省特許局實用新案登録一九七〇九號

新複式催眠球案

定價郵稅共
金八拾四錢

誰でも此機械を使用し研究すれば人を催眠せしむる得、且淺き催眠を深き催眠とする方法書を添へり。

注意 此器械を偽造し又は偽造品模造器を販賣擴布若は使用したる者は實用新案法第四十條により十五日以上一年以下の重禁錮又は十圓以上二百圓以下の罰金に處せらるべし。

此球は生理學の原因によりたり目を疲勞さしたりする如き卑近の者に非ず、哲學及び心理學の應用によりて成る高尚の者也、然るを此球を中傷して裁判所に手數をかけし注意肝要。

伊藤公爵題 井上博士序 高波博士序 (既)
 東久世伯爵題 松本博士序 山崎博士序 (刊)
 土方伯爵題 磯部博士序 古屋鐵石著 (刊)

催眠術寶典

總頁數菊大版壹千貳百六十八頁(寫真版六十四個石版摺 二頁木版二十七個插入)

此書は催眠術の奧義を諸方面に涉りて詳細叮嚀に記述しあり、催眠術が思ふ様に成功せざる者及び催眠術家にして更に極意を探知せんとする者、之を詳讀せば積年の疑問は悉く氷解するならん、實に此書は催眠術書としては破天荒の大著にして未曾有の良書也。

製本美麗莊嚴
 背皮金文字入箱附
 定價 金五圓
 小包郵送料

市内 金八錢
 内地 金貳拾四錢
 臺灣、清國 金四拾五錢
 朝鮮、樺太

薰習術の大發見

文學博士 井上圓了先生序文
 薰習術開祖 大野美惠丸先生口述

特別減價金五拾錢

催眠學 薰習自講話

菊大判貳百九頁、總クロース
 金字入、用紙、最上頗る美本
 定價 金八拾錢
 郵稅市内金四錢、内地金拾貳
 錢、臺灣、朝鮮、樺太、支那金
 參拾錢

由來 本書は著者多年の研究に依り、東洋哲學と西洋哲學との學說を參考し純正哲學の中間に薰習哲學なる一科を別開し、之を薰習術と名く、薰習術とは催眠術讀心術觀氣學と心理哲學との中間に薰習哲學なる一科實地に應用し、術隨身術魔術神通術等の總稱にして、學理と方法とを示せる。井上博士に序學理の構成が、大野君の創見新案より頗る斬新なるを覺ゆ、空前の大議論、最新の學說たるを知るべし、催眠術及び精神治療等の心靈學研究者の參考書として最も良書なり。

古屋鐵石著 催眠術治療法 一名催眠術自宅療法

醫藥にて治療の道なき自己又は他人の重病悪癖を催眠術にて治療し得る奥義を詳述せり、何人にも此書に基き研究せば直に實行するを得、奏效は確實、無害安全なり、附録には「催眠術教育法」「新療法オステオパシー」「不承諾者催眠論」を掲載せり、真に家庭の寶典也。

▲洋裝菊判一百頁、定價郵稅共四十四錢▼

醫學士志賀先生著 催眠診斷學 一名簡易診斷學

凡そ治療が效を奏するか否やは診斷の適否によりて決す、然るに催眠術治療を行はんとする者に於て診斷學の素養毫もなければ治療の效果舉らざるや當然なり、本書は此弊を矯めんが爲めに催眠術にて治し得る病氣の診斷法を醫學の素養なき者にも解し得るやう説述せり。

▲洋裝美本 價郵稅共參拾錢▼

出世之近道 男東京に自活する法 女東京に自活する法 附田舎生活副業法

小學卒業の學力にて一文無しにて郷關を出て、上京し、獨立自活しつゝ、學を修め名を擧げんと欲する者は必ず讀め、附録として田舎の自宅に居りながら本業の餘暇に小遣錢を得る方法を記せり。

▲洋裝菊版 定價郵稅共貳拾貳錢▼

古屋鐵石著 (既刊)

男女運命豫知術 一名プラシット術

菊大判九拾貳頁寫眞版木版挿入 價郵共四拾四錢

プラシットとは何ぞや○プラシットとは何ぞや○プラシットの沿革○日本に於けるプラシットの類○プラシットに類せる術○人格變換術○人格と性格との別○人格變換の根本的事實○數個に分裂したる人格○催眠術による人格變換の實例○狐狗狸術○コックリの構造○使用法と原理○井上博士の實驗と學說○机轉術(テイアルトルニンク)○机轉術を行ふ方法○ゴットフレイ氏 元良博士の實驗談○論理○自動書記術(オートマチック、ライテンク)○自動書記の現象○福來博士の說○カーネ氏の實驗○著者の實驗○自動書記による天眼通的實驗○高島平三郎氏の說○水晶凝視術(クリスタルゲーシング)○水晶凝視とは何ぞ○水晶凝視を行ふ方法及び其效果○原理○心讀術(サイコメトリー)○心讀の現象○其方法○平井金三氏の說○理論○鬼術(スピリチュアリズム)○鬼術の現象○幻妙不思議○井上元良博士の說○プラシット使用法○金と女とに對する運命とプラシット○米國に行はる、使用法○金と女とに對する運命とプラシット○米國に行はる、使用法○配偶者の選定方法○金儲の成否を占ふ法○米相場の高低を前知する法○配偶者の選定方法○如何なる配偶者に縁あるかを占ふ法○病氣の治法を占ふ法○如何にせば目的を達するかを占ふ法○農産物の豊凶を前知する法○金と女との不足を醫する法○女の心を知る法○吉凶の前知を占ふ法○驚春○アの過信を避くべき事○プラシット實驗例○外國大家と我國人との實例○平井金三氏と朝比奈米作氏との實驗○プラシットの活動する原理○福來博士の說○潛在的精神とは何ぞや○精神分裂とは何ぞや○信用厚き學者の說(參考書名)

(精神研究會發賣書目)

古屋鐵石著 (既刊)

驚天 動地反抗者催眠論

菊大判壹百頁寫眞版木版挿入 價郵共四十四錢

緒言○反抗せる鳥獸を催眠せし實驗○反抗せる人間を催眠せし實驗○反抗者を催眠せし實驗○暴行せる狂人を催眠せし實驗○反抗者に手を觸れずして催眠せしめし實驗○心と心と談話せし實驗○催眠術を施さるゝことを知らずして遠く離れ居る者を催眠せし實驗○不承諾者を催眠せし實驗○術者と患者と遠く離れ居りて催眠治療を行ひし實驗○諸博士立會の上遠方に居る者を催眠せし實驗○被術者反對に施術者を催眠せし實驗○麻酔薬を用ひて行ふ催眠法○大家の常に行ふ催眠法○メスマルの催眠法○プレートの催眠法○マルンハイムの催眠法○リエボアの催眠法○シャイコーの催眠法○イズテールの催眠法○フアリアの催眠法○ホーニスの催眠法○ゲエツタデールの催眠法○ヴァンイーデン及びヴァンレンターグヒムの催眠法○リッツイエトの催眠法○ルイスの催眠法○ヴァイレンの催眠法○アラムウエルの催眠法○メルケルの催眠法○ラセムの催眠法○レンターシムの催眠法○フロロアの催眠法○ゲスマムの催眠法○リシガアの催眠法○ハンセンの催眠法○熊代先生の催眠法○福來博士の催眠法○結論

一三

眞寫版刷參枚壹組 價郵共拾貳錢

催眠術繪葉書

扁額用美麗高尚 價郵共拾貳錢

催眠術實驗寫眞版刷

兩者共不可思議至極なる催眠現象を實地目前に見る感あり、催眠術の研究及び普及上に缺くべからざる好資料也

パーキンス博士發明品模造

催眠治療具

金屬製美麗高尚 價郵共七拾貳錢

催眠術治療を行ふとき本具を使用すれば無効に終るべき場合にも大效を奏するこ
とあり。

内務大臣御届濟

催眠精神治療券綴

價郵共金五拾四錢

催眠術治療をなさんとする者は必ず本綴を具へ、患者に本券を切り離して與へ、其券へ患者自身にて住所姓名及び病癩の有様を記入せしめ、術者は其れを受取りて後施術すれば、警察犯所罰令に觸るゝ虞なきのみならず、ヒヤカシに催眠術治療を申込む者を避くるの利ありて便利なり。

自第七拾號至七拾七號八册合綴

精神治療新報 合冊

クロース金文字入 價郵共壹圓貳拾錢

自第七拾八號至八拾五號八册合綴

精神新報 合冊

クロース金文字入 價郵共壹圓貳拾錢

精神治療新報は精神新報の前身にして、共に催眠術研究に志ある者の見逃すべからざる新研究を滿載せり。

博士學士數十名論集

不思議の研究

菊大判一百二十二頁 價郵共四拾四錢

催眠術研究上必要なる諸問題に就き、現代に名高き文學、醫學、理學、工學、法學、農學等の諸博士參拾有餘名及び學士大家拾數名が積年研究の結果に成れる珍説高論を集録せるものなり。實に本書は精神學研究材料の寶庫也。一度其論を開かば各方面に涉れる材料の無盡藏なるを喜ばるゝならむ。

松本天籟先生著

靈魂不滅論

定價金拾五錢 郵稅金貳錢

近頃は靈魂とは如何なる者なるか、且其靈魂は滅する者か否かの大要を心得置かざれば心靈に關する斷を斷する資格なしと一般に認むるに至れり。而し靈魂の問題は六ヶ敷して容易に解せられず、然るを松本先生は何人にも此問題を明に解し得る様面白く簡易に説述せり。

(精神研究會發賣書目)

古屋鐵石著

催眠宗教論

菊大判一百二十六頁 郵稅共四拾四錢

催眠術と宗教とは車の兩輪の如き關係あり、催眠術を研究せんとする者は宗教と催眠術とは如何に其目的手段及び方法を同ふせるかを明にし、且諸宗教の大意に通ぜざれば眞に催眠術の効果を擧ぐることを得ず。依之本書は獨り催眠術家が歡迎するのみならず宗教家が競ふて讀破する所以也。

專門學士數名分擔執筆

催眠術教科書 上中下

菊大判總紙數四百〇六頁 價郵稅共壹圓六拾貳錢

催眠術を簡易速成に覺へんとする者の爲めには唯一無二の良書なり。説明は詳密平易にして直に實驗することを得。本書は何等の學歴なき者が小遣取に書いた者と異り、斯學に經驗の高き諸大家が眞面目に親切に丁寧な説述し、讀者をして毫も遺憾なからしむ。

農商務省實用新案登錄簿
●複式催眠球 價郵稅共 八拾四錢

博士學士五十有餘名論集 菊大版一百一十二頁
●不思議の研究 價郵稅共 四拾四錢

パーキンス博士發明品模造 (金屬製品)
●催眠治療具 價郵稅共 七拾貳錢

古屋鐵石著
●新神經衰弱獨療法 價郵稅共 貳拾貳錢

明法學士兩宮良作先生著
●文章取縮法規詳解 價郵稅共 貳拾錢

寫真版刷三枚 壹組
●催眠術繪葉書 價郵稅共 拾貳錢

古屋鐵石著
●催眠術治療法 價郵稅共 四拾四錢

年四回(春夏秋冬)發行(精神研究會機關雜誌)
●精神新報 價郵稅共 拾五錢

醫學士 志賀光雄著
●催眠術診斷學 價郵稅共 參拾錢

精神新報前身八册合卷上等製本
●精神治療新報合冊 價郵稅共 壹圓拾錢

兩宮、古屋兩學士著(雜誌增刊)
●煩悶消失快樂增進法 價郵稅共 拾四錢

雜誌增刊
●健腦術 價郵稅共 七錢

古屋鐵石考案 (金屬製品)
●催眠疑視球 價郵稅共 六拾錢

井上圓了博士序 大野美惠丸著
●催眠學薰習講話 價郵稅共 九拾貳錢

米國製模造品 (臺灣清國は資料參拾錢)
●フランセツト 定價五拾錢 送附拾貳錢

獨立亭成功者 (附田舍生活副業法)
●男女東京に自活する法 價郵稅共 貳拾貳錢

井口松之助著
●柔術劍棒圖解秘訣 價郵稅共 參拾四錢

內務大臣御肩濟 (精神治療家必携)
●催眠精神治療券綴 價郵稅共 四拾四錢

松本天籟著
●靈魂不滅論 價郵稅共 拾貳錢

古屋鐵石著
●獨習坐禪之奧義 價郵稅共 拾五錢

東久世伯爵題 高波博士序 古屋鐵石著
●催眠術獨習古 價郵稅共 四拾四錢

八册合卷總クローヌ金文字入
●精神新報合卷 定價小包料共 壹圓貳拾錢

高野等
●催眠學施法篇上下合冊 價郵稅共 九拾錢

編額
●編額催眠術實驗寫真版 價郵稅共 拾貳錢

上野文學士著 (教科書上卷に合冊)
●催眠心理學 價郵稅共 五拾錢

古屋鐵石著 (教科書下卷)
●催眠法津論 價郵稅共 五拾錢

古屋鐵石著
●催眠宗教論 價郵稅共 四拾四錢

古屋鐵石著
●腦及神經記憶力增進術 價郵稅共 四拾四錢

古屋鐵石著
●坐禪獨習法 價郵稅共 四拾四錢

古屋鐵石著
●獨習自己催眠 價郵稅共 四拾四錢

古屋鐵石著
●驚天反抗者催眠論 價郵稅共 四拾四錢

土方伯爵題 磯部博士序 古屋鐵石著
●宗教奇蹟研究 價郵稅共 四拾四錢

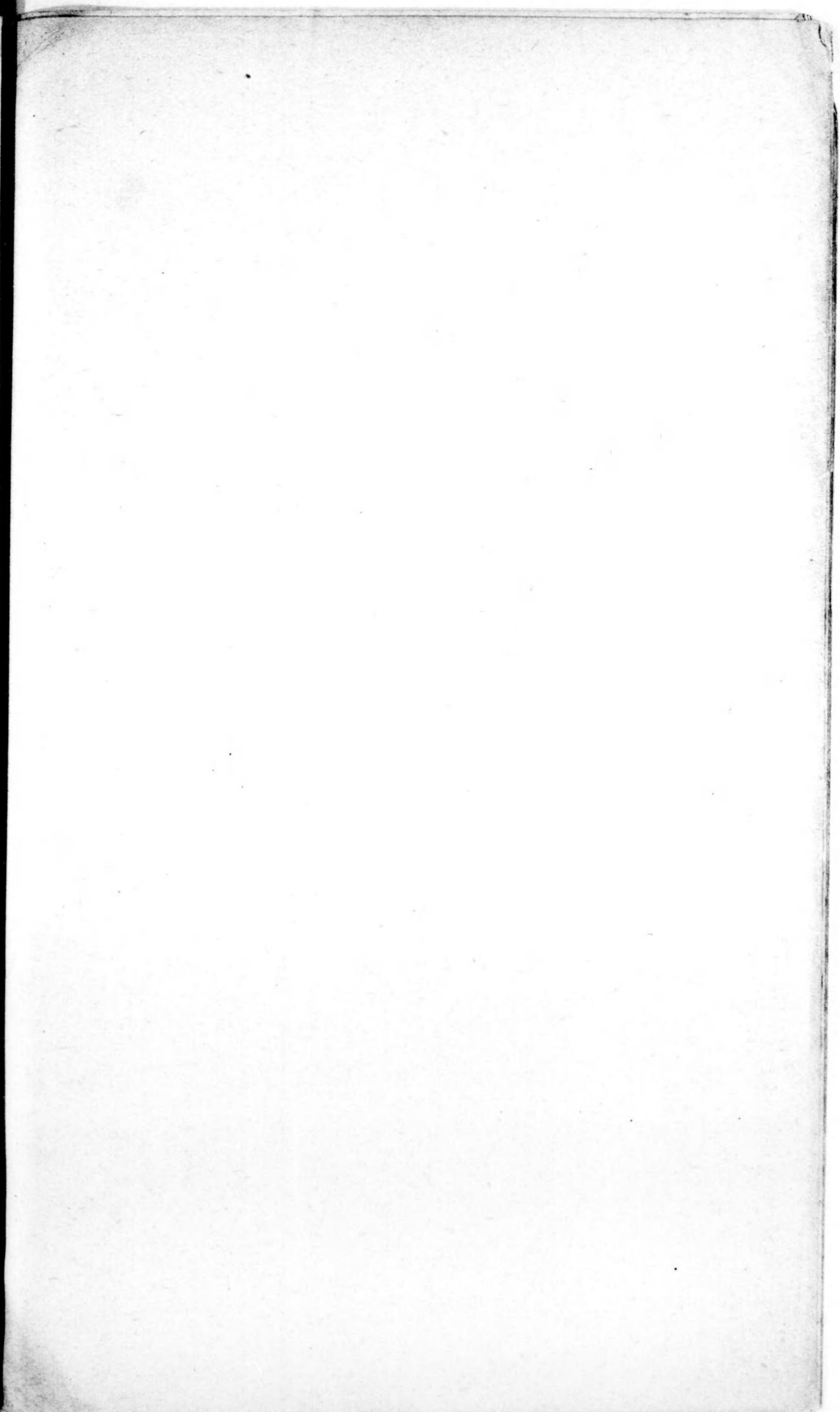
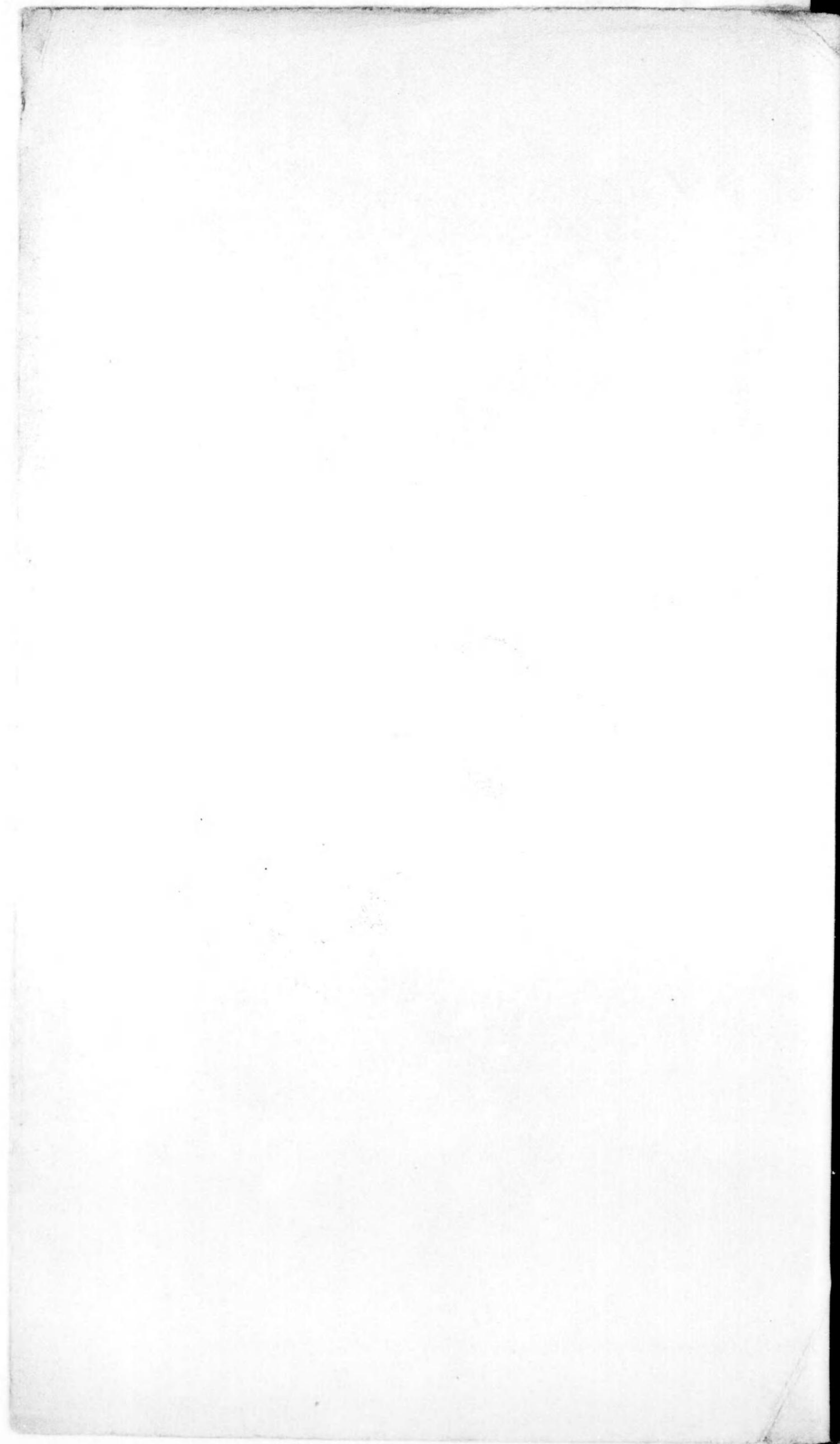
古屋鐵石著
●男女運命豫知術 價郵稅共 四拾四錢

伊藤公壽題 井上博士序 古屋鐵石著
●驚神的大魔術 價郵稅共 六拾四錢

嘉納講道館長題 松本博士序 古屋鐵石著
●氣合術獨習法 價郵稅共 五拾四錢

東久世伯爵題 古屋鐵石著
●學理家庭禁厭術 價郵稅共 四拾四錢





終

